

---

# Puzzlingly Number 's

鳴月 常夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Puzzlingly Number's

### 【Nコード】

N8243M

### 【作者名】

鳴月 常夜

### 【あらすじ】

科学技術の進歩によって人とほぼ同じ性質を持った者、numberが作り出された。政府による提案のもと、このままでは食糧難となるこの国を救うためのものであったが、それに影が差す出来事が次々と起こる。一方、この物語の主人公である桜参 亮は人間とnumberを差別しない科学技術者を父に持つ高校生。何よりも人間とnumberの平等を望み、心温かい少年。しかし、その出来事に巻き込まれていくにつれて世界を知り………？

## No.01: number (前書き)

number……人間とほぼ変わらない作られた生命体。

製品番号……numberの身体のどこかに刻まれている数字と英字。

桜参亮……この物語の主人公。科学技術者の父を持つ、差別を許さない。人間

鵜川月乃……金髪ツインテールの美少女であり、亮の幼馴染。ドSである。number

谷枝……一言で表すなら『変態』。DMの称号を持つ。人間

岩沢蓮……茶髪ツインツンの亮の友達。チャラく見えるがお洒落なだけ。number

科学技術の進歩。それはこの世界に最も大きな影響をもたらしたもののといえる。

豊かな暮らし、細かく分類するとしたら安全であること便利であること平等であることなどがあげられるだろう。しかし、その一方で逆の影響をもたらすこともある。便利になりすぎた世の中、環境への悪影響など。人間はほとんどできないことはなくなってきていた。だが、環境への悪影響や農業営業の人員不足などにより食料不足になることは明らかだった。

流石の人間も、生命を一から作ることはできない。機械生命体アンドロイドのようなものは別として。

そんな中で政府は一家に子供は2人までといった政策をとり、それと並行して疑似人間、つまり人間のような知能を持ち合わせ、外見も肉体も人間そのものそれであって感情を持ち合わせている限りなく人間に近い存在を作り出すよう申請した。

技術者によれば、時間はかかるが可能だという話であった。生きた細胞をまとった機械。人工知能を搭載した生命体。

まるでどこかの映画のような話だ、と笑っていた者もいたであろう。俺もその当時に生きていたら笑っていたであろう、その者たちは現物を見ることがすらできなかったからやっぱりこの時代に生きていてよかったとは思っただが。

話はずれたがこれは今から100年も前の話だ。

当時の人間はこんな日が来るなんて思ってもいなかっただろう。

人類と機械の共存。人間は完璧に成し遂げたのだ。

それが今の話、俺が生きるこの世界の話。

今では人間と人工生命体、世間ではnumberと呼ばれるが、全く見分けがつかなくなっている。

確かめる術はnumberの体のどこかには製品番号コードのようなもの

が刻まれているのでそれを見つけることだ。

それも今は簡単ではなくなつて、numberにも人権というものが存在するようになり、人間と同等の扱いを受けることとなる。だから暴力やセクハラでnumberも訴えることができるのだ。それは逆もしかり。

numberの中には人間に生まれたかつたと思うものもいたかもしれない。そんな奴は製品番号コードを隠していたりもする。

しかし、簡単ではないのはやはり人間の方。差別というものは必ずしも存在するのだ。

number差別、というものが流行つた時期がある。それはどうして機械に対して平等に接しなければならぬのかといったものだった。人が作り上げたものなら良いだろう、という考えでもあった。それに対して抗議したのが科学者技術者の者たちだった。

結果は科学者技術者たちの大勝。numberと人間は平等であることとされた。

それでも変わらないというのが現実。今も差別は残っていたりする。それがこの世界。それでも明日はやってくる。毎日は変わらずに過ぎていく。

私立舞桜高等学校。それが俺の通う高校であつた。

全校生徒500人教職員50名といった、結構有名な学校だったりするのだ。

今は始業式の真つ最中で、ステージの上では校長がなにやら熱弁しているようであつた。

大半の生徒はそれを聞き流しておしゃべりに夢中になっていたりケ

「タイをいじったりしていた。

ぐるりと周りを見渡してもそんな奴ばかりである。学力は中の上あたりの学校なのだが、校則がかなり緩かったりする。

そろそろ立っているのが疲れてきたころ、ぎゅむりと踵が踏まれる感覚が生まれた。

「というかアキレス腱辺りを重点的にやられている。間違いなくドのつくS。そんな奴の正体なんて俺の知り合いで一人しかない。

「ちよ、月乃。アキレス腱は駄目だと思うんだ、俺は」

鵜川 月乃つきの、俺の古くからの幼馴染であり暇な時になると決まって俺に攻撃を仕掛けてくる。こいつのおかげで体が丈夫になったのは秘密である。

作り物のような綺麗な金髪を二つに縛ってツインテールと呼ばれる髪型にしており、かなり整った顔立ちをしている。睫毛も長いし肌も綺麗だし瞳だって吸い込まれそうなくらいに綺麗だ。最後に彼女の左頬にはアルファベットと数字が刻まれている。E - 4 2 9 6 0 7 8 J、これは製品番号コードである。

彼女はnumberだ。

「暇だから暇つぶし。亮がどんな反応するのか楽しみで、ね？」

ニコッ、と初めて見る者なら間違いないく一目惚れするだろう天使のスマイルは生憎俺には効かなかつたりする。それは裏にDSの顔が隠れていることを知っているからだろう。

その間にもぎゅむむ、ぎゅむりと踵を踏まれ続けている。

「痛、痛いつ！ そんなに踏みたいならDM代表の谷枝たにえだを踏めばいいだろうがっ」

谷枝は俺の右斜め前に並んでいる、小太りしたメガネ男。

2年生になり、クラス替えを行ったときに同じクラスになり先ほど知り合ったのだ。

先ほど知り合ったのになぜDMという真実を知っていたかというところ、第一声が『はあはあ、桜参君って鵜川さんと知り合いなんだよね？』ど、どうか今度僕を蹴ってもらえるよう頼んでもらえないかな…

…ぐぶぐぶぐぶ』だったからである。最悪の出会いだった。

「いやよ、あんな奴気持悪い。それに私は嫌がつている亮をいじめるのが好きなの」

完璧なるドSとはこのことを言うのだと俺は理解した。しかし、これでまたアキレス腱が鍛えられるな………なんだが複雑なんだが。

「桜参亮<sup>さくらまさはる</sup>。君はなんてうらやましいんだ…」

見れば谷枝がこちらをうらやましそうに眺めていた。つうか今すぐ変わってくれ。

そのほかからも視線を感じたが、それは月乃に好意を抱いているものであるう。こいつは頭もいいし容姿もいいからモテるんだらう。

それならば俺から離れて誰かとくっついてしまえばいいと思うんだが。

ぎゅむり、ぎゅむぎゅむ………。どうしてだらうか。

いろんな意味で疲れた始業式が終わり、各自教室に戻ることもなかった。

こうして周りを見渡してみると少しはnumberが確認できる。

手の甲、首の後ろ、腕………などに製品番号<sup>コード</sup>が刻まれている。月乃のは特別なケースで、顔には普通は製品番号<sup>コード</sup>は刻まれない。まあ、その容姿にアクセントといった形で一部マニアには受けるのだからと思っただけれども。

この学校に何人numberがいるのかはわからないけども、差別は必ず存在する。そう、すぐ近くに。

俺にはnumberを守る義務があるのだと父さんは言う。それは父さんが科学者だからそう言うのだ。でもそのおかげで小さいころから俺の周りにはnumberがいたので差別なんて言葉は今になっても出てこない。

それはとてもいいことだと思う。それならばお前が守ればいいのだ、と父さんは言う。確かに差別はしていないけども、考えたことさえないけど、そんな勇氣や力が俺にはあるのだからかとたまに思ってしまう。でも俺はできる限り行動してみたいとは思っている。

そんな思いにふけてしていると、肩がぶつかつた。

茶髪ロングの制服改造、指にはリングがいくつかはまっていた。

「いってえなあ……。てめえ、気をつけるよ？」

この学校では専ら噂になっっているいわゆる不良と呼ばれる奴らだったが、とくになにもされなかつた。

「ひひひっ！ マコトさんの機嫌が良くて助かつたなあ、お前」

取り巻きの一人が俺にそう言って過ぎ去っていった。

周りの人が安堵のため息をついたのが分かつた。それだけで俺がどれだけの状況にいたのかが理解できた。

「おいおい、亮。あつぶなかつたな」

俺の目の前に音も立てずに現れたのは岩沢 蓮。こちらも茶色に染

め上げた短髪であるが、別に不良ってわけではない。校則で禁止されていらないから、ファッションの一環として染めているだけなのである。いつも通りのツンツン頭である。ちなみにこいつも number。

確か、背中辺りに製品番号は刻まれてあつたはずだ。

「あいつら今日停学明けたばかりなんだつてよ。運がよかつたなあ」  
周りの人が微妙な感じでこちらを見ていた。また絡まれているのではないかと心配されているのだろうか。また絡まれているので

「とりあえず教室戻ろうか、なんか俺絡まれているみたいに思われているからさ」

「なに！？ 俺は不良じゃないからな！？ 誤解するなよ周りのみなさん」

適当な奴に喋りかける蓮。『は、はあ……。』と曖昧な返事を返されるだけだったが。

教室へと向かう途中、アホの子が突然言い出した。

「俺らもさ、もう高校2年生なんだよな。ここいらで年齢「彼女いない歴つてのは結構厳しいもんだとは思わないかな、亮」

「いきなり何を言い出すかと思えば……。進学の話とかほかにすることないのか？」

「おーおー、取り繕ったって無駄だからな！ 男は……。そう、みんな獣なんだ」

周りの女子たちがサッと引いて行くのが分かった。

そりゃあ廊下のご真ん中でそんなこと堂々と言われたらねえ。

「まあ、その話はわかったから早めにやめないとそろそろ視線が厳しいよ」

周りからジト目で見られていることに今気づく蓮。

「うっ……。おお、よし、早く教室へ行こう」  
賢明な判断だった。

教室に着くと、ほとんどの生徒がもう席に着いており、空いているのは俺の席と蓮の席ともう一つだけだった。先生は教壇の上で仁王立ちをしていた。ちなみに女教師である。

「早く座りなさい、……。あとは一人だけね」

先生は空いている席を眺めながらそう言った。そして視線を出席簿に戻すと、出欠を取り始めた。

「鵜川 月乃さん」  
「はい」

後ろの席から声が聞こえた。ん？後ろの席から？

振り向くとそこにはツイントールの金髪美少女が座っていた。

しまった  
と思った。その表情が顔に出たのか、彼女はニコオと笑った。

俺の前に座っている男子生徒がこちらを振り向いていた。彼は勘違

いして月乃に笑いかけた。

他人から見ればエンジェルスマイル……か。

しかし、俺にはこう解釈できた。

『私の前の席でよかったわね？　これから毎日授業中いじめてあげる』

九割方正解だといつても過言ではないだろう。

ちく、とシャーペンが背中に突き当たった。

「おわぁ！」

思わず叫び声をあげてしまい、クラス中の注目を浴びる。

「どうかしましたか？　桜参君」

怪訝そうな顔で教壇に立つ先生は俺にそう問いかけた。

「う、……。いえ、なんでもありません」

クラス中が軽い笑いに包まれるなか、笑っていない奴が2人ほどいた。

もちろん月乃と谷枝である。

月乃は魅惑のエンジェルスマイル、谷枝はうらやましそうな目で眺めてる。

頼むからマジ変わってください。そう思う俺だった。

そんな日常生活が始まる。

その平和の先に何かあるかもわ

からずに

## No.01: number (後書き)

どうも、鳴月 常夜です。性懲りもなくまた新作を出すことに決定いたしました。

もう片方のTo the way of the mirrorも完結していないのになんということだっ！とお思いになる方もいらっしゃると思いますが、どうか温かい目で見守ってくださいと鳴月は喜びます。

さて、今回のお話はなんと前に一度投稿したことのあるものです。覚えていない方がほとんどだとは思いますが、キャラクターなどの名前はほとんど変わっておりませんので、もしかしたら分かった！

あの作品だ！と思う方もいるかもしれませんが。

とはいっても舞台設定は前作の少し進歩したものと変わっていますので、違った目で見てくださいとうれしいです。

長くなりましたが、新作です。また不定期更新になるかもしれません。精一杯やっておりますのでどうか応援よろしくお願ひします。

## No.02：手紙とクレイン

numberとは、と問われて機械であるとかロボットであるだとか言つ答えは間違つてる。

いや、実際には半分正解といったところなのだけれども正確に言うとか疑似生命体。

試験管ベイビーというものをご存じだろうか。100年ほど前までは作れたとしても寿命は短く、また筋力や知能などが備わっていないために完全なものには程遠かった。

しかし100年後の今現在の科学技術では、完璧なものとなった。人工DNAに始まり、人工知能、筋力生成のための電気信号制御装置、などが相次いで新たに作られ、試験管ベイビーなどは優に作れるようになってしまった。それでも人間にはできない。

人工知能は機械。各部の関節なども機械に頼っている部分もある。よって、人間ではない、人の形をした作られた生命体なのだ。それは時を経てnumberと呼ばれるようになった。

今では先ほどあげたような『人間ではない』という言葉を使おうものなら人間によって罰せられる。

極端な話だが、人間と二アイコールなのである。話が矛盾しているのだが、生き物である以上そして作られたものとはいえ知能や感情を持つていること、最後に基盤は人間であることから人間自身が考え方を改めたのだ。

感情があつて神経もある、知能もある。機械部など全体の10%しか占めていない。

肉体があつて傷つけば出血だつてする。ほとんど言つていいほど人間と同じなのだ。

そこで本題なのだが、何故numberは作られたのか？

食糧不足が悩まれる近未来に向けての対策にはどうも結びつかない

と思わないだろうか。

numberは人間とほとんど同じだと先ほど言ったが、そのため食事だってする。

政府のとった行動はわからないことばかりであった。numberは将来的にそのほとんどが科学者となりその知能で食糧問題について考えていくのだと聞いたことはあるのだが、それだけでは何も変わらないのではないだろうか。

しかしこうも考えられる。

一家に子供は二人までという政策と、numberの政策により人口爆発は防ぐことができる。

それに人口が一定に保たれるのだ。今はそれで一時的に足止めをしているだけなのだろうか。

それならば理解はできる。だが、それを表向きに発表していないのは何故なのかという疑問がまた湧き上がってくることだろう。

まだよくは分かってはいない。

今日の授業がすべて終了した。

俺は部活に入っているわけでもないのに、早々と帰る支度をする。

「さ、今日はゲーセン行くんだっけ？」

耳元で囁くように気持ちの悪い声を通り抜けて行った。

背中に悪寒が走り、鳥肌が腕に大量発生する。

「行かないから、というか気持ちが悪いですから。蓮」

帰り支度を終えて後ろを振り向くとファッション感覚で髪を茶色に染めた不良によく間違えられる友達がいた。

実際はそんな奴ではない。

「え、いかねーの？ クレーンゲームやるっぜ？」

「なんでクレーンゲームなんだよ。つか、最終的にお前は商品が無

くなるまでやるから嫌だ」

「そういう遊び方だろ？」

全然違うと思う。ちなみにこいつはクレーンゲームを愛しており、そして極めている。

100円で一つの商品を取っていく。腕はプロ以上と言っても過言ではない。

そんな蓮はついこの間近所のゲームセンターで一つのクレーンゲーム機の中身を必要最小限の金額で空にして、店員を泣かせていた。当の本人は、ものすごく楽しんでやっていたそうだ。

ついていっても俺が面白くない、勝手にクレーンゲームに熱中しはじめるからだ。

「そついえば……月乃は？」

「お前のお仕えするお嬢様はさっさと帰りましたよ、つと」

蓮は鞆を肩にかけなおす。あの膨らんだスクールバックの中には何が詰め込んであるのだろうか。

「んだよその言い方。俺が下僕みたいじゃないかよ」

あ、下僕かも。

「なんでもいいからゲーセン行こう、というかクレーンゲームやろう。家にクレーンゲーム機欲しいな……」

本気でそんなことを呟いているので、知らんふりをした。かかわってはいけなさと体が拒絶を始めていたからだ。

それにしてもおかしいことがある、いつもなら授業が終わった瞬間月乃が『帰るわよ』と声をかけてくれるのだが今日はさっさと帰ってしまっていた。まあ、それはそれでいいのだけれども一言くらいあってもいいと思う。今までこんなことはなかったから知らずのうちには動揺しているのかもしれない。

「亮君、亮君」

声のした方向からは油で顔がてかてかになったザ・ドM、谷枝がこちに歩み寄ってきていた。

なんで汗かいてるんだろう、と真剣に疑問に思いながら少し距離を

とる。

「なんで離れるのさっ！」

「いいからそこで喋ってくれ」

「……………」

谷枝は黙ったままポケットから『女王降臨！』と書かれたハンカチを取り出して汗をぬぐう。

あえて突っ込まないことにする、正直言えばあまりかわりたくないのだが。

「鵜川様は……………彼氏ができた！ のだろう。……………おそらく、

たぶん、やつぱり嘘かも」

「わりい、マジで意味不明だし腹立つから。殴ってよい？」

「男の子からは暴力は受け付けねえ！ そこには苦痛しかないからね。女の子なら僕は喜んで受けとるよ！ それにゴミを見るような眼をプラスされるなら喜んで」

ろくな奴がいなかった。

真面目な奴がいらないことにいまさら気がついて自分の友好関係の狭さを思い知った。

自分自身でそんな真実を発掘しておいて傷ついていた。馬鹿みただった。

いつも通りではない放課後にはかなりの違和感を感じられずにいらなかった。

金髪の髪を揺らしながら美少女は商店街を歩く。行く人はその可愛いとも綺麗とも取れるその容姿に目を惹かれていた。二つの金色の尻尾を揺らしながら彼女は歩く、考え事をしながら。

だからだろうか、道行く人と肩がぶつかってしまった。ラフな格好をした短髪の青年だった、大学生にも見えるその体格はスポーツをやっているようだった。

「す、すいません」

彼は急に顔を赤く染めておどおどしながらシユバツと頭を下げてきた。

大丈夫です、と一言言ってから歩みを開始させた。同様に思考も。自分が容姿がいいとは散々言われてきた。頬に刻まれた製品番号<sup>コード</sup>ありにしてもそう言えるのだろうか。よくわからなかった。今までなんども手紙というものを受け取ったことはある。でも内容は外見のことばかりだった。性格については何一つとして書かれてはいない。それはそうだ、『男』とかかわることなんて亮を除いて全くと言っていいほどないからだ。性格云々関わったことのない奴に分かるはずがない。だから今回も気にしないつもりだった。

なのに。

気になった。相手はどんな人か知らない、だけど気になった。

手紙の内容、はどうでもよかった。字が気にかかっていた、下手でも一生懸命に書いた字。

今までののは本当に取り繕ったかのような字で、気持ちなんてものは微塵も感じなかった。

今回は会ってみようかな、と思わせるような感覚だった。上から視線だろうが、でも結局は会ってみようかなでおさまる程度だった。それは決まっていた。

「あ、……………亮置いてきちやっつた」

それほどまでにこの手紙に心を惑わされていたのかもしれない。だが、すべては明日だった。明日の放課後のことだった。

「クレーンゲーム楽しかったなあ、亮？」

ビニール袋いっぱいクレーンゲームで取った商品を詰め込んだものを両手に提げた蓮はにやにやしていた。ちなみに使用料金はたっ

たの2000円。商品は二十個、100円で一個取った計算となる。いつの間にか人ばかりができていたので、俺は自動販売機の置いてあるほうに避難していたわけだが。

店員も白い目でこっちを見てた。

「いや、楽しかったのはお前だけだろ……。毎回人ばかりができないのは仕方ないけど俺が暇になるんだよ」

「だから一緒にクレイニングゲームやろうぜ」

「あれは一緒にやるもんじゃねえんだって」

夕日に染まりつつある町並みはすべてが茜色にコーディネートされていた。

そのなかでギランと茜を反射している女の子がいた。

「あ、亮。……………」と蓮

月乃だった、買い物袋を提げているあたり近くのスーパーにでも行っていたのだろう。

「今帰りなのか？ なら一緒に帰ろうぜ」

俺、蓮、月乃の三人は同じマンションに住んでいる。蓮と月乃は国から提供されて、俺は親父が使っていたものを譲り受けて住んでいる。学校からもほど近く、スーパーもコンビニも娯楽施設も近くに存在する。なかなかの良い立地条件なのだ。

「とりあえず亮は私の荷物持ってくれるらしいし、いこっか」

俺に目線で合図してくる。今日こそは、と反撃を試してみる。

「いつもいつも俺に持たせるんじゃないかってさ、たまには自分で持ったほうがいいぜ？ 体力もつくから」

「え、……………亮は私の荷物持ちをよろこんでやってくれるんじゃないのか？」

「あるかそんなこと！ 間違いなくお前の脳内でねつ造されてるよ」

「……………」

上目づかい完璧な下から見上げる角度四十五度で迫ってくる。

これは可愛いとかのレベルじゃなく、常人でも悶え死ぬレベルの攻

撃だった。

しかし俺はこれが演技だと知っている、知っているのだが……………。

「し、仕方ないな……………」

勝てない。

「やった、流石は亮ね」

そう言つて軽い足取りでマンションまで歩いていく月乃。金色の尻尾が二本、揺れ動いていた。

「甘い、甘いぞ亮！　ここで甘やかせてはいけない気がするんだ、俺なら悶え死ぬけど！」

「死んだら駄目じゃん……………。てか蓮だつて負けてんじゃん」

「それが男つてもんだろっ！」

「いや、そんな目を輝かせて言われても……………」

のろのろと二人は月乃の後を追うのであった。

『これはこれは、どうされましたか？』

「俺ダよ、覚えテねえのかア？」

暗闇にひっそりと構える100年以上も前の過去の産物、電話ボックスの中に長い髪の少年がいた。

片目に眼帯をし、顔立ちは整っているものの身に纏う服などは汚れていていた。

『その喋り方……………。あなたでしたか、どこに居られるのですか？』

我々が全力を尽くして探しているというのに『

心配している様子は微塵も感じられなかった。そこには少量の焦りが含まれていたと思われる。

「全力で探して3年もかかるの力い？　お前らは使えない奴ラだよ、本当二」

『言語能力が制御されているのは私たちの仕業だということは分かっていますか？ あなたにだけ有効な障害電波を流しているのです』

「なるほどな、何もしてなかったわけじゃねえんだな」

『今は動きを止められるような電波を作らせてます。あなたの発している電波で逆探知もできるようなふうにも進めています。捕まるのも時間の問題です』

さも自信ありげに、完璧な予告を電話の主は言い放った。

だが、予期せぬ言葉に電話の主は息を飲むことになる。

「逆に俺らがこの3年間逃げ回っていると思っただか？ そんなもんは解読済みだよ」

『貴様っ……………、言語能力低下プログラムはっ……………』

「馬鹿だよお前は、これから何が起きるのか思い知ったほうがいい。俺にあんな仕打ちをしたお前に、な」

ガシャン、と乱暴に電話を切る。少年は口が裂けそうなほどに笑っていた、しかしそれも束の間だった。

小さな声で言う。

「今はまだ、だがな」

世界の裏では何が動いているのかわからない。それは表の世界に生きる者には欠片も感付かない。

## No.03：屋上 告白

政府は人間とnumberの数を正確に把握している。生まれながらにしてDNAを採取され、戸籍に登録されることで存在を証明されるのだ。

では、逆の場合はどうなるのか。DNAを採取されず、戸籍にも登録されていないものそれは存在を証明されていないこととなるのか。ただ、今まででその人物がだれなのか分からないという事態は起こらなかった。それは一種の偶然が続いたものなのか、政府が完璧に戸籍に登録するということを完備しているのかは誰も分からないだろう。そう、政府にも。でも今までは何も起こっていない。それはこれからも起こらないということが暗示されているのだろうか。絶対とは言い切れないのではないだろうか。

こんなことを危惧する必要はないと思うのだが、どうも気になってしまう。今の世界でそんな不備が発生することなどあり得ないとは思うのだが、考え出すと止まらない。

例えば、その存在しえない者が居たとして、その者を使い捨て覚悟でなにか事件を起こしたとしたら。

存在しない者は人とのつながりさえも存在しない、よって事件の犯人は闇の中となる。

そのような手のテロがいくつも発生したとしたら？ 自分に被害がない事件の中心人物はさらなる攻撃を始める。それは何をしようが自分の尻尾がつかまれることはないから。

こんなことを考えるのは馬鹿げたことかもしれないが、可能性の一つとしてあり得るから考えざるを得ない。

その考えが無駄になってくれることが一番いいことではあるのだが。

放課後の屋上は良い風が吹くのは知っていた。町が一望できることは、とても気持ちのよい場所だった。

少なくとも月乃は好きだった。それは思い出があるからであり、それがずっと心に残っているせいでもあったから。

こここの屋上であつた出来事ではないが、それははっきりと鮮明に今でも色濃く残っている。それが自分を変える第一歩だったから。

『言い訳を盾に生きていくのはもう止めにしないか、それは自分が一番傷ついている』

私の世界を砕いた一言。それは今も耳に残っている。

月乃が屋上に来たのはこれから告白を受けるため、この間の手紙の件だ。

答えは決まっているのだが、何故だか胸がドキドキする。それは初めて顔と向かつての告白だからかもしれない。今までは手紙の最後には『返事待ってます』の一言だった。

自分の口からは告げずに振られても最小限の傷で済ませようとするその心が月乃は嫌だった。

今回こうやって従っているのはそのせいでもあるのかもしれない。フェンスに寄りかかる、ギシッ、と小さく音を立てるが静寂に一瞬でかき消される。

静かすぎるときは逆に音が静けさに消されるような感覚に襲われる。そのとき、カチャ、と屋上に一つしかないドアが開かれた。そこから顔をのぞかせたのは不良上がりの男だった。月乃は思わず、うわ、と声を出してしまっていた。こういうのは苦手なのだ。

「うわ、ごめんね、待った？」

普段は絶対に使いそうのない言葉だと月乃は思った。

明らかに取り繕っている感が丸見えだった。ドキドキしていた自分は何だっただらうと後悔さえした。

すべてが馬鹿馬鹿しく思え、適当にあしらって帰ることにした。

「えと、俺な、鵜川さんのことずっと見てた。そしたらぎゅうつて締め付けられるような感じがしてさ、それは恋だつて気がついたんだ！」

台詞はおそらく用意されていたものだろうと考える。

「だから、だからさ、俺と付き合ってくれ!!!」  
すでに答えの決まっている月乃は答えようとして、その視線があるものに釘づけになった。

鼻ピアスである。男の鼻にはピアスがつけられていた。先ほどから顔をあまり見ていなかったのが気づかなかったが、答えようとして顔を上げた時に発見したのだ。

告白の答えとは別の言葉をいつの間にか月乃は口走っていた。

「あなたのそれはなんなの」

「え？ あ、ああ、ピアスのことか？ 嫌って言うんなら外すぜ、ははは」

「そうじゃなくて、自分の意思で穴を開けようかと思ったの？」  
「ん、うん？ そうだけど……」

別にいい、と月乃は男の横を通り過ぎようとして腕を掴まれる。睨んでやるが、男はそんなことを気にした様子もなく、問いかけてくる。

「なんでだよ！ 俺のどこがダメなんだよ！」

「っ、じゃあ言うてあげるわよ。全部！ その顔も、声も、言動も、しつこさも、ピアスを付ける考えも、存在もぜんつつつつぶ！ 大嫌いなものよ！」

無理やり手を解こうとしたが、はなしてくれない。

男と女では腕力差があるからそうだとは思っていたのだが。

「なっ、ふざけるなよおまえっ！ 彼氏は、彼氏はお前にいないだろ!?!」

どうあっても食い下がってくる。本当にしつこい奴だ。

「いる、いるって言うてんのよ！ 同じ学年の亮が、桜参 亮って奴が！」

それだけ言つと次こそ手を振りほどいて男から逃げるように屋上を後にした。

屋上に一人残された男は呟く。

「ありえねえ……………俺が振られる事なんてよお。桜参、亮な……………」

いつの間にか太陽は傾き、夕日は沈みかけていた。この男の気分と同じで。

月乃への告白があつた次の日。

昼休みに鼻にピアスの男が教室のドアを開け放つてずんずんと踏み入ってきた。

「お前が、桜参か。とりあえず面あかせや」

教室がざわめき、動揺が全員に走る。

「え、俺？ なにかしましたっけ……………」

いわれのない罪に俺は動揺を隠しきれなかった。でも、ここで暴れもらつても困るのでとりあえずは言うことを聞いておくことにする。

男の後に続いて教室を後にする。今にも男に襲いかかりそうな蓮を手で制して目線だけで伝える。

しぶしぶ蓮は了解したらしく、自分の席に戻っていく。何かあるのか知らないが、俺は極力人を巻き込みたくなかった。しっかりと蓮は受け取ってくれたようだ。

どうやら男は屋上に向かうらしかった。そこに至るまでの道のりは、ずっと奇怪な視線を浴び続けた。

確かに、こんな不良の後ろに自分で言うのもなんだが普通の生徒が

歩いているのだ。こんな構図は人目には理解できないことだろう。しかし、勘のいいものには何かしら理解できるかもしれない。今は全くと言っていいほどどうでもいい話なのだが。

屋上に着くと、男は振り返り唐突にこう言った。

「お前が鵜川月乃の彼氏の桜参亮であってるな？」

「は？」

何かおかしい部分があった気がする。俺の聞き間違いでは絶対にならずだ。

「意味わかんないんだけど」

「隠したって無駄だからな。俺は本人に聞いたんだからな」

こいつはまた厄介なことになってるな、と亮は頭を抱えた。

おそらく振る口実に適当なことを言ったのだろう。

「俺は、昨日鵜川に告白したんだ。そして振られた理由は分かるか？俺の存在そのものが嫌いなんだってよ。ありえねえよなあ？

そんな振り方！」

確かに月乃の嫌いそうなタイプだ。もしかすると谷枝以上に毛嫌いしてそうだ。

それにピアスをするために鼻に穴をあけているのだ。これは月乃の怒りの元になるに決まっているだろう。

何よりもそういうことに敏感なのだから。

「で、俺になんでそういうこと言うんだ？」

「あいつ、numberだよな」

ひゅっ、と心が凍りついた。これからの言葉に備えて、体が反応したのだ。

「あり得くないか？俺の告白を断るなんてよお、今までなかったんだぜ？人間の相手ならさあ。それがなんだよ、numberごときになあ？あんたなんかより俺のほうがよっぽどいいとは思わないか？俺は一応経験者だぜ？そういうのには慣れてるんだからよお」

「……………」  
「まったくもっておかしい奴だなあ。ははははははっ！」

それと同時に、月乃はクラスでの噂が耳に入った。

「ちょっとそれ、どういうこと？」

近くにいた男子生徒に聞いてみる。顔を少し赤く染めながらも懇切丁寧に教えてくれた。

先ほどここで起きたことを。

そこで思い当たった。昨日の自分の言葉を。

『いる、いるって言うてんのよ！ 同じ学年の亮が、桜参 亮って奴が！』

しまった、といまさらになって思う。いつも間にか足は屋上へ続く階段へと向いていた。

「言いたいことはそれだけか？」

「いや、それに俺は腹が立ってんだよ。少しばかりサンドバックになつてくれよお！」

男は地面を蹴って間合いを詰めてくる。こぶしを構え、喧嘩戦法で突き出してくる。

そのこぶしには何が乗っているのだろうか。ただの八つ当たりしか感じられない。

腹が立つ、こんな奴が人間であることが。

同族であることが。

そんな喧嘩拳を避け、的確に男の顔面に自分の精一杯の拳を打ち込む。

バゴツ、と嫌な感触が腕まで伝わり、気分が悪くなる。

それでも思いつき振り切った。この拳を。

「あつ、がああああつ！」

男は地面でのたうちまわる。俺は別段、強いわけではない。最小限の動きで無理矢理押し切っただけなのである。だから俺が動けるのは相手が油断しているその最初だけ。

ここからはただの一般生徒に格下げとなる。しかし、今の怒りに任せればどこまでもいける気がした。

「ふざけやがって……あの女もそうだ、こつちが下手に出れば調子に乗りやがって……numberのくせに人間様にたてつくんだぜ？ 無礼にもほどがあるだろお！？」

「何を言っただよ、お前は馬鹿か。月乃は人間だよ」

「ははははっ！ お前こそ何言っただよ、作られたものが俺たちと同族だと？ 笑わせるっ、狂ってやがるぜ！」

「狂ってんのはてめえだよ！ なんでそういう風にしか考えることができないんだよ！ お前のような奴がいるから肩身の狭い思いをするやつがいるんだろうが、差別がなくならんんだろうが！」

「はっ、綺麗ごと並べやがって！ 口ではなんとも言えるだろうが、お前だつて心の奥では違うかもしれないだろ？」

聞いていれば気分が悪くなる。その口を動かなくしてやりたいとさえ思えてくる。

黒い感情が俺の中で渦巻いていく。仲間をそんな風に言われるのは我慢ならなかった。

「俺はな、違うんだよ。そういう風には思えねえんだよ、月乃はおんなじなんだよ。世界中があり得ないって言っても俺は意見を変えられることなんてできねえんだよ！ おんなじなんだよ！ たった一人でも、そう思い続けることしかできないんだよ！ 俺だけでも、そう思うんだよ！」

「ったく……だからてめえみたいなやつは嫌いなんだよおおおおおー！」

怒りで顔を真っ赤にした男は、もう構えもなく突っ込んでくる。ただ、怒りのボルテージは俺の方が高い。黙らせたいやつがそこにいる。それで十分だった。

「

」

終わった、男は倒れ気絶している。柄にもなく倒してしまった。

何発かもらったせいでズキズキと全身が痛んだ。屋上を後にしようとして、ドアが少し開いていることに気がついた。ここは風がよく吹く場所だから俺らが来てから開いたままというのはあり得ない。そこは少し濡れていた。雫がいくつか落ちたように点々と濡れていた。

馬鹿だ、本当にいつまでたっても馬鹿だ。他人のためにあそこまで叫べる奴なんてそうはいないだろう。

だからこそ行動を共にしているのだ。

うれしかった、ただそんな感情だけが心を埋め尽くしていた。

いつまでたっても変わらない、本当に馬鹿な奴。

『言い訳を盾に生きていくのはもう止めにしないか、それは自分が一番傷ついている』

だからこそ、見ているのかもしれないけど。



## No.04: 曲がり角の出会い(前書き)

number.....人間とほぼ変わらない作られた生命体。

製品番号.....numberの身体のどこかに刻まれている数字と英字。

桜参亮.....この物語の主人公。科学技術者の父を持つ、差別を許さない。人間

鵜川月乃.....金髪ツインテールの美少女であり、亮の幼馴染。ドSである。number

谷枝.....一言で表すなら『変態』。DMの称号を持つ。人間

岩沢蓮.....茶髪ツンツンの亮の友達。チャラく見えるがお洒落なだけ。number

三嶋翼.....40代後半の危ない国語教師 人間

## No. 04 : 曲がり角の出会い

numberの中には特異体質、と呼ばれるものを持っているものがある。

その真相は科学技術者がどこまでが限界なのか、ということ調べてるためだけに作り出された実験台である。やはり人間というのはどこまで行つて汚いものであり、命が与えられるものに対して無茶な実験を行っていたのである。しかしそれはつい7年前までの話。内部告発で見つかったその実験チームは潰れ、全員犯罪者として捕えられた。執行された刑は言うまでもなく無期懲役だった。

そのことに関して彼らは、『実験の何がいけなかったのかかわからない』と主張していた。

性根の腐つた人間であつた。命になるものに対してどれだけの酷いことをしてそう言えるのか。

その実験台とされたnumberは、今はセーフティー機能をかけられていてどこかの施設に預けられているのだという。

その実験台となつたnumber。製品番号はA-0100000AからA-01000010Aまでのかなりの初期段階での実験だった。

製品番号の読み方としては、最初のアルファベット、7桁の数字、最後のアルファベットはただ、番号を表す。最初アルファベットの7桁の数字が埋まつたのなら最初のアルファベットは次の文字へと移行する。それを2まで繰り返したのなら、次は最後のアルファベットが移行する。そうやって番号が被らないようにしているだけなのだ。

なので上に記した製品番号はかなり古いものだと理解できるだろうか。

今現在の一番新しい製品番号はKから始まる最後はHだったはずだ。さて、話は変わるが一番最初にできたnumberはA-00000

001Aであるが、それはどんな者であったかご存じだろうか。学校ではnumberのことは習わないので、知識として得るには文献などを読み漁るしかないのだが、どうしてもA-0000001Aについては触れられていない。

政府が隠しているのか、わざわざ語る必要がないのか、それはどちらともとれない。

つまり、わかることは何も無いということだ。最初にできたnumberを知っているというメリットなど我々にはどこにもないのだが、もし政府が隠しているのだとすれば、それは何かデメリットがあるからなのではないだろうか。

毎回思うかもしれない、このような推測は無駄ではないかと。

しかし、現在のことを考えるとして分からないことばかりが多すぎる気はしないか。

政府だけが知っていることに何か疑問は持たないのだろうか。これは最早政府に頼り切っている国が出来上がってしまったのではないだろうか。

何か起きて政府の判断が鈍った時のため、私は考える。

numberについて、そして政府が隠蔽しているかもしれないことを。

朝、俺はいつもの時間帯に目が覚めていつもの時間帯に飯を食べ、いつもの時間帯に着替えて部屋を出た。きつちりと玄関の鍵は閉め、エレベーターでエントランスまで降りる。

一瞬のふわっとした感覚を味わいながらもエレベーターは1階で止まり、ドアが開く。

見なれた金髪が見えたかと思うと、それは月乃であった。足を組んで、エントランスのソファァーに月乃が座っていた。

このマンションのエントランスにはホテルのようにソファァーが並べられている。

はて、月乃は何をやっているのだろう、と思いつつも俺はおはよう、と挨拶をしてからエントランスを出ようとする。

「ちよつと、」

呼び止められた。さあ、俺は何をしたんだろうか。

「学校、行くんでしょ。なんで通り過ぎようとしてんのよ」

「え、と？」

訳の分かっていない俺の隣に並ぶと行くわよ、と促してきた。

どういう風の吹き回しだろうか。朝は一緒に登校したことなんてなかったのだが。

まさか俺が何かをやらかしたのか、それとも……………。

ちらり、と月乃を横目で見てみるが怒っている様子ではない。

そういえば俺は荷物係などと言った月乃ポジションに置かれているはずなのに一向に鞆を渡してくる気配はない。こんな不気味なことはない……………。

「ちよつと、なんで離れていくのよ」

「あ、いや……………」

距離を取ろうとしていたことがバレた。

あ、あれ？　ちよつと不機嫌になってないですか？

月乃は頬を膨らませながら怒って　　はないけど、何故

か不機嫌になった気がする。

つか、頬を膨らませて怒る奴なんているのか……………？

「えーっと、月乃サン？　俺が何かしましたっけ？」

「うるさいっ」

「……………」

「な、なによ……………なんで黙るのよ」

何だろう、さっきからおかしいことばかりだ。いつもならこの辺

で切られて蹴られたり踏まれたりされるはずだけども……。  
そういう風に思考が回るのもおかしい話なんだが。

心なしか顔も少し赤いような気がする。風邪でも引いたのだろうか。  
「月乃、どうしたんだ？ 顔赤くなってるぞ」

「っ……………！ なんでもないわよっ！」

「ひいつ、すいませんでした……………。でも、風邪じゃないのか？」

「っの……………お！」

ブオン、と何故か回し蹴りが飛んできて俺の顔面にクリーンヒット  
することになった。

やっぱりいつもの月乃だった、とよくわからないところで確認する  
俺だった。

「っっていうことがあったんだよ」

次の授業は体育であるため、俺と蓮は男子更衣室までの長い廊下を  
歩いている。

「ほー、なかなか面白いな！ ツンデレ……………」

「ん？ なに、っん……………？」

「いんや、なんでもねえっつて。それよりさ、あそこ」

蓮の指差す先には廊下を走るな！ とかかれたポスターが貼ってあ  
った。

ちよとど曲がり角にあたる場所なので、衝突事故とか多いのかもしれない。

「『出会いの曲がり角』って呼ばれてんだぜ？ あそこを通る前に  
出会いって言葉を10回唱えてから走って曲がるとあら不思議、出  
会いが待ってる！」

「なにそれ、ぶつかる出会いみたいなそんな感じか？」

「そう、まさにそれ！」

自信満々に言う蓮は、なんだか本気で信じているみたいだった。そ

んなことで出会いがあったら苦労しないってだれもが思うだろう。  
つか誰だよ『出会いの曲がり角』なんて名前付けたのは……………。  
「よし、俺は行く。必ず成功させる！ 出会い出会い出会い出会い  
出会い出会い出会い出会い出会い出会い会い会い会い会い会い  
一回多いからな、と突っ込む間もなく蓮は走り出す。  
普段絶対に出ないようなスピードで走る。

「うおおおおっ！」

どんっ！

「ま、じか。ほんとにぶつかってたぞ」

喜びを噛みしめている蓮の前には国語女教師、三嶋 翼。ちなみに  
補足説明しておくが、バツ1の40代後半の単位を取引として学  
生に交際を迫ってくる危険なオバハン教師である。

「『出会いの曲がり角』で岩沢くんと……………？ これは……………」

「……………、ぎゃああああああああああああつ！」

断末魔が聞こえてきたので危険を察知し、放置することにする。

少したつて、蓮を引きずって歩く三嶋先生がこちらに向かって歩い  
てきた。ふふふ……………と怪しい笑みを浮かべて。俺はあの曲がり角を  
曲がったところで何があったのか知らない、知りたくもない。

すっ、と俺の横を通り過ぎる時、半開きの目で蓮は訴えてきた。

『マジ、シヤレにならねえって……………』

巻き込まれたくないので、スルーすることにした。

よし、とりあえずさっさと男子更衣室に向かおう。マジで。

蓮が死んだ(？) 『最悪な出会いの曲がり角』をあまり意識しない  
ように曲がった。

とんっ

と、ぶつかつた。相手は跳ねかえり、廊下の床に尻もちをついてし

まっていた。

「わ、わりい。大丈夫か？」

先には少し癖のある短髪の髪の女の子がいた。短髪、とは言っても女の子だから肩にかかるかかからないかぐらいの長さである。

俺は目線の先を注意しながら、手を差しのべた。

が、目に入った。

彼女はおびえるようにして俺の手を拒んだ。

「だ、大丈夫です……。お気になさらないで下さい」

「や、しかし俺がぶつかったんだから……」

「本当に大丈夫ですからっ、すみません」

彼女はささつと立ち上がると、小さく頭を下げた走り去っていった。しまった。

その時に見えたもの。製品番号コードは体のどこかに刻まれている、例外はあるが大抵は普段見えないところにある。

彼女の太股には、製品番号コードが刻まれていた。

ゆえに、彼女は number だった。

## No.05：拒み絶つことの意義（前書き）

桜参亮……………この物語の主人公。科学技術者の父を持つ、差別を許さない。人間

鵜川月乃……………金髪ツインテールの美少女であり、亮の幼馴染。ドSである。number

岩沢蓮……………茶髪ツンツンの亮の友達。チャラく見えるがお洒落なだけ。number

西種風見……………少し癖のある髪の子。気が小さく、小動物的。number

錠越眞守……………長いつやのある黒髪で、生徒会長として有名。かなりの美人

欠陥製品……………numberとして機能しなくなった、または製造段階で廃棄されたもの。

## No.05：拒み絶つことの意義

numberの製品番号コードはいつつけられるかご存じだろうか？

肉体が完成した時、ではない。身体の一部に付けられるのはその時だが、実際に製品番号コードが決まるのはその主核となる脳にあたる部分が完成した時だ。

カーヌルブレイン、そう呼ばれてるものだ。

これを作製できる科学技術者は世界に数えられるほどしかおらず、その中の半分はこの国の人間が占めている。

ようするに、この国がnumberの開発国なのだ。とはいっても、この国以外ではほとんどnumberは社会に出回っていない。それは食糧問題危機ではないからだとわかるだろう。他の国は食物の件では豊かなのだ。今現在、食糧を輸入に頼っている割合は90%。これは大きな問題である。

今頃の小学生でも危機に面してるということは優に理解できるだろう。

前にも話した通り、食糧問題によってnumberが作られたのだ。話をカーヌルブレインに戻すが、これは科学技術者であれば容易に中を改造することができる。

非人道的な性格へと導くプログラム、感情規制されるようなプログラム、そんなものを組み込むのは簡単だということだ。身体検査、などといった名目で怪しげなプログラムをインストールすることだ。つて可能なわけなのだ。

ここで言いたいのは、人間によってnumberは左右されることがあるということだ。

法的に人間とnumberは平等であると言っている以上、そんなことはあつてはならないのだ。

行動を制御する電波を流すことも、カーヌルブレインを規制する電

波を流すことも。してはいけないのだ。

しかし、犯罪を犯したnumberを捕えるときはそれを国際警察は秘密裏に使用しているのだ。

犯罪者を捕えるためとはいえ、フェアではないような気がする。法律はただの建前なのか。

それにもしそれが悪用されたらと考えると、恐ろしい。

私が恐れているのは、numberVS人間という構図である。自分たちの作り出した平等体との争いとなると、皮肉とはもう言えないのかもしれない。

今はただ、祈ることや考えることしかできないだろう。

朝、今日も何故だか月乃と投稿していた。鞆持ちはさせられていない、謎だ。

最近の月乃の行動に変な感じを覚えつつも、俺は出来事を思い出していた。

『最悪な出会いの曲がり角』で出会った少女、同じ学年ではあると思うのだが目立った様子はない。

でも、なんだか不思議な感じがした。いや、何か気になったというべきであろうか。

何か自分を卑下しているような、人に対して臆病であるような。

それだけではなんら変わったことはないが、何か根本的に……。

「さつきから何黙ってんのよ」

「うえ？」

「何その返事」

「いや、うん……そうだな。月乃は知ってる？ちょっと癖のある肩までの髪の女の子」

そう聞くと月乃は面白くなさそうな顔になり、  
「そんな特徴だけで分かるわけないでしょっ」と、脛に蹴りを入れてくる。

「いつ、痛っ、痛いつて!」

「痛いところ蹴ってるんだから当たり前でしょ?」

「また俺の脛が強化される!?!」

「脛は強化されませーん。ってなんでそんなこと聞くわけ?」

不機嫌全開で月乃は俺に目を向ける。

うわあ、目を見ればわかる。かなり不機嫌だ。

「あー、えつとき。この間曲がり角でぶつかってまだ謝ってないな  
ーと思つて」

「ああ、そうなの」

なぜだか月乃は肩の力を抜いたような気がした。

そこでピーンと思いだす。かなり絞り込める特徴を。

「そうだ、月乃。そういえばその子、太股コトに製品番号があつたはず」

「……………太股?」

「え、あ、……………しまった」

馬鹿みたいだ、というかこんなのは俺のキャラじゃない。

「しまったじゃないでしょうが、この変態っ!」

月乃16連コンボをモロに食らった俺はしばらくその場から動くことができなかった。

「うーん、嫌だなあ」

俺は『最悪な出会いの曲がり角』の手前で立ち止っていた。

またぶつかるかもしれない、とそう思つて。昨日は歩いていてもぶつかったのだ。

今日はいつそのこと走ってみるか……………?

そんな考えが脳裏に浮かぶが、そんなことをしたら今度は吹き飛ば

してしまうかもしれない。  
それだけは避けたかった。それに、ちゃんとした謝罪の他にも尋ねたいことは多々あった。  
かといってここで会えるという可能性なんてない。統計学上はあるのかもしれないが、何万分のひとか億とか途方もない数字だろう。何かの前振りみたいになりながらも、『最悪な出会いの曲がり角』を曲がる。そこには誰もおらず、ぶつかるともなかった。  
立ち止って安堵のため息をついていると、後ろに少しの衝突感が生まれた。

とんつ

背中に当たった何かは跳ねかえって床についた。

「わ、わりい……………ってまさか」

「つう……………ん」

そこには少し癖のある髪の彼女がいた。

「お、おお……………この間の」

そう言っって手を伸ばすが、さっとかわされてしまう。彼女は立ち上がり言う。

「き、気にしないでください。あの、えと、……………ごめんなさい」

「なんで謝るんだよ。この間もだけど俺が悪いんだぜ？」

「わ、私は……………」

彼女は言う。ハッキリと拒絶を、口にはいけないことを。

「numberですから……………に、人間のあなたが謝る必要なんてありません……………」

拒絶、拒絶拒絶拒絶拒絶。

明らかなる拒絶、numberと人間分け隔てての拒絶。この国の根本を使っっての拒絶。

だけど、俺はこの言葉にいら立ちを覚えた。  
カツ、と顔が熱くなり頭が真っ白になる。

「何言ってるんだよおまえ！」  
立ち上がった彼女を壁へと押しつける。小さなうめき声さえも耳には届かない。

図ったかのように廊下は閑散としてる。人の気が全くない。  
それでも彼女はおびえずに、俺の目を見て言った。

「わ、私は違うんです。駄目なんです……………」

「違わねえよ！ お前はなんでそう言うんだよ、なんで平等な権利を与えられながらもそう言うんだよ！ numberができた当時は人権すらなかったんだぞ！？ その中で同じ命として扱われてこなかった奴の前でも同じことが言えるのかよ！」  
俺がガキの頃見てきた光景は今でも鮮明に頭に残っていた。  
が、

「平等…………？ なんですかそれ、権利？ そんなもの、私の住む日常生活の中には存在しませんよ！」

彼女は堰を切ったように言葉を溢れさせた。

「毎日毎日、周りからの視線、攻撃、陰口。 何ですか！？ 私が何かしましたか、平等じゃなかったんですか！？ 権利なんてもの、法律なんてものは飾りなんですよ！ 表向きには認められていても、範囲が狭くなれば意味なんて無さないうんですよ！ 私が……………どんな思いで……………」

彼女の目には涙が滲んでいった。俺にたたきつけられるようにして出された言葉は、体温をじわじわと奪っていった。こんなにも近くで、苦しんでいた。気づくことすらできなかった。大声張り上げて怒った。

自分は小さな存在だと、それは知っていた。だからこそ、次取る行動も。

「…………そうか、俺は分かってなかったな。 けども、俺とお前は平等だ。それだけは言える」

「……………」

「平等なんだ、だから仲間になんてなれるだろ」

「っ……………」

彼女はそのまま泣いていた。

どの返事がこようとも、俺は泣きやむまではここにいようと思っていた。

急にこんなことおこがましいかもしれないが、精一杯考えた結果だった。

その現場を少し離れた場所から見ていた影があった。

授業が簡単すぎてつまらなかったのでサボろうとしていたときだった。

廊下の向こうから男子生徒の怒鳴り声とそれに対する女子生徒の怒鳴り声、どちらも何かを訴えているようだった。

事件か？大変だ！の前に面白そうだ、という心情があった。

ここは様子を見ようと物陰から窺うとそこには、桜参亮と西種とろくさ風か見の姿ぞみがあった。これは面白い展開だな、と見ていたのだが。

やっぱり、面白い奴だった。桜参亮は。

自分の想像通り、久しぶりに気分がよかった。

物陰から窺っていた、私立舞桜高等学校生徒会長錠越じょうご 眞守まもりはかなり楽しそうな様子だった。

「おい、欠陥製品をだせ」

日中だというのに全く光の差さない旧市街の廃ビルに少年はいた。少年は長い髪を邪魔くさそうに払いながら、命令を下した。片方の目には眼帯をしてある。

「欠陥製品をですか？ あれは、なかなか回っていないんですから変なことに使うのはやめてくださいよ」

命令を受けた男は、弱弱しくも反撃する。

「うるせえ、いーからだせっていつてんだ。お前は全壊製品フルになりたいのか？」

「す、すいませんっ。すぐにお持ちしますからっ」

弱弱しく男は退避する。そんな様子を気にも留めない少年は、どう動こうかを考えていた。

欠陥製品ジャンクの使用。それとも、……………。

びりりりりっ、と妨害電波が頭に響く。少年に対してだけの電波である。

「っ、うるせえな……………。おい、解読して新しいプログラム構築しとけ」

少年の視線は部屋の隅に向いていた。そこには目も悪くない癖に黒縁の眼鏡をかけた青年が居座っていた。新型のパソコンを開き何やらいじっていたようで、スクリーンの光が顔を照らしていた。

「まったく、それが人にものを頼む態度ですか」

新型のパソコンと、周りの風景は不釣り合いだった。

「うるせえ、オマエは人じゃねえだろ」

「法律をお忘れですか？」

「あんなものは建前だ。クニはなにを考えてるかなんてさっぱりわからねえよ」

「その割には自ら電話をかけていませんでしたか？」

「知ってたのか」

「当然です」

まるで友人同士のような会話だが、そこには少しの殺気が含まれている。

通常の会話には、混じりようのないものだ。

「も、持ってまいりましたっ」

弱弱しく男は軽量金属にまかれた物体を指す。

「さあて、どこまで面白くできるかなあ？」

少年の声は毒々しく、闇に響き渡った。

## No.06：平和の欠片と黒（前書き）

桜参亮……………この物語の主人公。科学技術者の父を持つ、差別を許さない。人間

鵜川月乃……………金髪ツインテールの美少女であり、亮の幼馴染。ドSである。number

岩沢蓮……………茶髪ツンツンの亮の友達。チャラく見えるがお洒落なだけ。number

桃川俊太……………学校になかなか来ない生徒。名前が可愛い。

## No. 06：平和の欠片と黒

いつも通りの時間に家を出て、いつもの通勤時間、いつもの信号待ち、何もかもが普段と変わらずに動いていた。

いつも見る顔ぶれ、ハンカチで丁寧に汗をぬぐうサラリーマンにケイタイをいじる女子高生に大人たちに混じって信号待ちをしている黒いランドセルをしまった小学生。

車体一面に広告を貼り付けた大型バスに、静かな音を立てて飛び立つ飛行機。

そう、普段と何も変わらずに世界は動いていた。

動いていたはずだった。なのに、

「なっ、……………う、あ」

じわじわと腹部に熱が伝わり、痛覚も遅れてやってくる。刺されたと気づくのは時間を要した。

人や人や人で影になる信号待ち。その中に紛れて無差別に刃物は振るわれていく。

横断歩道の信号が青になり、叫び声上がる。

血だらけの刃物は地面にこぼれる。返り血で赤く染まった奴は、笑う。

「くくく……………あはははっ……………あーっはっはっはっはあ！！！！」

一瞬にして、清々しい朝は悪意によってなぎ払われた。

臨時ニュースです。つい一時間前、中央駅前の信号待ちで男が刃物を振り回すといった事件が発生しました。怪我人は多数いましたが、重傷者は出ていないということでした。

登校途中、ケイタイでニュースを眺めていたらそんな記事を見つけてしまった。

もちろん隣には月乃が歩いている。なんだかこれが日課になってしまったようだ。

それにしても今のこの時代でもこんな堂々と朝から犯罪を起こす奴がいるのか。

逃げられるはずもなく捕まることは確定しているのに。

「どうしたの？ 変な顔して。最近蹴られていないからストレスが溜まってるの？」

「その台詞に違和感を抱こうか。明らかに蹴られる方がストレスだよね！？」

「そうなの？ って、さつきから何ケータイいじってんのよ」

「えっとな、ついさっきのことなんだが事件が……」

「朝にテレビで生放送してたわね、何を考えて刃物なんか振り回すのか分かんないわ」

そうこう言っているうちに学校が見えてきた。

所詮自分の関係のないところで起きている問題など重視はしない。こちらが平和であれば、危険なことなど起こるはずがない、と信じ切ってしまったているのだ。

近くで事件があった。それに巻き込まれるかもしれない、けどそんなことはないだろうと心のどこかで勝手な安心感を抱いているのだ。

この事件は始まりであり、終わりである。

どうか自分たちには被害がありませんように、と。

教室に入った時、いつもは空いているはずの机が埋まっていた。

そう、その席の生徒が登校してきているのだ。机の上にはスクールバックが無造作に置いてあるが、本人はその席には座っていない。

辺りを見回してみてもそれらしい人物はいない。

トイレか？と考えつつも自分の席へ向かい、ホームルームまでの時間をどうつぶそうかと考えていた。  
と、後ろから。

「ねえ、亮。あそこの席の子、今日は来てるんだね」

月乃もどうやら同じようなことを思っていたようだ。確かに2年生になって初めて登校するはずだからな。

「そうだな、ももかわ桃川 しゅんた俊太って名前だったか？」

「ふふっ、可愛い名前ね。病弱だったのかしら？」

「名前で判断するのはどうかと思うが……、まあ俺もそう思った。今は保健室とかどっかかな？」

他愛もない会話を繰り広げていたら、廊下から複数の視線を感じた。バレバレなのだが、相手は隠れているつもりらしい。月乃に好意を寄せている奴らだ。

それに気づかない月乃は、自然に俺に話しかけてくる。

「ねえ、どうしたの亮？」

「うえ？ なんもないけど……」

「ふふふっ、何その反応っ」

あれ？ おかしい、月乃ってこんなキャラだったか？……………はっ、まさか廊下の連中に気づいていながらも俺に話しかけることで俺が後からどんな目に合うかを見て楽しむ気だな！？ なんというドS！  
「亮？ なんかさつきからおかしくない？」

「……………」

嘘をついているようには思えない、しかし月乃に『幻想の演技』（勝手に命名）があるからな……………。  
分かん、考えれば考えるほどに。

「ねえねえ、亮？」

肩を掴んでゆっさゆっさと揺さぶられる。

その瞬間、ズアアアアアッと廊下からの殺気が俺に突き刺さった。み、見える。今の俺には見える、なんか黒と紫の入り混じった刺々

しいものが。

「つ、月乃。作戦通りかつ！」

立ち上がった後ろを振り返る。月乃はぼかん、と口を開けて目を丸くしていた。

それでも可愛いのは月乃の特権だろう。

「え、……………？ 何それ……………」

なんでか知らないけど不機嫌になっていつている月乃がいた。

それと同時に廊下からの殺気の大きさも拡大していった。

し、しまった。読み間違えた、しくじったあああああつ！

体を硬直させて、月乃からの攻撃に備える。が、しかし。

「ふん、……………もういい」

なんだか不機嫌なまま拗ねてしまい、そっぽを向いてしまった。

その時には廊下からの殺気の雨も止み、人の気配もすでに消えていた。

ホームルームが始まってまあ、「桃川俊太」の席は空いたままだつた。先生はその席をちらりと見ると、

「桃川は今日は来てるのか……………。トイレか校舎裏か最早学校外か」  
トイレ、校舎裏？ 病弱少年にはまったく似合わない単語がずらずらと流れ出てくる。

不審に思っていたその時、教室のドアが開かれた。その先にいたのは真っ黒な黒髪をツンツンに立てていて、制服のボタンを2つも開けている、おそらく病弱ではない男子生徒。

まさか、とは思った。

俺の考えを肯定するかのよう先生がその男子生徒の名前を呼ぶ。

「おい、桃川。ホームルーム始まってんだから早く席につけ」

「っ、うるせーな」

声変わりのしていないかわいらしい声だった。それに思わず吹き出しそうになる。

ぎろり、と桃川と目があった。

「おい、お前。今笑っただろ？」

「い、いや……そんなことは、ふぐっ……くくく」

「今も笑ってんじゃねえか！ ふざけてんだろお前！」

「やめてくれっ……くくく、その声で切れないでくれ……っ。や、やべ、ツボった！」

「よっしや、お前ふざけてるな？ 俺切れていいんだよね？」

「誰に聞いてっ……ふくくくっ」

「うっしやあ！ オモテでろやお前、一対一だ！」

片方だけヒートアップする会話に、先生が割り込んでくる。

「はいはい、いいから桃川は座つてろ」

そんな担任の言葉に渋々従う桃川俊太。その間にも、視線は俺に向けられている。

と、その視線がずれて、後ろの月乃に向いた。

桃川の顔にはこう書いてあった、『可愛い』と。

月乃は『うげ、』という顔をしたが、それもまた可愛い。どんな顔にしても最強である月乃には桃川への誤解の笑みしか与えられなかった。

それから放課後までずっと桃川に見つめ続けられていた月乃は、限界とでも言うように俺の袖を引っ張って教室を飛び出した。後ろからは声変わりのない声で、

「あ、ちよつと鵜川さん！？ なんでそんな男と!？」

と聞こえてきたが、放課後の喧噪によって一瞬でかき消された。

下駄箱でドタバタしながらも、ようやく校門へとたどり着いた時に

は二人とも肩で息をしていた。

「ちよつと、あいつはなんなのよ！ 気持ち悪いっ」

「おそろく月乃サンのことが好きなのだと」

「ふざけんなっ」

ビシィと乳酸が溜まっている足を蹴られる。

は、肺が空気を欲しているというのにこの子はなんてことをっ……

…。

もがき苦しみながらも月乃の言葉を耳にする。

「あいつは無視することにする。私はああいうのが一番嫌いだっ

て知ってるでしょ！」

誰に言うでもなく、高らかにそう宣言した。

「もしもーし？ どうだった、俺らからの贈り物は？」

『っ……………やはり貴様らの仕業だったか。欠陥製品ジャンクなんてものをど

こから……………』

「負傷者、15人か……………。警察はなかなか行動が早かったな」

『無人警官オートロイドが配置されていることぐらいわかるだろう？ 』

「まだまだ甘い、か？ 今回は小手調べだ。この程度だったら……………

…。」

『だったら、なんだ？』

「ふん、会話を引き伸ばしても無駄だとわかっていながらも、か。

やり取りをするのはこれが最後だな」

『っ、……………待ってくれ、貴様のいや貴様たちの望みは何だ。何を

しようとしている』

「くは、馬鹿かお前らは。考えれば理解できんだろ？」

少年は乱暴に受話器をたたきつけると、100年も前の産物、電話ボックスを片手で破壊した。

ゴアシャ

「あーあ、またあんた壊したの?」

暗がりの奥から少女の声が聞こえた。

「もう連絡を取るつもりはないからな。それより、調子はどうなんだ」

「欠陥製品?<sup>ジャンク</sup> ああ、3匹は集まったわよ。あとどれくらい必要かしら?」

「十分だ。それだけで町の一つは簡単だろう。まずは序章」  
少年は楽しそうに、深く笑みを作った。

闇に?まれた一瞬の笑みは黒く黒く、誰もが背筋を凍らせるものだった。

T H E   D A R K

## No.07：倒壊数十分（前書き）

桜参亮……………この物語の主人公。科学技術者の父を持つ、差別を許さない。人間

鵜川月乃……………金髪ツインテールの美少女であり、亮の幼馴染。ドSである。number

岩沢蓮……………茶髪ツンツンの亮の友達。チャラく見えるがお洒落なだけ。number

壊れない実験台……………暗がりに住む（？）、一人の少年。眼帯をしている。

愛玩用……………髪を薄い赤に染めた可愛い女の子。欠陥製品をよく知る。

使い捨て……………感情の起伏を見せない少年。パソコンを常に起動している。

欠陥製品……………numberとして機能しなくなった、または製造段階で廃棄されたもの。

瓦礫の山だった。目が覚めるとそこはいつもとは全く違う景色になっ  
ていて、灰と紅の色彩しか存在しない世界になっていた。

周りには多く怪我人がいた。それはそうだ、ここは中央街のショッ  
ピングセンターなのだから人がたくさんいるのは当たり前だ。

いや、違う。そんなことを言っているのではない。この景色はなん  
だ、なんでこんなにも血が流れてる。

どうしてこんなにも全身が震えるんだ。前方も後方も天井も囲まれ  
ている。

抜け出すのにはたくさん時間がかかりそうだ。それ以前に抜け出  
せるのだろうか。

何かの燃える臭いがすぐ近くです。火事……………？違う、もっと何  
か恐ろしいことが、あった。

おい、君は大丈夫なんだな？ 無傷だな？ なら手伝ってくれ！

ここを脱出する。

誰だ、話しかけてきているのは誰なんだ？ 知り合いではない、こ  
んな人は知らない。

頭がぼうつとして何も考えられない。

しかし、ふと頭をよぎったことはあった。

そうだ、あいつは。あいつはどうなった。一緒にいたあいつは。  
分からない、分からない……………。

三連休の初日であるということから、蓮から誘いのメールが来た。今回はクレイゲームではなく、中央街へ行くらしい。適当にふらついて遊ぼうぜ、ということらしい。

クレイゲーム以外のあいつの考える遊びなんてものは俺には想像できないのだが、まあこれを機にあいつの別の趣味を知っておくのも悪くないだろうと誘いに乗ったのだ。

中央街を拠点に、歩きまわるのだという。そこには大型ショッピングセンターもあるのだよ暇つぶしにはなるだろう。

とりあえずはエントランスに集合ということになった。

朝起きてから素早く着替えを済まし朝食も軽く食べて、最低限の身だしなみを整えてエントランスにでた。先にはすでに蓮が待っていた。

「おーっす」

「よう、珍しいな。蓮が先にいるなんて」

「な、俺だつてたまには……いや、ほんとにたまにだが早く来ることだつてあるわい！」

「いや、悪かつたつて。でもなんでゲームセンターでクレイゲームじゃなくて中央街で遊び歩くんだ？」

「まあまあ、それは歩きながら話そうじゃないか」

ワインと自動ドアが開き、先へと進んでいく蓮。足取りは軽かった。そんな蓮にちよつと笑いつつ、俺はそのあとについていった。

空は快晴で、まぶしいくらいに太陽が輝いていた。

少し歩いたところで唐突に蓮が語りだす。

「あー、休日にもさ苦しく男二人で出歩くつてのもどうかしてると思わないか？」

突然のよくわからない語りに混乱する。

こいつは何を言いたいんだ……。

「いや、お前が誘ったのは俺だけなんだろう？　しかもいきなりどうした」

「いんやね、前にも言ったけど年齢〓彼女いない歴　ってのももう嫌なんだ」

いきなり真面目な顔になった蓮。それに追加するように、

「亮が誰か……そう、鵜川とか誘ってくれればいいのに」

「なんで月乃なんだよ。つか、何お前。月乃が好きなの？」

「はっ」

何故鼻で笑ったし……。

「何その反応」

「だからさー、そんな同じ学校じゃなくてさ他校の可愛い生徒さんとかさあ」

「ちよつと待て、お前なんかめっちゃくちや言ってるぞ？」

「そう、だから今日はナンパです！　決定です！」

「よし、帰ろう」

「まてまてまてまて！　いや、お願いします。帰らなくて下さいよお。お前はいいじゃんよお、鵜川とどうせ付き合ってるんだろ！　いや、付き合ってるね！　否定なんかさせるもんか畜生、なんであんな可愛い子をゲットできないだよ、教えてくれよお！」

レベルが上がったのか下がったのかよくわからないことになった。

それに9割方間違っている。俺と月乃は付き合っていないし、これからもそういうことはないだろう。

つつか、それが目的ですか。

壊れた蓮を引きずりながらも俺はしかたなく中央街へ向かうのであった。

「はっ、ここはー!？」

中央街の一角のベンチに横たわらせていた蓮がいきなり素っ頓狂な

声を上げた。

「おはよう、悪い夢から覚めたか？」

「あ、ああ………。亮。悪かった、俺は目が覚めた」

すくつと立ち上がった蓮は対面側のベンチに座っている女性に走り寄っていく。

あれ？ 何一つして理解してないんじゃないじゃあ………。

「おねいさん！ かなり可愛いですね！？」

「あ、はあ………。どうも」

「今暇かな？」

「ごめんね？ 彼氏を待ってるの」

ズバゴオン！ と聞こえそうなほどに蓮は崩れ去った。

そのまま転がってこちらに戻ってくる。

「大佐、私には無理でした」

「おい、何一つ学習してないだろ。つかみつともないから止めるや！」

「うーうーうー」

「気持ち悪いな………」

俺の脚に絡みつきなからむせび泣く蓮。

そう言えばもうすぐお昼時だ。

「まあ、もうすぐ昼だからさ、とりあえずその大型ショッピングセンターの中入って飯食おうな」

「そ、そういうさりげないエスコートが！？」

「が、なんだよ………」

そう言いながらもゾンビのような足取りで俺についてきた。

昼食を簡単な店で済まし、ショッピングモールをぶらぶらと歩く。

この大型ショッピングセンターの中はエリアごとに区別されており、

食事をする店が集まる食事エリア、雑貨や生活用品、洋服、靴などを扱う中心エリア、ゲームセンターや映画館がある遊びエリア、食品を扱う食品エリアなどがある。

今は中心エリアを歩いており、人通りが比較的多い。蓮はゲームセンターに向かうのではなく、あえて人の多い中心エリアを選んだのだ。

もちろん、学習せずにナンパを繰り返すために。

先ほどから辺りを見回してはいるが、午前中よりは積極性がないように感じられる。

少しは学習したのか、それともただ傷ついて自信がなくなっただけなのか。

どちらでもいいが、他人のふりをさせてもらいたい。と、その時。

地面が揺れた。

いや、大気が揺れた？ 衝撃のようなものがだんだんと伝わってきて、建物がきしみ始める。

「な、何が……蓮！」

「ああ、これは……地震じゃない……？」

ずいぶん先を行っていた蓮に声をかけた。すぐさまこちらに駆け寄って来て合流する。

ズガアアアン！と続いて爆発音が鳴り響き、地面が先ほどより大きく揺れる。

そして

柱が崩壊し、天井が降ってくる。

ショッピングセンターの側面が倒壊する。

破壊、それがこんなにも恐ろしいものだとは思ってもみなかった。

自らに降りかかる恐怖で身体が硬直し、身動きがとれなくなる。

自分の脳ではもはや制御できない身体、そのまま瓦礫にのまれ、俺の意識はそのまま途絶える。

ブラックアウト

シヨッピングセンターが倒壊する数十分前。

昼間であるにもかかわらず、日の光が一切差さない暗闇が支配する  
廃虚の中に少年はいた。

美しい顔立ちだが、左眼には眼帯をしておりもう片方の眼の奥には  
黒い悪意のようなものが渦巻いていた。

それはこの廃虚の中の暗闇と同等かそれ以上の濃度だった。

しかし、彼の口元には笑みがた携わっている。

「欠陥製品は全部で4体、プログラムも順調に改竄完了。後は起動  
させるだけです」

彼の対面方向に当たる部屋の角に、この場には不釣り合いなパソコン  
の光によって顔が照らされている男の姿があった。

彼は淡々と告げる。

「数十分後、起動させますが？」

「全然かまわねえ」

少年は笑った。楽しさと、狂気の混じって歪んだ感情に。

第一歩、序章、始まり。

………最初のハプニング、相手の対応、死亡数、流れるニュース  
の内容。

すべてが楽しみでもう仕方がなかった。まるで新作のゲームが発売  
される前日のような感覚。

「楽しそうね、壊れない実験台。おもちゃを買ってもらえる子供み  
たいよ？」

暗がりの奥から薄い赤に髪を染めた実に可愛らしい美少女が歩いて  
きた。

フリフリのワンピースに小さな鞆を掲げて歩いてくる。

明らかにこの場には合っていないなくて、表側の人のようにも見えた。

「うるさいな、愛玩用<sup>アイシ</sup>。お前は今まで何してた」

「その呼び方はやめてもらいたわね」

「お前の言葉、そっくりそのままお返しするぜ」

しばらく殺気を吐き出していたが、それも止めた。今から楽しいところなのだ。

沈黙を切り裂き、部屋の隅にいる男に話しかける。

「使い捨て、監視カメラのハッキングは？」

「それ、はなんだ？」

ギョロリ、と眼球だけを動かしてこちらを射抜く。常人であれば、足が震えて動くこともできないだろう。

「わりいって。今の流れだよ、冗談だから」

こちらに向けられたパソコンにはとあるショッピングセンターが映しだされていた。

今からここが爆心地となる、混乱を導くための。国を惑わせるための。

「起動開始だ、ここからは欠陥製品次第<sup>ジャンク</sup>だな。どこまでやってくれるかな」

「起動………完了」

瞬間、大きな爆発が発生し黒煙が青空に立ち上った。



No.07:倒壊数十分(後書き)

PCの調子が悪くて更新できませんでした；

鏡の方は、出来次第投稿しますのでお待ちくださいm┐┌m

## No.08：瓦礫の中での交錯（前書き）

テスト期間なのでほとんど更新できていませんm（）m  
もうすぐ、いつもの更新率に戻るのと思うのでそれまではよろしく  
お願いします。

## No.08：瓦礫の中での交錯

瓦礫の山だった。目が覚めるとそこはいつもとは全く違う景色になっ  
ていて、灰と紅の色彩しか存在しない世界になっていた。

周りには多く怪我人がいた。それはそうだ、ここは中央街のショッ  
ピングセンターなのだから人がたくさんいるのは当たり前だ。

いや、違う。そんなことを言っているのではない。この景色はなん  
だ、なんでこんなに血が流れてる。

どうしてこんなにも全身が震えるんだ。前方も後方も天井も囲まれ  
ている。

抜け出すのにはたくさん時間がかかりそうだ。それ以前に抜け出  
せるのだろうか。

何かの燃える臭いがすぐ近くです。火事……？ 違う、もっと何  
か恐ろしいことが、あった。

「おい、君は大丈夫なんだな？ 無傷だな？ なら手伝ってくれ！  
ここを脱出する」

誰だ、話しかけてきているのは誰なんだ？ 知り合いではない、こ  
んな人は知らない。

頭がぼうつとして何も考えられない。

しかし、ふと頭をよぎったことはあった。

そうだ、あいつは。あいつはどうなった。一緒にいたあいつは。  
分からない、分からない……。

「おい君！ ぼうつとしてるなよ！」

ぼやけた視界が徐々に回復し辺りの光景を見渡すことができるよう  
になった。遅れて音も聞こえてきて、目も耳も鼻も感覚も戻りつつ

あつた。

俺の身体を揺さぶっている奴……知り合いではなかった。短髪の黒髪に誠実そうな顔立ちで体つきはよく、鍛えてあるようだった。

同い年には見えず、二つや三つ歳は離れていそうだった。

「大丈夫か？」

「あ、はい。ここは……？」

「中央エリア………だったんだが今は見る影もないな」

四方は瓦礫の山やもともとあつた壁でさえぎられており、天井はかなり低くなつており落ちてきたのだと理解するのに時間はかからなかった。

「とりあえず、動けるようだな。というか怪我はしてなかったな、俺もお前も運の強い奴だ」

そう言つて青年は笑い、立ち上がった。

辺りを見回し何かを確認しているようだが、俺には何をやっているのか分からなかった。

そんなことより考えるべきことがあつたからだ。………そう、蓮はどこにいたのだろうか。

かたまつていたはずなのに、蓮は近くにいない。それに先ほどの青年の言葉も引つかかった。

『怪我はしてなかったな、俺もお前も運の強い奴だ』

俺は気を失う前に動いたか？ いや、動いていないはず。足が言うことを聞かなくて動いていなかったんだ。

それなのに俺は無傷で蓮はここにいない。これは何を表す？

………蓮は何かしらのアクションを起こして俺を助けてくれたのではないのか？

俺はやみくもに瓦礫を除け始めた。

「蓮………蓮っ………！」

「君、いったいどうした？」

「友達がつ、埋まっているかもしれないんです！」

「探すのは無理だ！ 救助隊が来るまで俺たちには何も出来ない、それに今は瓦礫がうまい具合に重なってできたスペースに俺たちはいるんだ別に手を加えたらどうなるか」

青年の話は聞いていられなかった。こうしている間にも蓮は弱っていつている。

早く見つけ出して瓦礫の中から助けてあげないといけない。

「聞いているのか！？ 俺たちまで死ぬかもしれないんだぞ！」  
「つうん、と身体が冷えた。」

「俺たちまで死ぬかもしれない？ 何ですかそれ……まるで自分たち以外はもう助からないって言っているようなものじゃないですか。」

蓮はまだ死んでませんよ！

「だから俺たちにできることはないんだよ！ まずはここから脱出することが先だ」

ようやく押し出したかのような声で青年は叫んだ。

分かっている、自分だってやるべきことは。でも、置いていくことはどうしてもできない。

青年に背を向け瓦礫を取り除いていくと、腕が見えた。

「蓮っ！？」

何も考えずにただがむしゃらにどかしていくと、見なれた茶髪が薄汚れていた。

「っ、………んだ。 亮か………なんで手真っ赤なんだよ」

気づいていなかった。瓦礫を退かす作業の中で手にはたくさんの傷が出来ていてそこから出血していた。

「蓮、大丈夫かっ！？」

「大丈夫、ではないな………。へっ、その前になんでお前は俺を助けたんだ？」

「なんでって………蓮だって俺を助けてくれたんだろ！？」

「いいか、お前のことだからこういう事態になるとテンパってんだろ。………よく聞け、最優先するべきは亮、お前の命だ。分かっただろ」

「分からねえよ!?　なんでそういうこと言うんだよ、………助かりたくないのかよ」

「………俺はnumberだ。人間の方が最優先に決まっているだろ」

吐き捨てるように蓮は言った。言っではいけないことを。

こんなことを言う奴ではなかったのに、そうだ、解ってる、俺のせいで、知っている、でも、でも、言っではいけない。それは決められているんだ。それに、こんな状況でわがままでけど、本当にどうしようもないくらいに馬鹿みたいだけど。俺が気に食わないんだ。

震える自らの血に塗れている手で瓦礫を退かす作業に再び戻る。

「亮っ、お前俺の話聞いていたのか!」

「関係ないっ………」

爪が割れて血がさらに流れた。

「お前がそんなこと、もう二度度言えないように性根を叩き直してやるから、だから………ここから生きて帰すんだよ!　死なせねえよ!」

精一杯の叫びだった。numberだからなんだというのだ、そんなものは関係のない話だ。

俺は今、友達を助けているんだ。

後ろからため息を聞いた。

「ふっ………かっこいいね、君。すごいよ」

それだけ言っつて、青年は俺の横にしゃがみ込んで瓦礫を退かしていた。

青年は笑っている気がした。

「君、名前は?」

「桜参　亮………」

「俺は、道寺　昌。さっさと助けてしまおう!」

それから二人は会話もろくにせず、瓦礫を退かす作業を淡々とこなしていった。

「くくく………無人警官は妨害電波で起動せず、シヨッピングセン  
ターはすでに崩壊。さあ、どう出るのかなあ？」

旧市街の一角、廃ビルが立ち並ぶ区域で少年は笑う。  
光もささずただ暗闇の中でパソコンの画面を眺めながら。

ビゴーン、と言う効果音とともに三角形の中にエクスクラメーショ  
ンマークの含まれる小さなマークが画面の左端に出現した。

「あ？ なんだこれは」

「………どうやら欠陥製品ジャンクが一体行動不能になったようです。爆破  
に巻き込まれたのでしょうか。それにもう一体、電子大脳に傷がつ  
いて行動に害が出ています」

隣に居座っているというのを忘れそうになるくらいの希薄な存在、  
その男が言った。

「お前、………その気配の断ち切り方、我流か？」

「ええ、そうしなければ生きていけない世界でしたから」

「はっ、なかかなおもしれえ人生歩んできたみてえじゃねえか」

「あなたには敵いませんよ。あんなところに雇われて生きていたの  
でしょう？」

その瞬間、廃ビルが震えたと錯覚するぐらいの殺気が隣から迸った。  
しかし男は気にもしない。ただ、その様子を眺めるだけだった。

眺めることだけしかできないのではない。ただ、自分の意識レベル  
で眺めるだけなのである。

「今の俺を前にして顔色変えないどころか顔の筋肉一つも動かさねえとはな……………お前」

「いえ、あなたの殺気はすばらしいものでした。あなたが悪いわけではありません」

「なるほど、な。そういうことが」

ようやく少年は落ち着き、再度パソコンのディスプレイを見た。警察部隊が到着したようだった。しかしこれも気に食わない。

どうせ

にとつては必然なのかもしれない。

だったら、この国は腐っている。ならばどうする？ 答えは壊す。

壊して毀して壊して毀して壊して毀して壊して壊して壊して壊して壊して壊して毀して。

なにもかもが無くなればいい。そしたら自由になれるだろう。

「は、欠陥製品ジャンクにかかってんだからなあ、この作戦。……………正常作動機は2体、か」

蓮をようやく瓦礫の下から助け出し、広い床に寝かせた。

「っ……………お前はバカだな、……………ほら、次はさっさと助けを呼んで来い。俺はここで寝てるからよ」

流石に怪我の酷い蓮を背負って行動することはできなかったので、しばらく休んでもらうことにする。

本当なら、無理にでもここから一緒に抜け出したいところだったが。

「あっ……………昌さん。頭から血が……………」

「ん、ああ。これは大丈夫、俺が目を覚ました時にはもう流れてたからさ、さつき止血しておいたんだが……………」

頭に巻いてあったタオルの赤いシミが広がっていたのだ。

「それより、亮君！ あそこの隙間から何とか抜け出せそうだ。行

こう」

昌の指差す先には人一人がちょうど通れそうな穴があった。偶然そこだけぽっかりと空いたようで、突起物も何もなくこれ以上は怪我せずに抜け出せそうだった。

そこから抜けると、辺りは灰色の煙が立ち込めていてあまり視界が安定してないかった。ぼんやりと見える程度なので黒煙よりはましだった。

「あっちの出口に向かおう、煙が流れているから近いと思う」  
昌の冷静で的確な判断に賛同し、ついていくことにした。

道行く途中に、よろよると影が動いているのが見えた。壁伝いに歩いていても弱弱しかった。

どこか見たことのあるくせのある肩までの髪に、か細い雰囲気。周りの景色と重なってそれはさらに強調されたようにも思えた。

「西…………種…………？」

「あ、けほつ…………さ、桜参、さん」

間違いなく西種風見だった。

「大丈夫か!？」

「はい、…………なんとかは」

倒れかかる身体を支えてやり、肩に手を回す。

「あつ…………けほつ」

「わりいな、今は我慢してくれ出口までだ」

西種に肩を貸して歩いていると向こうから担架を背負った救急隊員がやってきた。

「大丈夫か、君たち。すぐに病院に運ぶからな」

そう言つて、担架を展開させた。

「西種を……………お願いします」

「分かった。先にこの子を連れていくが、君たちも残りの救急隊員が迎えに来るからここから動くなよ? 大雑把に破壊してくれたことで内部は迷路状態だ。動くとき迷子になるからここで待ってるんだぞ!」

念を押して隊員は去っていく。俺はその場に座り込んで、とりあえずは助かったと安堵した。

「よかつたな、亮君。助かるぞ」

「はい……………昌さんのおかげです」

これで俺たちは助かった、蓮も助かる。そう思って気を抜いて安堵した時。

悪意は牙をむく。

ズガアアアア、と前方から破壊音が聞こえ煙が揺れ、人影が現れる。

間違いない異常、この状況の中こちらに向かってまっすぐと、まっすぐと歩いてくる。

チャキリ、と嫌な音を聞いた。

この効果音から連想されるもの、思いつくものは少なくはない。

「昌さん、危ないですっ！」

「分かっている！」

二人同時に伏せた時、弾丸が頭上を越え奥の壁に命中し、爆発を起こす。

人影は近づいて、弾丸は破裂して。

「破壊せよ、ハカイせよ、はかいせよ、との命令。重要度Sランク。最優先で実行」

目には何も映らない。ただ、標的をその目で反射するだけ。



## No.09：表裏一体（前書き）

桜参亮……………この物語の主人公。科学技術者の父を持つ、差別を許さない。人間

岩沢蓮……………茶髪ツンツンの亮の友達。チャラく見えるがお洒落なだけ。number

西種風見……………少し癖のある髪の子。気が小さく、小動物的。number

道寺昌……………勇敢な男の人。銃の扱いも心得ているらしい。

壊れない実験台……………暗がりに住む（？）、一人の少年。眼帯をしている。

欠陥製品……………numberとして機能しなくなった、または製造段階で廃棄されたもの。

無人警官……………人工知能を持ったロボット。ただし、感情機能が搭載されていないのでnumberとは扱いが違う。

本来ならば、numberとしても生きて日の光の下を歩けるはずだった。

しかし、ほんの一つピースが欠けているだけで存在してはいけないものになり下がる。

欠片が一つ足りなければ。

パズルは完成しない

とは言えるだろう。

いや、何においても同じこ

足りなければ異常。通常の世界には異常の居るべき場所がない。それは当たり前のことのようにされている。確かにそうかもしれない、誰だって異常は忌み嫌う。突飛してるもの、格段に底辺のもの、種類が違うもの……………。

だけでも、それでは異常はただ排除されるだけの存在であっていいのか？

ほんの一つ足りなかっただけで、それだけで別物と判断され消されてしまっているのか？

完成していない不完全では駄目なのか、そんなに完成したものが偉いのか？

もし、すべてが肯定で答えられてしあうのであれば、この国は腐っている。

ではどうすればよいか、答えは簡単であろう。そんなものは決まっています。

人類が長らく使ってきた方法だ。

壊せばいい

だからまずは手始めに目の前の二人を殺してしまおう。

手の内の拳銃の引き金を引くだけでよい、それだけで息は切れて、

死に絶えるだろう。  
では始めよう、一方的な残虐を。

状況は最悪だった。目の前にはこの事件の犯人といえるだろう人物が立っていて、拳銃を所持している。

しかもそれはただの拳銃ではない。拳銃の方が特殊なのか弾丸の方が特殊なのかはわからないが、何かに打ち当たると、爆発を引き起こす。

これではかすっただけでも危険だし、本当に一発もらったら最後だろう。

そんな中でこちらは丸腰、そして力のない俺と怪我をしている昌さん。

どうすれば……どうすればいい？

「目標捕捉、命中率70パーセント、第2射」

「危ないっ！」

かがんでいる状況の中、昌さんはこちらに向かって飛び込んできて、俺を転がすように突き飛ばす。

ベゴオン、と先ほどまで俺が身を伏せていた場所は陥没し、小さな爆発を引き起こしていた。

「命中せず、」

「昌さんっ、とりあえず逃げましょう！」

「分かった！」

出口とは反対方向に蛇行しながら逃げる。直進では銃が発砲さえした場合当たるかもしれないからだ。

みるみるうちに人影は小さくなっていく。

蓮のことが心配だったが、あいつは必ず俺たちを狙ってくる。

そう確信し、逃げた先に着いたのは本屋だった。

雑誌や単行本が床に散乱し、歩きにくかったがここには背の高い本棚がたくさんある。もしかしたら反撃の余地があったり、一周して相手と位置を逆にして出口までいけるかもしれない。

ひとまず本棚の影に隠れ、相手の様子を窺う。

「亮君……拳銃がある。もしかしたら動けなくすることぐらいはできるかもしれない」

見ると、昌さんの手には敵が持っていたのと同じような形をした拳銃があった。

「それ……どうしたんですか？」

「さつき君の友達を助けた後に穴を抜けただろ？ その時に床に落ちていたんだ。もしかしたら使えるかなと思ってね、おそらくあいつの落したものだろ。このことから考えるに、あいつは何度もこの建物の中を徘徊している」

確かにあいつは破壊すると言っていた。それならばこの中を徘徊して生き残った者を消そうとするのもわかる。しかしあいつはなんで煙の害を受けないんだろ。人間だろ？ numberだろ？ 器官は同じなんだから苦しいはずなのに。

そこで一つの新しい疑問が思い浮かんだが、すぐに打ち消した。

その間にも昌さんの頭に巻いたタオルは血がさらに滲んできている。

「亮君、相手はどれだけいるかわからないけど、とりあえずはあいつを抑えられれば逃げ出せるから頑張ろう」

そんな励ましが聞こえて、ぐちゃぐちゃになる思考を言ったん停止した。

今は抜け出すことだけを考えていればいい。余計なことは考えなくていい。

がさつ、と音を消そうともせず何者かがこちらに向かってくるのが分かった。

そして無差別に弾丸を周りに打ち込み、暴発させる。

次々と本棚が砕け、燃え、跡形もなくなっていく。

俺たちが隠れているのは参考書コーナーであり、あいつが今発砲しているのは入り口付近であるから小説コーナーだと思われる。だとしたら、あいつはこちらに背を向けていることになる。

昌さんが今発砲すれば、命中するかもしれない、しかし当たらなかつた場合はこちらの居場所を知らせることとなる。煙で視界が良好ではなく、それに昌さんは拳銃を使うのも初めてだろう。当たる確率はほぼないと考えられる。

どうしますか、という意味を込めて昌さんに視線を送るが、そこに昌さんはいなかった。

「どこにつ……………」

小声でつぶやくが、姿は一向に見当たらない。遠くで銃声がし、声が聞こえる。

「ぐつあ…………… 損傷レベル…………… 最大、再起不能……………」

続けてパンパンパン、と音が聞こえた。

「亮君！ 大丈夫だ、こつちに来てくれ」

昌さんの声だった。急いで本屋の入り口方面へと向かうと、あいつが倒っていてその隣に昌さんが立っていた。

「昌さん……………？ どうして？」

「ごめん、何も言わずに飛び出して言ったりして悪かったよ…………… 僕はね、実は自衛隊に属していたことがあるんだ。相手に気付かれず、そして倒すことぐらいは簡単だったんだ。でもね、それを君に伝えてしまうと、少しの安堵感が相手に伝わってしまうことがあるんだ。だから緊張したままで、そのままむかつたんだよ。本当にごめんね」

「そう、だつたんですか」

思わず目線があいつの方へ行ってしまう。血は流れていなかった。そんな俺の目線や考えに気付いたのか、昌さんはこう言った。

「ああ、この拳銃の中身は硬質ゴム弾だったよ。当たり所が悪ければ脳震盪を起こさせることも簡単なくらいにね」

「よかつた……………」

「よかつた？ ……………君はやさしいんだね。僕たちを殺そうとしたこんな奴にもそんな気持ちが出てくるなんて」

「……………いえ」

それだけ言つて、後は先ほどの出口まで向かうのであった。

「よお、」

煙の向こう側から声が聞こえる。それは俺に対してのものではなく、昌さんにとつてのものだったと感じた。それが分かったのは、昌さんが動揺していたからだつた。

人影はいまだに見えない。殺意は感じないので、先ほどのあいつの仲間ではないと感じた。

「な、……………何故だか解らないけど怖い……………震えるんだ、何か身体が反応するんだ」

顔が真っ青になり、ガクガクと震えるその姿はまるで何かに脅えているようだった。

雨にうたれて身体が冷え切つたような子犬のように震えながらも拳銃のグリップは離さなかつた。

「誰だつ？」

昌さんの代わりに煙の中へと問いかける。

「ああ？ なんだよ、一般人連れまわしてんのかよ。……………お前だな、<sup>ユウスケ</sup>使い捨てが<sup>ユウスケ</sup>大脳部を損傷したつて言つてたのは。まったく、壊れる前の記憶か、そりゃあ？ 他の<sup>ジャンク</sup>欠陥製品も全員使い物にならなくなつたしな。……………<sup>ジャンク</sup>やっぱり欠陥製品に頼るのは駄目か、まあ想定内の結果だつたがな」

煙の向こうからはため息混じりの声が聞こえてきた。

それは楽しんでるようにも聞こえた。その間にも昌さんは震えた

ままだ。

何かとてつもなく嫌な予感が走る。それは先ほどまで自分が考えていたことについてだ。

あわよくば嘘であつて欲しいと願つた自分の考察。

「おい、お前。お前だよ、その拳銃握っている奴。しっかりと働けよな？」

ジャンク  
欠陥製品なんだからよお

「うわああああああつ！」

昌さんはためらいもなく拳銃を握り直し、煙の中のようやく見えるようになつた人影に向かつて二度発砲する。

ズガン、ズガン

と明らかにその人影に命中した。ぐらりと身体は揺れるが、倒れはしない。

人影は歩きだした、こちらに向かつて。だんだんと煙の幕が晴れていき、その全貌が明らかになつた。

整つた顔立ちに長い髪前髪、それは目のあたりまで伸びており邪魔そうだつた。

片目に眼帯をし、上は黒の無地の半そでシャツに下は紺や黒に近い色のジーンズだつた。不思議なのは靴を履いていないことだつた。

そして、傷一つないということ。

「きかねえって言つたらどうする？」

「う、う、くそおおおおおつ！」

続けて引き金を引くが、一発しか発砲されなかつた。しかしそれは彼の眉間へと吸い込まれていき

当たる直前で左上に逸れて天井にぶつかる。ドン、という音だけが二回辺りに響き渡つた。

「当たった……？ いや、当たってから逸れた？」

「おい、その欠陥製品ジャンク。お前はいい加減思い出したらどうだ？  
自分はもう死んでいて、俺たちに弄繰り回されてここに居るってこ  
とをなあ？」

ガン、と昌さんが床に膝をついた。目は虚ろになり、何を見ている  
のか何を考えているのかも話からない。

「おっと、使い捨てユウストがやってくれたようだな」

「な、昌さんはどうなったんですか！」

「んなことはどーでもいいんだよ、一般人。そんなことより今のこ  
の国をどお思う？」

「そんなことつて！ 昌さんは俺を助けてくれたんだよ、このまま  
の状態なのは俺が許せないんだよ！」

「ほお、所詮 number、しかも欠陥製品ジャンク。なんてことはいわね  
えんだな」

「当たり前だろ！ 人間と number は平等なんだよ！」  
「へえ、」

この建物が震えるくらいの殺気をここで感じた。

脳からの命令とか、頭で考えるとかそんなことは一切関係なしに身  
体が震えていた。

「この国の政府がどれだけ腐っているかも知らずにのうのうと生き  
ている人間がふざけたことぬかしてんじゃねえよなあ！」

重く押し掛かる重圧に、俺は声だけを聞いていた。

「裏を知っている人間がいいとはいわねえ、むしろ最悪だ。だけど  
な、裏の奴に対して表の奴が口出しするなんてなあ、自殺行為だ、  
よく覚えておけ。それと、こいつはもう動かない」

昌さんを指し、少年は言う。

「もともとは欠陥製品ジャンクだ、死んでたものだからな」  
そのまま背を向けて遠ざかっていく少年には謎しか残っていなかつ  
た。

もう理解することも疲れ、そのままここで眠ってしまいそうだった。

力を振り絞って立ち上がろうとするが、うまく立てない。すぐにふらついてその場で倒れる。

意識がだんだん遠のく。その中で、最後まで俺はあの少年の言葉が頭に残っていた。

『この国の政府がどれだけ腐っているかも知らずにのうのうと生きている人間がふざけたことぬかしてんじやねえよなあ！』

**N o ' 0 9 : 表裏一体 (後書き)**

テストが終わりました！

更新率が回復できるの思うのでまたよろしくお願いします！

目が覚めた俺に飛び込んできたのは見なれない天井の景色だった。ここが家ではないことはすぐに理解できた。

確かにベットが普段使っているものより柔らかかったのもあるし、枕も違う。極めつけは目線の高さ、であるう。

清潔なシーツに挟まれて眠っていた俺はようやく思い出す。

あの破壊と暴力に満ちたあの場所で気を失ったということに。

目の前に現れて狂気と殺気を振りまいていたあの少年は何だったのだろう。それに、欠陥製品ジャンクという単語にも引っかけがあった。

通常、欠陥製品ジャンクは損傷して生きることが困難になった number や作られる段階で欠陥があったものを指しているものだ。それらは動くこともなく、すぐに処分されるはずなのに何故こうして動いていたのか、残っていたのか……それが謎で仕方がない。

それに昌さんはどうなってしまったのだろう……少年は『もう動かない』と言っていた。最悪の場合を想定するが、それは振り払う身体を起こさそうとして、手に何かが繋がっている感覚があった。

点滴ではない。ベットの傍らには何も置いていないからだ。

そのときに来客用のパイプ椅子に座り、ベットに顔をうずめるようにして眠っている月乃を見つけてしまった。

だとしたら、この手にある感触は月乃の手？ 手をつないでいるという状態なのか？

困惑する俺に対して、月乃は目を覚ます。

「……………あっ！ 亮、起きたの？」

いつもとは違う月乃の声音に、戸惑いつつも返事を返す。

「あ、ああ……………それより月乃サン、この手は……………？」  
そう言っただけで俺がシーツをめくる前に。

最高速で顔を真っ赤にした月乃はそのまま振りほどこうとはせず、俺の腕ごとひねって関節技を綺麗に決めてくる。

ギチギチギチと骨が軋み、鈍い痛みがやってくる。

「うあ、痛たたたたたたたたつ！いきなりなんだつ！」

「うるさいっ！とりあえず黙れ　　っ！！！」

朝の病院に俺の悲鳴と月乃の怒号が飛び交った。

数分後、ナースコールもしていないのに看護師が飛んできて大騒ぎになった。

あれだけ大声を出せば当たり前のことなのかもしれないが。

事態が収まって、看護師がこの病室を出て行ってからやつと月乃は口を開いた。

「わ、私は西種さんのお見舞いに来てただけだからね。たまたまあんたの部屋によって寝ちゃっただけなんだから。そ、そもそもあんなの病室に来たのは西種さんが『行ってあげてください』って言うてきたからなんだから！」

「分かった、分かったから拳を作るのはやめてくれ！俺は一応病人なんだから！」

先のほどこの部屋に訪れた看護師の話からすると、極度の緊張から来たただの精神的な疲れが出ただけらしい。なので、貧血で倒れたようなもので明日には退院できるらしい。

大事を取って入院らしい。

「そういえば……西種の所行ってたんだよな？どうだった？」

「うん。そんなに大きな怪我もしてないし、大事には至らなかったみたい」

ようやく拳を解いてそう返してくれた。

俺はあと一人、容態を確認しなければならぬ奴がいた。

おそらく、というか絶対に月乃はあいつの病室には行ってないだろうから、聞いても無駄であろう。

と、俺がベットから降りようと身体を起こした時、

「亮ー！生きてっつか！？俺はバリバリだぜ！　っーか部屋どこ

だよ！」

「先生っ！ 243号室の岩沢さんが抜け出しましたあ」

「なにい、すぐに連れ戻しなさい！」

「うああああっ、先生！ 患者が走ってますっ」

廊下からすごい大勢の声が聞こえてきた。病院は静かにするところだぞ。

それにしても蓮が無事だったのはよかった、大きな怪我をしているようだったがあの調子なら大丈夫だろう。

…………… あれは、俺をかばって受けた傷。

心が重くなる。あの時、俺が反応できていれば蓮は今頃無事だったのかもしれない。昌さんだって……………。

「亮……………？」

見れば月乃が心配そうな顔でこちらを見ている。月乃には、心配掛けたくない。

「いや、なんでもないよ」

「そう？ すっごい悩んでそうな…………… うっん、悲しそうな顔してたから」

「本当に大丈夫だ、…………… あれ？ なんで月乃は制服着てんの？」  
昨日が三連休初日であって、今日は二日目の朝だ。俺が丸2日間寝ていたわけでもないし、時間がおかしくなっているのでもない。ではどうして？

「なあっ！ べ、別に私が何着ようと勝手にしょ！？ なんなの、喧嘩売ってんの!？」

いつもより3割増しぐらいの怒気と大声で俺の言葉を破壊しにかか

る。  
俺は何かおかしいことを言っただろうか。

もともと無い頭を回転させても答えは出てこないだろうから、適当にテレビのリモコンをポチポチとしていた。

どこもかしこも昨日の事件のことをやっている。中央街爆破テロと名付けられたその事件は大きく取り上げていた。

昨日、爆破テロがあつたこの中央街はまだ復興作業が行われず警察が立ち入って捜査を始めています。犯人ははまだ不明。警察の調べによると爆弾を使った建物倒壊型テロなどと言われています。テレビからのあまり抑揚のない声が病室を満たした。

犯人、それはあの少年なのだろうか。それにしても武器も持たずに軽装備、いや私服同然だった。

銃を発砲していたあいつらは？ あれこそが犯人だったのか。それにしては目的もなかっただ撃ちまくっているだけだった気がする。だつたとしたら愉快犯？ それにしてもずいぶんと大掛かりな事件だ。目的が分からない。

「亮、さつきから固まつてるわよ？ 本当にどうかしたの？」

いや、あの少年は政府がどうか言っていた。世界の裏がどうか。これからもこんなことが起こるのだろうか。

俺にはもうよくわからない……………。

「うつしやー！ ここだな。亮、見舞いに来たぜ！」

病室のドアを開けて大声で挨拶するのは蓮。見舞いって、お前も病人だろう。

月乃は、『うるさい奴がきた……………』と言わんばかりに頬を引きつらせた。

「お、月乃も来てたか。俺は完璧に治った！」

その場でスクワットを始める蓮。なんだかいつも以上にテンションが高い。

「じゃ、私帰るわね。お大事に」

そう言つて颯爽と居なくなってしまう月乃。どうしたっていつも蓮とは相性が合わない。

なんでかは俺が預かり知るところではない。

「ふっ、ふっ、ふっ……………あれ、……………なんか感覚がなくなってきた」

「馬鹿かお前！ それやられてんだよ、おとなしくしてろって」  
再びドアが開かれ、医師と看護師が息を切らせて立っていた。

「岩沢さん！ 困ります、勝手に抜け出したりしてもらっては！」  
「そうですね！ いきなりいなくなるものですから腰が抜けちゃいましたよ！」

「ほら、戻って。…………朝から疲れた、今日も家に帰れない…………」  
医師1人と看護師2人に引つ張られ俺の病室をあとにする蓮。  
どこまで行っても馬鹿だった。

私のもとに珍しい見舞い人が訪れた。

今日はやけに病院が騒がしいうえに私の病室によく人が来る。

「生徒会長……………さん？」

「や、色々大変だったみたいだね」

片手を上げて軽く挨拶を返してくれるのは私たちの通う私立舞桜高等学校の生徒会長さん、錠越眞守さんだ。つややかな黒髪をさらつと払って、来客用のパイプ椅子に腰かける先輩はやはり美人である。その髪がうらやましく思える。自分の髪は少し癖があつて、湿気が多い日などは大変なのである。だから雨の日はあまり好きじゃないし、梅雨の季節は困る。

「酉種風見くん、そんなに大事はないようだね。安心したよ」

ふわつと彼女は柔らかい笑みを浮かべて目を見つめてきた。

その美貌に女である私でさえ赤面してしまふ。

「あ……………う、はい。……………少しだけ煙を吸っただけです」

「そうか。確か火事にもなつてたんだよね。……………あんな惨状の中でよく抜け出せたね」

「それは……………桜参君が、助けて……………くれて。テロリストもその場に居たそうなんですが……………逃がしてくれて」

「テロリストの顔って見たのかな？」

「いいえ……………煙がすごくつて、影は見えたんですけど……………」

「その前に桜参くんが、か。ああ、なるほどね。そっかー、そうだ

よね」

先輩は一人だけ何かに納得したようで、ウンウンうなづいている。

「何がそうなんですか？」

「いや、こつちの話だよ。時に風見くん、キミには今思いの人っているのかな？」

急な話題転換とそういう話になったことで、息が詰まって咳が出た。

「……………っ！ けほっ、けほっ。 い、いきなりなんですか」

「キミは分かりやすいほどに面白いリアクションをしてくれるよ。

なんでもないよ、気にしないで。……………さて、そろそろ帰ろうかな生徒会の仕事も溜っていることだ」

「あ、あのあのっ。わざわざ来てくださってありがとうございますとございまして」

「いやいや、いいよ」

先輩はそのまま背を向けて病室から出て行った。

黒髪が宙を舞い、扉の向こうに消えた時にはもう静寂が戻ってきていた。

「今回はそんなに被害は大きくなかったそうね」

一つの拠点としている旧市街の一角の廃ビルの入口に立っている女の第一声はそれだった。

「んだよ。人間風情が頑張ってくれてたみたいだな、それに無人警官の復旧が思ったより早かった」

「折角欠陥製品を仕入れたのにこんなにパツとしないなんてね」

彼女はいつも違う服を着ている。今日は胸元にフリルをあしらっただけの簡単な紺色のワンピースを着ていた。

「てめえは……。いや、なんでもない今回は俺たちが舐めすぎた。次の作戦までには日を要する」

「やった、じゃあ遊んできてもいいの？」

彼女は女の子らしい仕草と何かしらで目をきらきら光らせる。そんなものはこの世界ではなんの意味もなさない。おそらく表に居る時での条件反射だろう。

「……………駄目に決まってるんだろ、馬鹿かお前は。仕事だ」

「えー、彼氏がまってるのにい？」

「そんな口調どこで覚えやがったんだ、いいからその資料に目通しとけ。それに」

「そうね、いざとなったらその彼氏だって殺す」

その一瞬だけは、彼女は彼女でなくなっていた。

「ははっ、……………大事にしてやれよ」

「あれ？ あんたがそんなこと言うなんてね。冗談でしょ」

黒い笑みのなすりつけ合いの末に彼女は表へと戻る。

そして彼はまた暗がりに戻る。

資料の中でかろうじて読み取れる文字。その中にはこうあった。

ダブルエーじゅうまんごんじゅう  
AA十萬十回收せよ。

少しの間の病院生活を終え、また普段の学校生活に戻れるかと期待していたのだが退院して早々警察の方々にこの間のテロについて詰問のようにネチネチ細々と聞かれ続け、俺はへとへとになっていた。「お疲れ様。これで聞きたいことは大体聞いたわ」

そう言っただけ女警官は書類を机の上でタンタン、とまとめ、先ほどとは違う柔らかい笑みを浮かべて空気を和ませた。とはいっても、ドラマなどで見るような殺風景な部屋に机と椅子とライトが置いてあるだけの部屋ではないので、気分はそんなに悪くはならなかった。横の蓮がにやにやしているのはシカトするとして、俺はもうすでに帰りたくなってきていた。学校にはもう4日程度も行っていない。

「そんなことよりおねーさん、若いですね！ いくつ？」

やはり俺の思っていたことは間違っていないかった！？ だから先に帰りたかったのに……………」

それにこいつ、怪我の直りが速すぎやしないか？

「さあ、いくつだと思えますか？ それより君たち、今からでも学校には行けるわよ、どうするの？」

「あ、いや。俺は家に帰って休むことにします」

「お、俺は！ あなたとともに……………」

「そう、じゃあ今日はゆっくり休んで明日に備えないとね？」

女警官は微笑を浮かべ立ち上がった。

「え！？ 俺はスルーなの？ 確かにふざけ過ぎたとは思っけどさあ！」

大きなリアクションでおどけて見せた蓮は、もう十分というくらいに元氣そうだった。

俺はその光景に安堵し、それと同時にもう一度あの出来事を思い出していた。

瓦礫に包まれたあの普段とは全く別の世界へと変わってしまった場

所。何もかもが壊されたいつもの世界で誰が平然としていられただろうか。それに加えて蓮の大怪我、昌さんの崩壊、裏世界の眼帯少年の登場。どうして俺はここまで平然としていられるのだろうか。自分でも分からない。まるで、今まで起こったことに全く自分が恐れていないようではないか。そんなことはない、実際俺は恐怖していた。パニックに陥っていた。それなのにどうして。自分が強靱な心の持ち主だと言い張ってしまえば済むことではあるのだから、それでは根本的解決にはならない。考えても答えが出るわけではないのだけれども。

「どした？ 亮」

眼前をひらひらと舞うものがあつた。いや、舞うと言っては語弊があるかもしれない。振られていたのは蓮の手だったのだから。

「いや、なんでもないよ。ほら、お前もさっさと帰ろうぜ？」

「え、ちょ、いやいや！ 俺はこのおねーさんとさあ。……………」と、

その前におねーさん！ 名前を教えてください！」

くるりと一回転し、先ほどの女警官に視線を合わせる。

「あれ？ さっき言ったと思うんだけどなあ。錠越よ」

ん？ 錠…………越？ どこかで聞いたことのある名前だったような気がしたが、昨日せいだっただろうか。

そんな俺の考えを余所に、蓮は大きな声を出した。

「錠越！？ あの、もしかしたらうちの学校の生徒会長のおねーさんとかですか！？」

「そうよ？ あつれ、知らなかったかしら？」

「知るも何も言つてませんよ！ ああ。流石、錠越の名を持つ人だあ…………美人過ぎるう」

ふにゃふにゃと蓮が踊りながらもリアクションを続ける。それを微笑で返す錠越警官。

俺は正直驚いてはいなかった。ただ、世界は狭いなあと感じていただけで、特にリアクションは無かった。別に求められていたわけではないけども。

「もう一度正しく自己紹介するなら……そうね。錠越眞奈美<sup>まなみ</sup>よ。錠越眞守の姉で、今は警官をやっているわ」  
そう言いながらかるく会釈した眞奈美さんは、蓮が言つとおり美人だった。

こんな服を着るのは我慢ならなかったけど、これからのことを思うとそうも言つていられなかった。側面が灰色一択に塗りつぶされたこの建物はとても人間を収容しているような場所ではないと思う。とは言つてもここは目的地の一つでしかないので、こんなところで躓いているわけにはいかないのだ。そうは言つてもやっぱり腑に落ちない。何故自分が先行役なのか。まあ、答えは自分で乗り出したから、なんだろうけども。

「でもさあ、私一応女の子だよ？」

木が生い茂る森の中、灰色一色の建物を目の前にして女はそう呟いた。その美形に似合わず黒色のジャージを上下着ていた。背中には大きな鞆を担いでいて、ガシャリガシャリと音を立てていた。その音から察するに、中のものは相当重いものだと推測できた。

「早めに終わらせて次行っちゃおうか。さあて……」

彼女は歩く速度を上げる。背中に担いだ鞆の中に手を突っ込みながら。

彼女は灰色の建物の門をくぐる。片手に黒光りするものを握りながら。

そして彼女は建物の中で一声。「こんにちわー」と。

「君、こんなところに何の用だい？　ここは囚人施設だよ？」

腰に警棒、拳銃を携えた男が歩み寄ってきた。武器は確認済み、施設内の地図も頭の中に入っている。後は暴れるだけ……おっと、

もう一つの用事もこなしておかないといけない。

確か最下層に囚われているはずだ。使い捨てが時間になったらセキユリティを解除してくれるので、特に問題はない。

ここに居るのは…… A-0100001A だっただろうか。最初にして最狂とは聞いていたが。

それも特に問題はないだろう。ジャミングをかければ解決する話だ。

少し考えたところで男に視線を移し、やっぱり殺すことにした。

「ちよつとお借りしたい人がいるので、さようなら？」

ドパン、と発砲音が鳴り響き、男は糸の切れた操り人形のように床に崩れ落ちた。

寸分の狂いもなく心臓に命中したのだろう。溢れだす血が止まらない。血の洪水が起きている。

「な、………んだ、お前………？」

「なんだー、って聞かれてもねえ？ あえて言うんなら国に見放された者つてところかな。それじゃ、永久の眠りにつきましようねー？」

バンバンバン、と新たに発砲音が施設内に響いた。

たどり着いたのは最下層。光もささないこの場所では自分の持っている懐中電灯だけが頼りだった。

しかし、狭い廊下は一本道だった。ここまでこればもう迷うことはないだろう。

「しっかし暑いわね………それに暗いし………。地下ってそんなもん？」

誰に問いかけるでもなく独り言のように呟いた。

上ジャージのチャックを胸元まで引き下げ、手であおぐ。風は来ないので気晴らしにしかならないが。

懐中電灯の光に反射し、何かが光った。柵……のようなものだ。

「ここかなー？」

懐中電灯で照らしてみると、そこには椅子に拘束された男がうつむいていた。どうやら首以外は動かせないように拘束されているようだった。それによく見ると、鎖で何重にも雁字搦めにされていた。その鎖の繋ぎ目には南京錠ではなく、電子ロックのようなものがついていた。

「なかなか嚴重だね……って当たり前か」

部屋の隅には超音波を発生させる機器のようなものが置いてあった。あれは人間、numberどちらにも有効な、脳波に超音波をぶつけて乱れさせるものだ。そうなると身体の自由が利かなくなるどころか、気絶してしまう。その気絶している間にも超音波は飛んでくるので、最悪死に至る。もちろん、numberの場合は脳の情報伝達を不能にし、回線を焼き切ってしまう。要するに死んでしまうのだ。

「怖いねー、こんなものまで用意しているだなんて。確かにこの子がこれば私たちがぐつと楽になるしねえ」

電子ロックのかかっているはずだった鉄格子を外し、超音波機器を拳銃で破壊して中に侵入する。

茶髪に金メッシュ……これが彼の特徴だった。まったくもって開発者は何を考えているのか分からない。私だつて赤がかつた髪の毛の色だし。

彼は起きている様子が無い。かといって寝ているようにも見えない。何だろう、何だがおかしな気がする。

「ああ、……誰か来たのか。誰だ」

グウイン、とまるで効果音が鳴ったように首を持ち上げ、その眼が私を捉える。その眼にはいまだ生気が失われていなかった。じり、と私は後ろに距離をとること自分の中で最優先となっていた。

「んだ、ガキか。遊ぶ場所じゃねえぞ。ここは」

そいつの目線は私の胸元に注がれていた。

「な！ なんなのよあなた！ 見せもんじゃないわよ！」

急いでチャックを上まで上げ、ギギンと睨み返した。

彼の顔には無表情が張り付いていた。しかし、その顔のまま、

「無いもの見せたってしょうがないだろう。それよりなんでお前

がここに居る」

「なつ、く……………。あんたを連れ出しに来た」

「へえ、ガキが一人ですか。この国の警備も甘くなったもんだな」

「それよ」

身体に纏わりつくいつもの雰囲気は切り裂き、内側から殺意、悪意、をむき出しにする。

交渉においては、どこまで自分を相手に見せるかが重要となってくる。

「なるほど、そんなガキでもか。ますますだな」

「それで？ 返事を聞かせてもらいたいのだけれど」

「面白そうだな」

「そう、それじゃあよろしく。AA十<sup>ダブルエーじゅうまんごんでじゅう</sup>の御一人さん？」

「またの名を……………なんだっけ？ <sup>アクシュミナオモチャ</sup>科学者達ノ玩具だっけ？」

No.12:機嫌(前書き)

すみません、だいぶ遅れましたm( ) ( ) m

「おい、どこへ連れていくつもりなんだ」

茶髪に金メツシユの男は抑揚のないその声で少女の背中に問いかける。

「とりあえず、これ渡しておくから。あ、間違っても後ろから刺そうなんて考えないでね」

「ふん、……………こんなものを軽々と渡せる奴にそんなことは思わんよ。……………特にお子様にはな」

「なんなのあんた……………喧嘩売ってんの？ さつきからあ……………」

イライラしつつ、少女は次の目的地に移動していた。とりあえずは歩きで、山の中にある一つの研究施設にだ。先ほどの収容施設から山一つ越えたところにある。

それまで、こんな薄気味悪い奴と二人きりだなんて嫌だったが、まあ仕方ない。

これも私の仕事の一つだからだ。

それにしても蒸し暑い。ジャージのチャックを下げたいのだが、こいつがいる前では……………。

別に平たいだとかお子様体型だとか言われたから気にしているわけではない。

「いつ……………たいなあ……………。ほんとに歩きにくい」

「……………」

男は何も答えず私の後ろをついてきている。なんか背中がゾワゾワしていて気持ちが悪い。

そんなことを考えているうちに、山の頂上まで来てしまっていた。とつくに陽は落ちて辺りは真っ暗になっていた。

向こう側に光が見えた。あれが例の研究施設だろう。あそこに大量収容されているだろうから、あそこまでたどり着ければ私の仕事は終わり、とは聞かされていたけれど連れて帰るときはどうしたらいい

いのだろうか。そこら辺は、使い捨てや壊れない実験台がなんとかしてくれるだろう。

「今日はここで休憩よ。私は寝るけど、あんた勝手にどこか行ったりしないよね。あと、私に何かしようとも考えないでね！」

「分かったから黙ってる小娘。今の状況下で軽口をたたけるのか？」  
「がさがさ、と周りの草木が揺れる。」

「おい！ 見つけたぞ、脱走者と協力者だ！」  
多くの警備隊が迫っていた。

「ええ………使い捨てが回線切ってくれたんじゃないの？ 完全に油断してたよ」

「未熟だな」

「っ………なによ。 そうだ！ この際あんたの力がどのくらいなのかを確かめてあげるわ」

「まあいいだろう。 見てろ」

スツ、と流れるように移動した金メッシュはナイフを逆手に構えて一番近くに居た警備隊員ののど元を掻っ切る。

噴水のように流れ出す赤に見向きもせず次の標的に迫る。

流れるように敵を仕留め、血飛沫をまき散らす。それはまるで『舞い』のようだった。

どしゃあ、と警備隊員が全員倒れたころ私は目を見開いていた。

「やるじゃん………あんた」

「あんた、じゃない。感情規制だ」

「へえ、そつちの名を自ら名乗る奴がいるなんてね。どつちにしろ後でアイツに探られるんだけどね。あ、ちよつとどこいくの！」

「寝るだけだ」

「木の上で？」

「何か問題があるのか」

ぎよろり、とまだ獲物を狩り足りないかのような危なげな目をしていたのでこれ以上関わるのはやめることにした。また明日だ。明日、あの研究所を突破すれば私の仕事は完了。

また街に遊びに行けるだろう。

もったも、もうすぐ遊びに行ける場所さえなくなるのだが。

昼休みに登校を済ませ、俺は机に突っ伏していた。あの警察署から徒歩で学校まで戻ってきたのだ。

飯は蓮と一緒に学校へ来る途中で済ませていた。今はボーっと昼休みを流しているだけで、蓮はいびきをかいて寝ている。後ろの席の月乃は、何かの文庫本を読んでいるようでその姿も様になっていた。なんとなく暇を持って余していた俺は廊下に出て窓枠に腕を組んでかける。

外からの風は気持ちよかったが、気分がすぐれない。疲れているだけだと思っただが、何故だか心が重かった。あの事件を引きずっているからだろうか。あれはテロだ。そして俺は巻き込まれた。ただそれだけのことなのだが……………。

「桜参くん。さーくらまいりくん」

「え？ …………… 生徒会長さん？」

窓の外を眺めていた顔を声のした方向に向けると、確かにそこには生徒会長、錠越眞守先輩がいた。

声をかけてきたことにも驚いたが、何故に俺の名前を知っているのだろうか。いくら学校のトップだからと言って生徒全員の名前を覚えていられるわけでもないだろう。

それでは、何故？

「ん、この間のテロに巻き込まれたんだって？ 大変だったでしょ。」

ああ、なるほど。それは確かに知っていて当然かもしれない。街の中心部のテロにこの学校の生徒が巻き込まれていたらそれは生徒会長長の耳にも入るだろう。

「こんにちは、会長さん。確かにこの間は大変でしたよ……」

「そっかそっか。でもさ、そんな中でも西種さんを助けてあげたんでしょ？ 男だねー、カツコイイね！」

「あ、はあ……そうですか？」

「そっだよ、普通は自分のことで精一杯だよ。そんな冷静だった桜参くんに聞きたいんだけどさ。あのテロの中で怪しい人物って見なかった？」

怪しい人物？ どうしていきなりそんな事を聞くのだろうか。知り合いが巻き込まれていたりとか、いやそれなら怪しい人物だなんて言い方はしない。誰かを探している？ 知り合いではない誰か。もつとほかの、誰か。

「な、なんでそんなこと聞くんですか？」

「いんや、お姉ちゃんの真似してみただけだよ。桜参くんは今日お姉ちゃんに尋問されてたんでしょ？」

「尋問って……そんなことはないですよ」

「んーそっか。じゃ、昼休み終わっちゃうから戻るね。時間割いちやってごめんね」

くるり、と踵を返しながら錠越眞守はそう言った。ひらひらと背を向けながら手を振る姿は妖艶だった。

気付けば授業開始5分前だった。

錠越生徒会長の顔はよく見えなかったが、特に何も気にならなかった。

教室に入る前にもう一度廊下を見やったが、そこにはもう姿は無かった。

返事を忘れていた。

「どうしたの、亮。なんだか難しい顔してるけど」

教室に戻るなり月乃がそう言ってきた。ちょうど文庫本をしまつて次の授業の準備をしていた。

自分の顔に手を当ててみるが、分からない。当然か。

「そんな顔してたのか？俺」

「うん。なんか疑う感じ。もしかして次の数学に嫌気がさしてたりして。宿題やってないでしょ？」

「そりゃあ学校休んでたからなあ……………」

「当てられないことを祈りなさいよね」

あ、見せてはくれないんですか。

そここのところはぬかりなかった。やっぱり月乃はSだ。どうせ、俺が答えられないところを見て後ろからシャーペンが何かで突きつつ、『ねえ、教えてあげよつか？ 分からないんでしょ？ 恥かくよー』とでも囁いてくるのだろう。酷い話だ。

こんなことが何回があつて、それから俺はちゃんと宿題をやるようになったのだが。今日はしょうがないだろう……………。

「あ、あのさ。鵜川さん！ 俺さ教科書忘れてきたから見せてくれない？」

可愛い声が後方から聞こえてきた。あいつの声だ。

月乃はシカト。仕方がないので俺が対応することにする。

「桃川くんさ、席あっちだよ。隣の席じゃないんだから無理じゃないかな？」

「ああん？ お前はかんけーないだろ。すっこんでろ！ 俺が鵜川さんの隣の席にこればいいだろうが。オイ替われ」

四月当初、月乃の隣の席になって喚起していた男子生徒に白羽の矢が立った。

「えっ、い、嫌だよお」

「うっせ！ 今の時間だけだつて。マジだつて」

「こ、困るよお」

「ぐだぐだ言つてんじゃねーぞ！」

「あううう……………」

桃川<sup>「たんなやう」</sup>にビビる奴もいたのか。確かに線が細くて気は強そうじゃないけど。

「私の隣はこの人なの！ あんたはつつさいからさっさと席に帰って！」

いきなり月乃が吠えた。

桃川は『おおおう……………』としなり、月乃のとなりの男子生徒は『ふおおおおつ！』と何かをみなぎらせていた。

よかつたな、男子生徒よ。月乃様の機嫌がよかつたのだろう。

「痛ったあ！」

俺の背中に電撃が走った。否、シャーペンが刺さった。

「な、な、な……………何をするんだ」

「イライラしてたから」

「……………」

俺はその言葉に返す術は無かった。やっぱり月乃の機嫌は悪かった。

No. 13 : crazy (前書き)

お久しぶりです。

陽が昇る前に行動は開始する。荷物は全てまとめ、必要なものはすぐに取り出せるように。獲物は腰に引っかけ、ハンドガンはホルスターに留めておく。

薄暗い中、二つの影が山を下っていく。狙いは向こうの明かりが消えた建物。

辺りには草木を踏みつぶす音のみが木霊し、不気味なほどに静まり返っていた。気温は低く、体温を奪っていく。こんなところまで忠実に再現されている身体をたまに忌わしく思う。いや、吐き気がするほどに気持ち悪くなる。何故、体温を感じられるように出来ているのか。答えは、人間とほとんど変わらないようにするため。と明白だ。しかし、私にとっては最悪な施しに過ぎなかった。なんで、なんで、なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで。気持ちが悪かった。臭いが、体温が、景色が、脈打つ血管が、全てが。吐いても足りない。いつそ記憶を抹消することができれば。そんなことを昔は毎日思っていたものだ。でも、そんなことより大切なことを、もつと憎むべき対象を見つけた。自分の記憶を消す前に、自分という存在を消す前に。

自分を作った者たちをコロセばいいじゃない。

それを許容した者たちをコロセばいいじゃない。

そいつらとおんなじ種族をコロセばいいじゃない。

逆に忘れまいと思った。怒りで動力源になるから。怒りに身を任せることが出来るから。

「どうした」

感情のこもっていない平坦な声が聞こえた。

「なん、でもない」

「殺気を振りまき過ぎだ。そんなことでは一般人にさえ気付かれてしまうぞ」

「ほつといて」

「お前がいいというのならそれでいいだろう」

それきり会話は途切れた。

こいつは、感情制御レギュレーションはどんな過去を持つているのだろう。

でも、こいつには製造番号コードがしっかりと定められている。資料から見ると、大体は分かる。しかし、細かい部分は体験者本人しか分からない。

そしてそれを口にする事などはない。

「私としたことがね………なんでもない。もうすぐ目的地に着くから、油断しないでよね」

「ああ、そうだな」

特に文句を言うでもなく、彼はそう頷いた。

「うん………？ ああ、俺………」

授業中だというのにいつの間にか寝てしまっていた。普段の俺なら考えられない行動だった。

そのためか、先生が心配そうな顔でチラチラと俺の方に視線をやっていた。

頭痛は無く、吐き気もしない。どうしてか眠くなったのだ。

精神的なものだろうか、それから推測するとやはりこの間のテロのことが頭をよぎる。

いつまで俺はアレに気を取られているんだ、冗談じゃない。

こんなことで平穏な日常が崩されてたまるか。でも、嫌な予感がするんだ。

嫌な予感が。

もう一度あんなことが起こるような予感がしてならない。

怖い。

「えー……。桜参くん？ 調子が悪いのですか、だったら保健室にでも……………」

「いえ、先生。大丈夫です、……………たぶん」

俺がそうつぶやくと、先生は黒板に背を向けた。それからもう一度俺の方を振り向いたが、次は何も言ってこなかった。

どうして、だろうか。急なことでまた動転しているのかもしれない。ただ、今回に限って眠たくなっただけなのかもしれない。それがあのテロに結び付けられること、それ自体がもう精神的に来ていているという証拠なのかもしれない。

点々と明かりが付き始めた目的の建物の前に二人はいた。

「行くわよ、すぐに終わらせて帰る」

「ああ」

二人の会話はそれだけで終わり、後は無言のままに建物内に侵入した。

薄暗い廊下を音も立てずに走りぬく。

目指すはどこかにある地下。どこかは分からないが、在るはずなのだ。

ダブルエーじゅうまんごんじゅう  
AA十万十のnumber達が。

と、そこに業務室と書かれた札が下がっている部屋を見つけた。明かりがついており、中から物音がする。誰かがいるようだった。

先ほど感情制御レギュレーターと別行動にしてからさらに感情の起伏が激しい。

ちょうどよかった、そこに居る奴を砕いて地下を探す気力燃料として用いさせてもらおう。

ドアを蹴破るようにして開け、部屋の中を見回す。

そこにはひよろつとした細身の男性がデスクに向かっているところだった。

「ああ、遅かったね猿島くん。ところでどうだい、新型numberの研究の成果のほどは。進んでいるのかね？」

男は全くこちらに顔を上げることなくそう言った。猿島とやらいう人間と勘違いしているらしい。

「そんな研究してるの、初めて知ったわ」

「なっ」

ぐじゃ、と彼女の投擲したナイフが男の左肩に突き刺さる。

「誰だっ…………お前はっ。こ、ここは…………関係者がい、……………」

「それより。ねえ教えてよ。新型numberって何の話？」

「そんな物は知らん！ くっそ……………」

「動かないでよ、ね」

ざく、と新たなナイフが男の足の甲を貫いて地面に縫いとめた。

「ぐあああああつ、……………なんなんだあ、お、お前は！」

「教えてよ、新型numberって何？ それとこの地下にはどうやって行けるの？」

「地下、だと……………なぜお前がそれを……………。どこの組織の者だ、

『奇怪』<sup>クレイジー</sup>の残党どもか、だからアレは駄目だと言っているだろう…

……………が？」

『奇怪』<sup>クレイジー</sup>。その名が出たとたんにこの部屋の空気が死んだ。

それは比喩表現ではあったが、死んだのだ。

「へえ、アノ腐りきったゴミ会社はここまで手を伸ばしていたの…

……………」

グリリリッ！ と男の左肩のナイフをさらに奥に押し込む。

「うぐあああああつ、やめろ、やめてくれっ。俺じゃあ場所は分からないんだ！ 情報しか渡ってこないんだ！ なんせこの広い研究施設だ、探して回るだなんてできないっ。さ、猿島なら知っているかもしれないが！」

「残党……………まだ残ってたの？ アノ腐りきったゴミ会社は私在家

族友人含めて全部潰したはずだったのに……ね。いつまで纏わりつくのかしらね……。ふふふふっ、うざったいっいたらありやしないわね」

焦点の合っていない目でナイフを上下左右に動かす。

「ぎっ、いっ、あっ。分がった猿島には、俺、四原が紹介したと言えば、会える、第7棟に………」

「そう、ありがとう」

ぐちゃ、と肉の墮ちる音がした。

一方、感情制御<sup>リミッター</sup>は第5棟と大きく壁に書かれた廊下を進んでいた。彼は人と全く会うことなく進んでいたため、目的地が分からなかった。

彼女 <sup>アイシ</sup>愛玩用と連絡を取るすべもないために彼は行動のしようがなかった。

しかし彼は困った、などとは思わない。それは実行しないだけであって、この状況をどうにかする術がいくつもあるからだっただけ。

それをしないのは、彼女が先に見つける方が後々に影響してくるであらうからである。

あの振りまいていた殺気は尋常な量ではなかったから。

「休憩、とでもしておこうか」

彼は壁に背を預けて目を閉じた。



## No.13:crazy(後書き)

テストやら何やらで今忙しく、更新が滞っている状態でした；  
今も学年の変わり目ということとで忙しいので、なかなか更新できな  
いと思いますが、皆さんよろしく願いますm) | | ( m

## No. 14 : 前兆

「ああ、あんた。こんなところに居たの」

彼女は軽い足取りで暗がりの向こうからやってきた。足音は一つではなかった。

足音以前に気配で分かっていたのだが。

「もういいのか」

「そうね、大体集まったし。でも使えない奴もいたわ、記憶が無いだとか五体満足じゃないだとか」

「総勢は………3か」

「本当ならあんた合わせて10は集まるはずなんだけど………半分も集まらなかったわね」

「5もいれば上等だろう」

「いいえ、私たちだけじゃない。使い捨てと壊れない実験台が基地にいるから………7よ」

「そうか」

「ラッキーセブンってところかしら、まあ欠陥製品ジャンクも追加するだろうからねなかなかいい感じだとは思っけど」

「作戦が、上手くいけばいいのか」

「そのためのあなたたちでしょ？」

彼女の笑みはいつもに増して深かった。

よく見ると彼女は先ほどまでジャージ姿だったのだが、今は違った。簡素なTシャツに黒いジーンズ、その上から点々と模様のついた白衣を羽織っていた。

「ああ、これ？」

彼女は自分の視線に気付いたようで、

「あのジャージは駄目になっちゃったから着替えたの。これも少し汚れちゃったけどね」

何を気にするでもなくそう言った。

対して彼は何も言わなかった。  
薄暗い廊下はすぐに静寂に包まれた。それはまるでビルの廃虚のよう  
に。

「とりあえず、帰りましょう？　話はそれから」

「ああ、そうだな」

夜闇に紛れてその5体は根城へと戻る。

「あのさあ、亮さ。なんか最近疲れてね？」

昼休みが始まったの連からの第一声がこれだった。

「いや、そんなことないと思うけど……………たぶん」

蓮は俺のとなりの席を占領し、スーパー袋の中を漁る。

どうやら今日はコンビ二弁当で済ませるらしい。

「もしかして、錠越姉が気にかかって仕方ないとかあ？」

「何言ってるんだよいきなり……………。違うからな」

「俺はもう気になって仕方ねーぜ！　本当にふつくしかったよなあ

……………ヤバかったよなあ。そんなんだから俺はもう朝も昼も夜も眠  
れなくて……………」

「いや、さつき普通に授業中に寝てたじゃん」

「あれは寝てなどいない！　目をつぶってたただけだ！」

「完璧なる言い訳だよな」

だーっ！　と蓮は一通り頭をかいて、唐突にこう言った。

「じゃあ、あのテロのことが」

質問ではなく断定だった。お前はそれを気にしているんだ、と直接  
突きつけられたようで。

自分でも引きずりすぎだと思う。しかし、目の前で、今まで、普通

の、人生だったのに。

あんなことが起きたら誰だってそうなるんじゃないのか。

今だって、急に蓮が倒れて専門家が来て『欠陥製品ですね』って言われてもう会えなくなったらどうするんだ。

目の前にあつたことで身近にもあるんじゃないかと疑ってしまふ。だって、あれだけ元気に動いていた昌さんが…………。

「亮！ お前、すっかりしろよ。…………俺が言うのもなんだけど、偶然的に巻き込まれただけで、そんなに責任感じたり気負ったりすることなんかないんだって」

「あ、ああ…………。偶然、だよな」

「そうだ、俺たちがたまたま人の多い中心街に向かつて遊んでたから。そしてたまたま亮が昌さんを発見したから。最後に、たまたま昌さん欠陥製品だったから…………だ」

「…………」

「ほら、俺の手料理弁当分けてやるから」

「それコンビニ弁当じゃん」

蓮は蓮なりに俺を元気づけてくれたのかもしれない。

「お〜い、桜参くん。岩沢くん」

廊下から俺たちを呼んでいたのは生徒会長さんだった。あの人が俺たちに何のようなんだろうか？

どうしたんだろうね、と話そうと蓮の方を振り向くが、そこにはもう蓮の姿は無く。

「こんにちわ生徒会長さん！ どうしたんですか！？ 今日はいい天気ですよね〜」

いつの間に移動したのか廊下に出て生徒会長さんに話しかけていた。行動力がありすぎるといふのか、どう表現するべきか、すさまじいな…………。

遅れて席を立つてようやく廊下に出る。

「や、二人とも。大事なお話があるんだけど…………生徒会室まで来て

くれないかな？ 放課後に」

「もちろん行きますとも！ 何があるつと行きますとも！」

一拍も置くこともなく反射的に蓮は返事をしてるように思えた。気合の入りがどこかおかしいような気がする。

「桜参君はどうか、来てくれるかな」

「あ、はい。いいですけど」

俺がそう返事すると、ふっと小さく生徒会長さんは笑って、颯爽と立ち去って行ってしまった。

その後ろ姿は綺麗だったのだけれど、疲れているようにも見えた。ずいずい、と脇腹を肘で突かれた。ニヤニヤ顔の蓮だった。

「ど、どうした……？」

「くふふふ、アレだよ。大事な話で放課後って言ったらね……」

「なんだよ……お前気持ち悪いな」

「分からないのか！ 告白に決まっているじゃないか！ 全く亮はそのところ疎いから……」

「なんで俺が貶されているのか分からないんだけど、それは無いでしょ」

「どうしてそう思うんだ！」

「そりゃあ……呼ばれたのは俺と蓮と二人だからだよ。告白って一対一だろ？」

「……………」

蓮は固まってしまった。もしかしてだけど、ここまで馬鹿だとは思わなかった。

俺のその目線に気がついたのか蓮はハッと我に返ったように言い訳を始めた。

「いやいやいや！ 違うんだこれは、そう。あれだ、一夫多妻制の

アレで！」

「一夫多妻って夫一人に妻がたくさんってことだよ……逆だよ」

「一妻多夫制だから！」

「なんて読むの……？」

「ひとつまたふせい？」

などと馬鹿な会話をしていると、前方から月乃がやってくるのが見えた。

「そうだ、鶉川！ 一妻多夫制についてどう思う？」

「……………知らない」

その一言で蓮は一蹴されてしまっていた。

不機嫌でもないのに月乃は苦虫を噛み潰したような顔をして教室に入っていた。

「なんだ、俺なんかしたか？」

「馬鹿な質問したから怒ったんじゃないのか？」

「そーなのか…………？」

詳しいことは俺には分からない。でも、何故か月乃と蓮は仲が良くないように見える。

だって二人が話しているところを見たことが無いから。

放課後、蓮と俺は生徒会室の前に立っていた。

「さ、行くぞ。一妻多夫制の時代だ」

「まだ言ってるの…………？」

そう言っただアを開けた先には、いかにもな委員会室が広がっていた。

会議用の長机が四角形になるように並べられ、奥にはホワイトボードが鎮座していた。

資料用の本棚も壁にいくつか寄せられておいてあった。

「ん。来たようだね。どこでも座って」

冷たいパイプイスに腰をかけると、思い雰囲気が立ち込めた。それを悟ってか、蓮も無駄口は叩かなかった。後から、生徒会長のお姉さん、錠越眞奈美さんが入ってきた。

私服で、首からは【来校者】と書かれた名札を下げていた。

「え、と……何故？」

俺の率直な質問に生徒会長が口を開いた。

「お姉ちゃんが、話したいこと……というか注意事項を」

よく言っている意味が分からなかった。何故警察官である眞奈美さんがここに。

「あのね、単刀直入に言うけど……またテロが起きるかもしれない」

「!？」

「そ、それってどういうことですか!」

俺と蓮の脳裏には間違いなくあの惨劇が浮かんでいた。

テロが起こる。二回目の。

その単語だけが脳裏に浮かんだ。

「な、なんでそんなことが分かるんですか!」

「それは……詳しくは言えないんだけど。とある研究施設が襲われたのよ、そこで色々な物品を持ち出されて……ね。その品々から推察するにおそらく、なんだけど」

物品。それは武器などのことなのだろうか。それに時期的にもなるだろうか、ちょうど一カ月が立とうとしている。再びあの惨劇が訪れるのだろうか。それより、

「なんでそれを俺たちだけに……? そういうのは全校生徒とか、いやテレビとかで注意を促した方がいいんじゃないんですか?」

「さつきも言ったようにおそろくなのよ。そんなことを大勢に振りまくことができないの、あなた達に言ったのはこの間のテロで巻き込まれたから注意した方がいいってということなんだけど……」

「そ、それじゃあ西種さんは……」

「西種さんは女の子だからね」

「それにどういう関係が……」

一息ついて真奈美さんは持っていた手提げバックからあるものを取り出した。

シンプルな形をした、殺傷能力を兼ね備えたもの。

「拳銃……?」

「なんでこんなものがあるんですか……」

流星の蓮も動揺を隠せなかったようだった。

「護身用、だからね。この間のことを踏まえて……特に桜参くん達は見ちゃったよね」

その時、自分の中に何か冷たいものが落ちるような感覚に陥った。

「な、何を、ですか」

「『<sup>ジャンク</sup>欠陥製品』って呼ばれてるらしいんだけど……、テロ実行犯が間違いなくどこかからの流通品で持ち出してきているの。好きなようにコントロールできる最悪な人形」

眞奈美さんはあえてnumberとは言わなかった。

<sup>ジャンク</sup>欠陥製品……確かに最悪なものだ。あのテロの中では昌さんのほかにもう一体機関銃を乱射していた奴がいたはずだった。あんな風に、戦闘用ロボットのようには操られたnumber達が何の罪もないのに再び意識を覚醒させられた者たちが……扱われるのか。

テロの首謀者は何を考えているんだろう。あの時あった少年は言っていた。

『この国の政府がどれだけ腐っているかも知らずにのうのうと生きている人間がふざけたことぬかしてんじゃねえよなあ！』

この国に対して悪意を持っている……？　だとしたら国の中枢にいた人物だったのだろうか。いや、それでは年齢が合わない。俺と同じ年頃の少年だったはずだ。

しかし、純粹な怒りがそこにあつたのは覚えている。ただ楽しいからやる、といった享楽主義者ではないのだろう。それがまた厄介なところだと思っただが。

「それで、その<sup>ジャンク</sup>欠陥製品に対しての護身用の拳銃。大丈夫よ、弾は硬質ゴム弾だから。気絶することはあっても死ぬわけじゃないからね。それが逆に危ないかもしれないけど」

「眞奈美さん、じゃあこれは俺と亮に渡したってことは……テロが起こつたらそこに向かえということなんですか？」

「それは違うわ。さっきも言ったように護身用なの、万が一巻き込まれたときにだけ使うの。そんなことはもうないとは思っているんだけど……何か心配なの。私の勘が、……当たってほしくはないんだけど」

「嫌な勘ですね」

蓮が空気を和ませようとしますが、この雰囲気だ。笑い一つ起こりはしない。

静まり返った生徒会室にはグラウンドからの運動部の掛け声しか響いてこない。

「まあ……何事もないと思うから、大丈夫！」

最後に眞奈美さんはそう言っただけで生徒会室から出ていった。仕事の合間だったのかもしれない、心なしか早足で立ち去ったようにも見えた。

「お姉ちゃんからはこんなところだけど……私から言つと、これ以上この学校の生徒が傷ついてほしくない」  
生徒会長の眼は真剣だった。

「さ、今日は帰って休みなよ二人とも。何事もないように日々が過ぎてくことを祈るしかないよね」

俺たちに返す言葉は無く、そのまま立ち去って帰路についた。

今日の天気は生憎曇りで綺麗な夕焼けは見えなかった。俺と蓮は並んでマンションまでの道のりを歩いていた。会話はほとんどなく、蓮の方はどうも考え事をしているらしかった。

ここは気分転換も兼ねて久しぶりに鍋パーティーでも開こうか、と考えていた時そいつは現れた。

「よう、桜参。ここであつたが百年目だぜ！」

声変わり前の可愛い声が出たかと思えば桃川だった。さらに突っ込んでおくといまさらそんな台詞はく奴はいないと思う。

「何だ、桃川君か。君の家つてこつちだっけ？」

「いや違う。しかし今日は訳あつてこつちが帰り道だったんだよ」

「へえー、じゃあね」

あまり背の高くない桃川の隣を素通りしようとするが肩を掴まれる。蓮は気にすることなくただ桃川を見ており、掴まれた俺は反応せざるをえなかった。

「なんだよ、うつとおしいな」

「ふ、ふん。そんなこと言っただけならいられるのも今のうちだ。俺はなんと、今日は鵜川さんと下校したのだ！」

「はあ、だから帰り道こつちだったんだね。じゃ」  
「まてまてまて！ 他になんかあんだろリアクションってもんがよ  
お！ 馬鹿なのかお前は！」  
「とりあえず桃川君には言われたくないね。っていうかどうせスト  
ーキングだろ？ 犯罪者め」  
「ふざっけんな馬鹿んなわけあるかボケ！ ってかお前最近調子乗  
ってんだよなあ？」  
「何こいつむかつくな。亮、知り合いだったのか」  
いきなり話に入ってきた蓮は退屈だったのだろう。疲れた顔をして  
いた。  
「いや、知り合いっていうか……その前に蓮、お前も同じクラスだ  
から……」  
まるで眼中にない発言だったなさっきのは……。  
「おい！ その茶髪も馬鹿なのか！ 馬鹿ばかりだなほんとに」  
「うるさいなお前は。よし、やるか決闘。桃栗なんちゃら、かかっ  
てこいよ」  
「ほお、やるか。俺の神速の右ストレートを味わってみるか？ って  
か桃川だつっーの！」  
「へえ、面白いこと言うじゃねえか。久しぶりに腕が鳴るねえ」  
何かが始まってしまふ予感がしたのでとりあえず俺は止めることに  
した。バカバカしい二人を見て。  
「ちょっと止めとけて。蓮が本気でしたら桃川死んじゃうから」  
「何言ってるんだよ亮。喧嘩したこともない奴に本気なんか出すわけ  
ないだろ？」  
分かってたんかい。っーか、どんだけ相手を見極める能力持ってん  
だ蓮は。  
「お前ら……。舐めすぎだったの！ ぶち殺すぞ！」  
これじゃあただのガキだなあ……。  
そう思ったことが俺の顔に出ていたのか、桃川はこちらをキッと睨  
みつけて

「覚えてやがれ！」  
と言いつつ走り去ってしまった。  
いちいちボキャブラリーが古いんだよなあ……………。  
それに対して蓮は面白くなさそうだった。腕をだらんと下げ、大きな溜息をついていた。  
「面白い奴だなあいつ。桃の果実？同じクラスだったのか」  
「桃川ね。んで同じクラスなのに覚えていないところに俺は最早尊敬の念を抱くよ」  
「どうだ！　と言わんばかりに胸を張る蓮。全然ほめているわけもないのに。馬鹿だ。」  
やはり先ほどの対決は

桃川<蓮　（馬鹿度）

こんな感じだろうか。  
などと余計なことを考えているうちにマンションについてしまった。マンションの入口でばったりと月乃に出会った。  
おう、とかよう、とか言う前に月乃は、  
「無性にむかつく」  
と俺の脛を蹴ってきた。  
「痛いし！　俺がなんかしたのか、どうしたんだ！」  
「くう……………後は若いお二人に任せて、と俺はここでじゃあな！」  
余計なことを吐き捨てて蓮はマンションの中に入っていく。  
意味の分からない沈黙が続き、月乃と俺は向かい合ったままだ。  
「え、と。……………何か」  
仕方なく俺はそう口火を切った。  
「付き合って」  
「はあ？　いや、イキナリ何をおっしゃっているんですか月乃さん！？」  
「買い物に付き合いなさいって言うてんの！　この屑！」

一通り言った月乃は頬を赤らめて早足でスーパーのある方向へと進んでいく。

「あ、ああ……………買い物荷物持ちですね」

理解の追いついた俺は駆け足で月乃に追いついて、隣に並ぶ。

そこで先ほどまでのことを思い出した。

「なあ月乃。今日桃川と帰ったんだって？」

「はあ！？ 何言ってるの、馬鹿なの！ 馬鹿でしょうね、そんなことも分らないんだから！」

「ちょ、おい。そんな怒らなくてもいいだろ……………冗談だって」

「死ぬ、死んで詫びてよね。不快感しか生まれないわ」

この話が本当に不快だったようで、月乃は真面目に苛立っていた。

よく不機嫌になることはあるのだが、こんなに怒ることあまりなかったのに今日はどうしたのだろうか。それほどまでに桃川がうざかったとか？ いや、そんなことより過去の経験からして考えてみると……………。やっぱりあれだよなあ……………。

「えっと……………今日は何食べるんだ？」

「別に、考えてない」

「そ、そう言えば俺も冷蔵庫の中が空なんだよね……………」

「……………」

「久しぶりに一緒に食べない……………よね、すみません」

「誰が……………って」

「え？」

「誰が食べないなんて言ったのよ。折角だからご馳走されてあげるわ、感謝しなさいよね。亮の寂しい夕食を紛らわせるために付き合っただけだからね」

早口でまくしたてるように月乃は言った。

「そ、そうだよな。久しぶりにみんなが集まって鍋パーティーでもしようか」

「みんな……………？」

「みんな、だろ？」

「~~~~っ！」

何故か再び不機嫌になった月乃は俺に中段蹴りを浴びせるのであった。

No.16：固執（前書き）

テスト期間中ながらも投稿しました；  
おかしな点があるかもしれませんが、どうかよろしくです。

「よお、なかなか早かったじゃねえか。オマエにしては優秀だったんじゃないか？」

光源がまったく存在しないこの空間において少年は彼女にそう言った。

姿かたちも見えないのによくわかるものだな、と感心してしまうくらいに少年が言葉を放つタイミングは完璧だった。

そんな彼はテロの首謀者。この国に対しての恨み憎しみが詰まったnumber。いや、定義から言うとなumberですらないのかもしれない。それは私にとっても同じことが言えるのだが。

「集まったのは4よ。私たちを合わせても7しかないけど大丈夫なの？」

「何言ってるやがんだ、そのためのA-100010A達を集めてきたんだろがよお」

「そうなんだけど……」

彼女はチラ、と後ろを振り返る。感情制御リミッターはとくに何も言うことなく立っていた。

パツと灯がともされて、ビルの廃屋内が照らされた。

「お前らがA A十ダブルエーじゅうまんごんとんじゅう万十か、どうだ奇跡の時代に生まれた感想は」

彼女が連れてきたうちの一人、無理矢理に髪を黄色に染められたツインテールの少女はこう吐き捨てた。

「最悪に決まってるでしょ。今でも暴れだしたい気分よ……変な機能まで搭載してくれて」

怒りを捻出するかのように彼女は声を震わせてそう答えた。

あの時代はやはり研究者共が腐りきっていた時代だ。自分好み、あるいはうけを狙ったように作られていたからやりたい放題だったの  
だろう。

「正直、あなた達が助けてくれて助かったわ。いつまであんな牢の

ようなところに入れられているか分からなかったもの。それに妨害電波で毎日のように頭痛がしてたのよ」

「ああ、そりゃあ大変だったんだろうなあ。3年間つてところかあ？ 牢に入ってたのは」

「そうね……もう思い出したくもないわ」

「ツハ！ そのうち懐かしくなるぜえ！」

不気味なほどに口角を吊り上げて笑う壊れない実験台は狂っているようにしか見えなかった。それでこそ私たちのリーダー足り得るのだけれど。

「まずはネームだな、使い捨て。調べてたものを読み上げる」

「命令形は受け付けたくないですけど。仕方ありません。では、黄色い髪のあなたは電磁放出でしたかね」

「その名前で呼ばれるのかよ……思い出したくないんだけど気にすることなく淡々と読み上げていく使い捨て」

「次にあなたが熱量上昇。隣のあなたは痛覚無視。最後に茶髪メッシュのあなたが感情制御ですね」

それぞれが苦い顔をして名前を確認し合う。これは傍から見ていると何をしているのかと気味悪がられるだろうが、大切なことだった。そう、numberで言い換えるなら、製造番号を確認し合っているようなものなのだ。

「俺が壊れない実験台だ。オマエらを連れてきたのが愛玩用で名前を読み上げたのが使い捨て」

「名前からすごく嫌な感じが伝わってくるのね……。特にあなた」  
黄色い髪の少女は少年を指差した。

「俺かあ？ だろうな、そうだろうなあ。後言っておくがなあ、俺ら三人には」

「感情制御すらも反応を示した」

それはそうだ。numberの根源ともいわれるものが無いのだ。これが示すものは『裏』。この国の裏事情だ。

「な、なんで……。それは」

「ありえないってかあ？ んなら体中見てみるかあ？ ひやはははっ！」

「……………」

「つくつく……………。そんなことよりアレだ、次の襲撃場所だが」

「

「ちよつといいか、この間のテロはお前たちの仕業だろうな」

声を上げたのは感情制御リミッターだった。

「そうだが？」

「目的は国家反逆じゃないのか。あれほどの大掛かりなことができないなら国の中枢を一気に叩いた方が確実じゃないのか」

感情制御のその言葉に少年壊れない実験台は当然のことのように口を開き言葉にする。

「は、分からねえこと言うなよ。考えてもみるよ、国のトップ潰してはいおしまい、じゃあつまんねーだろうがよお？ 徐々に国を壊滅させていくからこそその復讐なんだよ。大都市が潰れることに国家が揺らいでいくだろうよ。それも首謀者が分からないとなればなおさらだ」

「あなた……………なかなか酷いことを考えるのね」

電磁放出はためらうことなくそう言い放った。

それに対して彼は顔色一つ変えることなくむしろ笑って返した。

「お前だって分けわからんねえ色に髪を染められてんだ。拘束だってされてたんだろ？がよお。それくらい考えなかったか？」

「考えたわよ、考えたけど……………」

そこで彼女は言葉を切った。何が言いたかったのかは愛玩用には分かった。アイシ

そんな悪意に満ちたタノシソウナ顔で実行しようとはまでは思わなかった

そうだろう。実際問題、彼は今ものすごく楽しそうに計画を練っている。

人を殺し、国一つを根絶やしにするレベルの計画を楽しそうに練っ

ている。

そこら辺は私にだって分かる。これからのことを思うと楽しみでしかたない。

ただ、心持ちだ。

どんなことをしてでも可能である限り暴虐を尽くす。あらゆる手を考え、実行して相手を絶望のどん底にたたき落とす。そして彼は言うだろう。『こんなモンじゃあねえよ？』と。

壊れない実験台。名前の通りに歪んでいる、正確には歪まされたわけだが名前だけでその悲痛さ、言いようのない苦しみは伝わってくる。本当にどんなものなのかは本人にしか分からないがそれ以上踏み込むことはできないから筆舌することはないだろう。

「それだけかあ？ 他にないなら話は終わりだ」

「ああ、……理解した」

それだけ言つと感情制御は壁に背を預けて目を閉じてしまった。

チームに亀裂など入らない。それはもともとチームではないから。利害関係が一致したことによってただ群がるように集まっただけ。

不要なら切り捨てるし、助けることは一切しない。それが自分にとって利益になるのか、それだけを考えて行動する。

今のところ愛玩用は形上だけ壊れない実験台に従っている。使い捨ては何を考えているか分からないが別に何を考えていたっていい。

もともとはここには他にも人員はいた。しかし、いつの間にか姿を消しているのだ。

壊れない実験台は何も知らないというが、果たして本当なのか。そんなことは分からない。

実際に知ったからと言ってどうということは無いのだが、ここから一度いなくなつた者で戻ってきた者はいない。表の世界でニユースにもなりはしない。こちらの世界でも噂すらやってこない。

本当に『いなくなつた』のだ。

別にそんなことに恐怖して居るのではない。力の底が見えない私たちの形式上のリーダーの腹の内を読めないことが恐怖なのだ。

何も知らない、というのとは一番危険なことだと生まれた、いや造られた時から分かっている。

それゆえに固執する。

だから愛玩用アイシは壊れない実験台にいつまでたっても近づけない。

第二回テロ実行会議なるものが終わった後は、各々が自由に過ごしていた。

表の世界に行くことは禁じられたが、ここでは何をしてもいいと言った。

それを聞いたA A十万人ダブルエーじゅうまんてんでじゅうは外に出て大空を仰いだりしていた。ここから見える空はそんなに綺麗なものではないにもかかわらず彼女たちは普通にうれしそうだった。その光景に見覚えがあつた愛玩用アイシは少し肩をすくめつつ、それを眺めていた。しかしそれも少しの間だけだった。見覚えのある光景の記憶がリンクして吐き気をもよおす。

そして今朝襲った研究室での言葉、それが重なって不安が増大する。

気持ち悪い笑み気持ち悪い笑み気持ち悪い笑み気持ち悪い笑み気持ち悪い笑み  
気持ち悪い笑み気持ち悪い笑み気持ち悪い笑み気持ち悪い笑み  
気持ち悪い笑み  
。

止まることのない記憶の洪水のせいで視界がブレていた。

「うっ……うっ……うっ……うっ……」

何も吐けないということは何れだけ気分が悪いことだろうか。そんなもの、私以外に分かるわけがない。

「ちょっと！ 大丈夫なの？」

視界が霞んでいてなお声をかけてきた者の正体が分かったのは彼女

の髪が黄色だったからだろう。

彼女に支えられながらも愛玩用は男の名を呼ぶ。

「は、は……壊れない実験台っ！」

頭の中がグルグル回って平衡感覚をつかめない。支えてくれている彼女に寄りかかるようにして立ったままの姿勢を保つ。

「なんだあ、騒々しい。 十二発狂してやがんだよ、愛玩用。悪い夢でも見たかあ？」

不快な笑みを浮かべながら彼はビルの闇から姿を現した。

そのまま愛玩用の数メートル手前で立ち止る。

「夢なら……はあ、どれだけ……よ、かった、か……」

対して彼はとくに反応はしない。ふうん、そうか。という言葉だけを残して今にでも去っていつてしまえばよかった。

「いる、あいつらの生き残りがいる……。私を、また私をつ……あ

あああああつ！」

愛玩用が暴れた拍子に支えていた彼女は吹き飛ばされ、地面を転がる。それに見向きもせず愛玩用はどこからともなくナイフを取り出して握る。

「今からコロスツ。すぐにもコロスツ。……っああ！」

彼女はもう何も見てはいなかった。ただ、虚ろなその眼は腐りきっているとしか言いようがなかった。

「そうか、やめておけ。今のまま向かったらお前、」

一旦壊れない実験台はそこで言葉を切つて

「またあの生活に逆戻りだぞ？ははっ」

愛玩用の行動は早かった。

瞬間に壊れない実験台に肉迫し、手に携えたナイフを反転させて逆手に持ち頸動脈を狙って突き刺した。

その間、壊れない実験台は眉をひそめているだけだった。

ギーン！ と刀同士を打ち合せさせたような音が響き、ナイフは根元から折れた。

全体重をかけて振るった一撃に対して愛玩用はバランスを崩し、ま

えのめりになつていた。

ナイフが砕けたことに対しての反応は無い。

「落ち着け、バカヤロウ」

壊れない実験台は愛玩用の横顔を思いつきり殴り飛ばした。

吹き飛んだ彼女に対して彼はただこう告げた。

「あの研究室で何があつたかは知ってんだよ。俺が対策をうってないと思つたかあ？」

心なしか彼の愛玩用アイシに対しての蔑みの視線がいつもより弱かつたように思えた。

№ 17：鯛とギャップと過去話（前書き）

テスト終わったーッ（。？）ノ

## No.17: 鍋とギャップと過去話

買い物から帰った俺と月乃はマンションに戻ってきていた。

二人でエレベーターに乗り込み、会話もないままに俺の部屋のある階に着く。

ポーン、と扉が開く旨を伝える音が鳴り、俺はエレベーターから降りる。月乃も降りる。

ん？

「あれ、なんで月乃が降りてんの？」

「鍋パーティーするんでしょ。何？ 頭打っておかしくなったの？」

「いや、なんでもないです。……そうか、俺んちでやるのか？」

月乃からの返答が返ってきていないということはそうなんだろうと、勝手に解釈しながらポケットから家の鍵を取り出す。

「あ、俺が鍋の用意しておくからさ、月乃は蓮と塩埜しのさん呼んできておいてよ」

ちなみに塩埜さんというのは、このマンションに住んでいる女の子の人で、色々とお世話になっている人だ。聞いた話によると、どうやらこのマンションはその塩埜さんのお父さんのものらしい。

年齢は知らないが、社会人なので成人はしている。まあ当たり前のことなんだけど。

以上、簡単な説明終わり。

「嫌」

「へ？」

見るといつの間にか月乃は苦い顔をしていた。そうか蓮か……。

「分かった、じゃあ塩埜さんだけは呼んできてくれる？」

「なんで命令されなくちゃいけないの？ なんかもかつく」

苦い顔をしていたことをごまかすかのように月乃は不機嫌になろうとする。自意識的になってもらうのは少々、いや大いに困る。

「すみません、オネガイシマス」

「……………分かった」

やけに聞き分けのいい月乃に不信感を抱きながらも俺は自分の部屋に入った。

特に変わったものの無い自分の部屋について語ることもないだろう。とりあえず買ってきたものを冷蔵庫にしまっけていく。そのとき、エコバックの中に今日の鍋とは全く関係のないものが入っていた。それはお菓子だった。

俺はそんなものを買った物かごに入れた覚えはない。だとしたら月乃だ。なんということ……俺はやっぱりおごらされたのか？

そう思ったが、そのお菓子のパッケージを見て固まってしまった。

『ネコのビスケット』

びびびびびび、びすけつと!?

しかも猫と来た……………。これはおかしい、ヤバい逆におかしすぎて怖い。

月乃は大抵お菓子はあまり食べない。食べるとしても俺が知っているのは細いスティックにチョコレートがコーティングされているアレだけだった。

パッキーだったかプッキーだったかそんな感じのヤツだった。

それなのに何だこれは、なんでこんな可愛いパッケージなんだ。問題はそこだけじゃない。

ビスケットにもどうやら猫さんの絵がプリントされているらしいではないか！

最後に、このお菓子は聞いたことがある。今何故か可愛さゆえに流行っているらしいではないか。そんな可愛らしいものを月乃が食べていいはずがない！

あいつは……………そういうの嫌いだったはずだ。

あれ？ おかしいな、俺は入れてなくて月乃がこういうの嫌いなはずなのに何故こんなものを買った物かごに入っていたのだろうか？

おそらくこのとき桜参 亮は混乱していて、鵜川 月乃が入れたと

いう選択肢を無意識のうちに消していた。

箱を掴む。猫が可愛い。

それよりも震える手をどうにかしてほしかった。そして冷蔵庫を閉めたかったが、思うように身体が動かない。

何だこれは、俺はものすごいギャップに対しておかしくなったのか……！？ いや、それではこれを月乃が入れたと認めてしまったことになるじゃないか！ だ、駄目だ……。

狼狽しすぎて亮はもはや何を考えているのか、何と戦っているのが分からなくなった。

そんな時だった。後ろから声が聞こえたのは。

「うあ……………」

すごく小さな声だった。しかし、この静まり返った部屋の中ではしつかりと聞こえていた。

ギギギギ、と錆ついたブリキロボットのようには振り返るとそこには顔を真っ赤に染めた月乃が珍しく内股で立ちつくしていた。少し震えている。

その瞬間、嫌な汗がどばあつと亮の体中から噴き出した。

え、え、え。マジで、その反応はマジで？ やめるやめる、月乃が  
ありえない。そんなことわ……………。

「っ、月乃サン……………」

かすれた声で俺はかるうじてそう言うことができた。

対して月乃はそのままペタン、と床に座って青くなった。まるで終わった、とでも言うように。

しかし、そのあとすぐに赤くなり震える声で言う。

「う……………」

「これは、もしかして……………月乃サンが……………？」

「言うな……………」

「かつ」

「いうなああああああああ」

「っ！！！！！！」

目をぎゅっつとつむってそう叫んだ彼女は久しぶりになんだかおかしく見えた。

「あっはっはっは！　そう、月乃ちゃんがねえ！　ひやはっはっはっはっはっは！」

月乃が一通り叫んだあとに俺の部屋で囲んだ食卓の第一声はこの人の笑い声だった。

茶碗と箸を両手に抱えながら器用に大笑をしてくれました。本当にこの人は天真爛漫というかなんというか………全く飾ることなくありのまま俺たちに接してくれる。

そこが塩埜さんの尊敬するところであり、特徴ともいえるところだった。

「し、塩埜さん………あんまりその件は………」

話題を変えようと試みるが聞く耳も持たず。

「なあに？　駄目なの。月乃ちゃんは恥ずかしがり屋だからね、別に隠すことなんてないのに」

「そ、そんなことは………、っ！　もうなんでもないです！」

「可愛いね、流石は月乃ちゃんだよ。亮くんはどうとも思っていないわけ？」

「何ですかいきなり！」

この人の話はいつも唐突で話の軸なんて存在しない。コロコロと変わる話題は聞いていて飽きないが、標的にされるのとは違う。そして月乃さえ逆らえない、というか逆らう気さえ削ぎ取っていくような人なのだ。

「いやあ、だって本当は私だってお邪魔だったのかもしれないですよ？」

「何を言っているんですか……別にそんなこと考えてないですし！」

「どうだかねえ。その年齢の男の子はちょっと野蛮なところがあるからね。亮くんはどうなのかなってさ」

「ご飯、食べましよう……」

そう促すことも精一杯だった俺は、電話がかかってきたので席を立った。

「すみません。携帯に電話が」

「んー」

塩埜さんはいつの間にか熱い豆腐と格闘していた。

それを横目で見つつ、廊下にでて通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『もしもしー。さっき留守電入ってたんだけどどうしたんだ、亮？』

電話の相手は蓮だった。先ほどの鍋パーティーに誘おうと電話をかけたのだが出なかったのだ。とりあえずは電話が返ってくることを待っていたのだが、月乃の一件でそのことを忘れていた。

「ああ、今日うちで鍋パーティーやってるからこないかな、と思っ  
てさ」

『おおそうか、参加者は誰？』

「俺と月乃と塩埜さんだけ」

『あー。俺さ、そういえば夕飯食べたんだよねだからやっぱパス』

「え？ ああ、そうか？ 別に食べなくてもいいだけでもいいぞ？」

『う……ん。まあ、今日はちょっと疲れたから早めに寝ようかと  
思っでさ、じゃ』

「ふうん、……じゃあな」

短い会話の中にも不自然なところは見てとれたが、気にはしない。何度も言うが、俺には関係のない場所。踏み入れてはいけない個人  
の場所なのだ。だから深くは聞けないし、聞かない。仕方のないこ  
とだ。

リビングに戻ると、塩埜さんが鍋と格闘しており、月乃はまだ口を

とがらせていた。

「電話ー、誰だったの？」

塩埜さんが豆腐を持ち上げつつそう聞いてきた、その顔は微妙に薄ら笑いを浮かべていた。

いや、別に塩埜さんが思っているようなことじゃないですよ？

塩埜さんは人を恥ずかしがらせることが大好き……というかもはや趣味の領域にまで伸ばしているほどである。それゆえに色々と性質が悪い。まあいい人ではあるんだけど……。

「誰って……別に塩埜さんが期待してるようなものじゃないですよ」「蓮君かあ」

「違います……って！　なんで分かったんですか！」

「リビングから出た時と今入ってきたときの表情の変化、テンションの±1の変化、眉の下がり具合。そしてお祭り騒ぎには駆けつけていない蓮君の存在から……かな？」

観察眼なんてものじゃない。この人はどんな微細な部分からでも心境や考えを読み取れるのか……？

そんな力……どこで？　趣味から？

「うそうそ、勘だよ勘。　んも、そんなこと出来るわけないじゃん」

「そう……ですか」

「んー、でもさ、なんで蓮君来てないの？」

「それは……」

正直、どう答えていいか。　月乃と蓮の仲の折り合い？　それは俺が勝手に言ってるだけじゃないのか？

月乃の方を見してみる。箸を止めたままうつむいて俺の言葉を待っている……ように見える。

分からない。結局俺は踏み込んでいないのだから。

「月乃ちゃんには心当たりがあるのかな？」

「……」

塩埜さんも仲があまり良くない、というか一緒に居るところを見た

ことが無いと知っているはずなのにあえて踏み込んだ。

「ねえ、蓮君はいつも気を使っているように見えるよ。でもさ、それはたぶん蓮君が何かしてかしたって感じじゃないんだよね。月乃ちゃんからも蓮君からもそれは微妙だけど伝わってくるんだよ。亮くんだってうすうす感付いているんじゃないの？　そして知りたいと思ってるんじゃないのかな、二人の間に何があったのか。こんなに近くに三人がいるのに分からないって、亮くんは馬鹿にならないほどのストレスを受けてるんじゃないの？」

「いえ、俺は……そんな……」

「私は……」

そんな時だった。

月乃が小さな声で何かを語ったのは。

「中央街外れのとある寂びれたビルが倒壊したらしいのですが……  
……。あなたが何かしたのでしょいか」

表情を変えることなくPCのディスプレイに目を向けていた彼は小さな声でそう訊いてきた。

それは質問というより、『あなたがやったのでしょいか、何のつもりですか』と言っているようだった。

結局知っていた。というより、あんなに大騒ぎになっていたら誰だって気付くだろう。誰がやったのかは置いておくとして。

「ああ、俺がやった。 ナアニ、ただの暇つぶしだ問題なんて発生していないし、アレは自然倒壊だ」

「自然倒壊……？」

「はっはっはア！ 存在しないはずの俺たちが何かをしたとなればそれは自然、だ。 存在しえない現象が起こった、それだけだろう？ 最高の自虐だね！」

「そういうことですか。 それでは……新入り達は使えましたか？ そこだけはチラリ、と目を向けて聞いてきた。 気になるだろう、それは気になるだろう。」

なんと言っただって自分たちと似た境遇の者の能力だから。

どれだけのことをされていたのか、ということが気になって仕方がないのだろう。

ダブルエーじゅまんてんていめう

「AA十萬十か……思った以上かなア。 仲でもアイツ、銀髪のヤツなんて言っただかなあ……昨日力才合わせたはずなんだけどなア」

「痛覚無視のことですか。 ちゃんと覚えておいて下さいよ、作戦を立てる上での支障になります。 今から私が自ら誰が誰なのかを説明しておきましょうか」

「そいつだ！ ってかメンドウだな……覚えることがすでにメンドウだ。 言え。 記憶してやるからよ」

このとき壊れない実験台は感じていた。いつもと違うこの空気を。言わなくても理解できる。あいつは急いでいる。なにをそんなに焦ることがあるうか。

「短髪黒髪の頬に切り傷のある彼は熱量上昇。あなたが今話題にしていた銀髪の彼が痛覚無視。黄色い髪の彼女が電磁放出。最後に茶髪メツシユのあの方……核とか言っていました。感情制御です」

「ああ、ご苦労さまだなア。覚えた覚えた。……んで痛覚無視のとだ。あいつは相当イカしてんな。スゲエよ」

「想像以上だった、と？」

「アレはあぶねえな！ こっちがぞくぞくしたぜ」

と、そこでビルの入口に影が差した。

シルエットから大体誰かは予想できたが、特に今重要な話は無いの  
で声はかけないでいた。

その影は一向に近づいてくることは無く入口でずっと立ち止ったまま  
まだった。

髪と思わしき影は風に吹かれ揺れ動き、地面を流れていた。

その不自然さに気を引かれふと入口の方に視線をやるとそこには予  
想外の人物がいた。

いや、予想外の人物といってもその人物の名を知っているのではな  
い。まったく知らない者がこんなところに存在していたから予想外  
だったのだ。

少女だった。

見た目は愛玩用と変わらないくらいの幼顔だったが、目が違った。

長い髪と同じ色の黒く綺麗な瞳は全てを飲みこんでいた。

唐突にその目が歪み、水分量が一気に増加した。

「……………」

彼女は声をこちらに届かせるつもりが無いかのようにか細い声で何  
かをつぶやいた。

「あ？」

仲間にあんな目をした奴はいなかったはずだ。そして欠陥製品には

女性体は無かったはずだ。では、アレは誰か。答えは分からない。

「おい、使い捨て<sup>ユースト</sup>。アレは誰だ」

「……………」

「眼え腐つてんのか。入口に立ってんだろーが」

「その言葉をそのまま返してもいいでしょうか」

振り返るとそこには少女の姿はもうなかった。

幻覚？ そんなわけはない。しかし、ここに人間が来るはずはない。

人間にしては生気が無さ過ぎたような気はしたが。

「まあ、なんでもいいか……。俺は寝るからな」

number崩れといえど睡眠は必要不可欠だ。面倒な作りになっていると思う。それなりにnumberを弄ることが可能になったらフル稼働にしてやろうと自分のことを考えていた。

そのためにはまた一台、実験台が必要となるのだが。

目が覚めた時にはもうすべてが終わっていて、確かあの日もそうだったとぼんやりとした頭で考えていた。視界がハッキリとしてきて、辺りの物がしつかり捉えられるようになったころには記憶もよみがえっていた。またやってしまったのか。度々壊れない実験台には感謝しないといけない。

どこかで拾ってきた簡易ベットの上だということにいまさら気付いた。

そしてこれもあの日と同じで、まるで何かを暗示しているかのようで気味が悪かった。でもこれは壊れない実験台の嫌がらせなのだろうとすぐに気がついた。

じゃあ、私を縛るものはもうなくなってしまったのか。

私が立ちあがった理由はあの頭の狂った奴らを一匹残らず叩き潰すため。それが今もこの世には存在しないとなったのだから私の存

在理由も消えたのだろうか。そう考えると胸に穴が空いたような感覚に陥り、今までにない感情がわき出てくる。これは何だ。

「終わってねーだろオ？」

暗がりの向こうから彼の声が聞こえてきた。どうやら今から眠りにつくらしい。こちらまで歩いてきて私を見下ろす形となる。

「終わってない……………」

私の存在理由がまだあるのだろうか。

「馬鹿か。何でもかんでも潰してはいオワリじゃねえだろ、俺が今日潰したのは子会社だ。裏にまだいる。あいつらはゴキブリのようにしぶとい。潰しても潰しても情報は受け渡されていく。じゃあなんだ？全世界の人間を潰せばいいのか？ これ以上広がらないくらいに徹底的にやればいいのか？」

両手を拳げ彼は問う。

「正解、だ。お前だってそう考えていたんだろ？」

「そう……………ね」

彼は彼なりに私のことを思っていたのだろうか。そんなはずはないのだが、ただ利用し利用されるだけの関係なのだが…………いや、やはりそんなことはないだろう。

目的の一致。それが一番大きく作用しているのだろう。自分のために、互いのために。

でも今は、今だけなら思ってもいいのではないか。

寝起きだからなのか、多少弱気だった。しかし、新たな道が存在していた。

「分かったらそこを退け、俺が今から寝る」

「ちょっと…………私の温もりがまだ残ってるんだけど…………」

「だからどうしたってんだよオマエは、そんなもんに欲情するわけないだろうがア？」

「なっ…………言い方つてもものがあるでしょ」

「きゃっ！」

「邪魔だ、さっさと出て行け。睡眠の邪魔するなら殺すぞ」

私をベットから引き剥がし、壊れない実験台は私が元居た簡易ベツ

トに寝転がる。

そのまま彼は背を向けたまま話さなくなった。

もう、寝てしまったのだろうか。

今は、いい。

彼女はただ静かにその部屋を後にした。

黒髪短髪の彼 オーバーヒート 熱量上昇は久々の外の雰囲気に対して面白くない。という感情を抱いていた。

自分が作られ、幽閉されたあとから何一つとして世界は進歩していなかったからだ。微々たる進化はあったのかもしれない。しかし、そんな道具の派生や憲法や法律が変わったからと言って彼にとって面白さの材料の欠片にもならない。彼が欲するのは社会の在り方。格闘、戦闘、戦争、抗争、紛争、愚かな人間たちが同じ種族で殺し合いを始めているのを見るのが好きだ。

それに参加し、全てを燃やすことが好きだ。

彼は思っていた。

いずれは戦いが中心となるセカイに変えてやろうと。

黄色の髪の彼女 エレクトロ 電磁放出は久々の外の雰囲気に対して懐かしい。という感情を抱いていた。

街の雰囲気は変わっておらず、かつて自分が歩いていたことを容易に想像させることができるほどに変わっていなかった。その和やかな雰囲気は好きだったけれども、同時に嫌な思い出も甦ってきてい

た。  
暴言、罵声、叱責、暴力、悪戯、最悪な人間たちが繰り広げる行動そのものが死に値すると思っていた。  
ならばいっそ排斥しよう。いらぬものは切り捨てることで解決する。

彼女は思っていた。

いずれは私たち number が中心となるセカイに変えてやろうと。

銀髪の彼 痛覚無視は久々の外の雰囲気に対してこんなものか。という感情を抱いていた。

目で見たものはそのまま、街は微妙なほどの機械臭が漂い、中央街では人の密集した音を聞いた。

自分が変わるのには手にナイフを構えた瞬間からだと知っていた。  
視覚、嗅覚、聴覚、味覚はあれど、感覚は自分には存在しない。だからこそ怯むことなく一方的に相手をズタズタに引き裂けるのだ。それに対して人間は余計なものを持ちすぎている。複雑化しすぎて行動に及ばない。簡略化がいかに精巧かを知らない。

彼は思っていた。

いずれこのセカイは無関心であふれかえり、触れることに意味はなさなくなるだろうと。

茶髪メツシユの彼

感情規制は久々の外の雰囲気に対して何

も思わなかった。

何も思わなかったということすら思わなく、それに対しても何も思わなかった。

彼は心の一部が欠落しているのではない。自らの意思で欠落させる

ことができるのだ。もう長いこと感情を出さないでいると、本当に感情とはどういうものなのかが分からなくなった。

感情論は意味を失い、彼には理解することしか残されなかった。

だが、これでいい。

彼は思っていた。

いずれこのセカイは終わりを告げる。自分勝手なエゴの暴走のせいで。

No.19：彼女の話と彼女（前書き）

更新率低下中です。

ところで皆さん、地震は大丈夫でしたか。

こちらは平気でしたが……恐ろしいです。

これ以上被害が拡大しませんように。

## No. 19 : 彼女の話と彼女

彼女は小さなころ、やっぱりどうして？ と思っていた。

だって他のみんなはお母さんもお父さんがいるのに自分にはいないのだから。

いるのはただ、白衣をまとった先生、教授、そして同じ集合体の仲間だけだった。

肉親と呼べるものはおらず、先生や教授達は特に感情を向けてくれるわけでもなく彼女たちを流し目で見ただけだった。

触れられても温かさを感じない。だってただの検査だから。障害が無いかを知るための行為だから。そこに感情は一切介入しない。彼女たちはnumberだから。

それでも、頭の中のどこかには外に出れば国の保証の元で自由になれるという考えがあった。

今思えばそれは刷り込まれた潜在意識で、自分の考えではなかったのだ。

numberは大抵どこかの夫婦に引き取られたり孤児院のようなところで過ごしたりして生きながらえ、成長を続けていく。そしてやがては社会に出て一人暮らしを始め、子を作り育てていく。そんな循環方法だった。

彼女が目を開けた時は無機質なベットのうえで、淡い光に照らされていた。

周りからは何か驚きのような感動のような声が聞こえてきたのだと思うけどよく理解できていなかった。

それから間もなくして孤児院に送られ、そこで彼女は一人の少年に会った。

その少年はすごく活発で太陽のような存在だった。その孤児院のみんなは彼のことをリーダーのように慕い、そして親友のように接し

てきていた。

そんな輪の中に彼女を入れてくれたのはその活発な少年で、彼女はすぐに孤児院のみんなと打ち解けていった。

その少年には『兄』のような存在がいて、その人はもう社会人だった。

たまに孤児院にやってきてはみんなと遊んでくれて、夜になると帰っていくという、みんなにしてみればよく遊んでくれるお兄さん先生のような存在だった。

彼女ももちろん遊んでもらっていたし、いい人だとは思っていた。

ときには活発なその少年と彼女とお兄さん先生の三人で孤児院の外へ遊びに行ったり、遊園地へ行ったりもした。

そんな一時を過ごすことで本当の家族のように思えて。

しかし、ある時だった。

お兄さん先生が帰りだんだん暗くなってきた就寝時間になった頃、自分の部屋に一通の書置きがあることに気がついた。

それはお兄さん先生からのもので、これからある場所で待っているよ。といった類のものだった。

彼女はまだ遊び足りなかったのもあって、本当はいけないんだけども夜に抜け出して孤児院の外へでてしまった。

月の光を浴びていつもと違うように見えたお兄さん先生は心も行動もいつもと違った。

いきなり抱きつかれ、髪に顔を埋めてきて荒い呼吸を繰り返していた。

逃げ出そうともかくくれど子供の力ではどうしようもなくて、彼女はされるがままで……。

もういつそこで死んでしまいたいと思っていた。その時思えば、始まりからおかしかったし自分の記憶すらもなかったのだから自分は何のために生まれたのか分からなくなっていた。

神様を恨んだ。涙を流しながら恨んだ。

この人は偽の仮面で取り繕っていた。

彼女をだますことに見事成功した。  
騙された彼女が悪いのだろうか。違うだろう、彼女が何かしたのか。  
親の愛が無いように、神様も彼女には愛をくれないのだろうか。  
きつとそうだ。  
そうだ。  
もう。

その時だった。

聞き覚えのある声と、地面を蹴る音が聞こえてきた。  
目を見開くと、歪んだ呼吸の荒い男の顔。遅れて鈍い音がゴウイ  
インと聞こえてきた。  
彼女は地面に放り出され、男はうろたえ、見覚えのある少年はスコ  
ップを握り締めていた。  
逃げようとしたのだろう。その社会人は。  
方向もろくに考えず、安全なんか放り捨てて、男は車のエンジンを  
かけてものすごいスピードでこの場から去っていった。  
見覚えのある少年は苦しいかのような顔をしていて。  
遠くですごく大きな音がした。

その次の日に孤児院内は泣き声と涙でいっぱいに包まれた。  
院長がお兄さん先生が事故で死んでしまったことを告げながら涙を  
流していた。  
他の人は嗚咽を漏らしながらも悲しみに耐えていた。  
他の子どもたちは泣き叫び、孤児院内は悲しみの空気で一杯だった。  
だけどたった二人だけ、泣いていない子供がいた。  
片方は裏切られ死んだような目でただ床に座り込み、もう片方は右  
手を振るわせ悔しさと申し訳なさに震えていた。

これを機に。彼女と彼は関わる事が無くなった。いくら近くに居ようと、言うことは何も無い。

月乃がとある女の子の話をし終えたときにはとっくにお椀の中の具材は冷え切っていた。鍋の煮える音だけがこの部屋で唯一変わりにく音を立てていた。

塩埜さんは考えるように目を伏せ、俺はもう考えることを半ば放棄していた。

numberが施設出身だったりするのは知っている。しかし、でも、こんなことは誰が予想できたのだろうか。塩埜さんだって読めていなかっただろう。

それだからこそ簡単に踏み入って、その箱を開けたのだろう。

「えっと」

そんなとき、塩埜さんが口を開いた。

「その彼女は彼に申し訳ないって思ってるんじゃない？ 彼も同様におんなじこと思ってるんじゃないかな」

「……………」

「彼女は『自分が耐えれば彼は裏を知らなくてよかった』『間接的とはいえ、彼に殺人を起こさせてしまった』って思ってるし、彼は『自分の信頼を置いてる人が彼女を傷つけてしまった』『自分がこんな人を紹介しなければ、仲良くさせなければよかった』って思ってるんだよね？」

塩埜さんはあくまで月乃に問いかける。

「私に聞かれても分かりません……………これは彼女の話ですから」

「そうだね。……………じゃあ最後に聞かせてよ。その彼女は今幸せそう

？」

次はまっすぐと月乃を視線で射抜き、塩埜さんは問いかけた。視線は交差しない。月乃はずっと煮えたぎる鍋を見つめている。

「幸せなんじゃ……ないですか？」

ふうっ、と塩埜さんは息を吐き、一旦緊張を解いた。そして自分のお椀の中の具材を口の中に掻き込んでから言った。

「じゃあその彼女にもし会うことがあったら言っというてよ」

それは嘘だねって。

塩埜さんに似合わず小さな声だった。注意していなければ聞き逃してしまうようなほどの。

「じゃ、鍋ご馳走さまー。私明日早いからさ、先にお暇させてもらうよー」

さっ、と背を向けて玄関まで歩いていってしまう。俺は反射的に塩埜さんを家の玄関まで送っていった。

靴を履きながらつぶやくように俺に向かって塩埜さんは言った。

「後は亮くんの役だからねー。任せたよ」

何を？ と聞き返す前にその姿は玄関から消え、目の前は無機質なドアのみとなった。

リビングへ戻ろうとしたとき、その扉の前に月乃が俯きながら立っていた。

その姿はいつもより小さく見えた。

まるで、あの時と同じように。

「どうした。帰るのか？」

さし障りのない言葉で話しかける。明らかに様子がおかしいのは見てとれた。

幽霊のような足取りで近づいてきて、ゆらり、ゆらりと俺と月乃の

距離は縮まっていく。

髪の毛が垂れ下がっていて表情は読めなかった。

「おい、月乃」

トン、と力なく月乃は俺に寄りかかるようにして抱きついてきた。

「おっ、おっ、おい……………」

「……………」

「月乃!? 月乃…………? 月乃サン…………?」

わけが分からない、自分の顔が熱くなっていくことだけが分かる。

月乃の匂い、柔らかさが俺の理性を刺激してくる。

おっ、落ち着け俺。これはアレだ、いつもの作戦的なアレだ!

騙されない。これは試練だ、負けはしない。こ…………れ、は…………っ!

そんな理性を保とうと格闘する俺に月乃のか細い声が聞こえてきた。

「ちよつとだけ……………ほんの少しだけでいいから……………」

いつもより格段にトゲが少なく、いつもより格段に甘い声。俺はそ

んな月乃を愛おしく思った。

でも、そんなことだけでは大きな傷を癒せない。

それでも、自分にできることはある。

どんなに小さくても、どんなに少なくても。

きつと月乃のために出来ることはあるから。必要とされていたか

ら。

その時リビングではニュースをやっていた。

中央街外れにある寂びれたビルが倒壊したということを目撃していた。

犯人グループの証拠は何一つとしてなく、そのビルに居て生き残った者はいない。

彼らはまだ、本当の絶望を知らない。

№ 20：十二時（前書き）

更新再開です。

「オマエら、ちゃんと休養取ったのか？ いざって時に倒れて使い物にならないってんじやあ話になんねえぞ？」

彼は起きるなりそんなことを言い出した。

今、とある廢ビルの一角に数体の number とその他が存在していた。正式的には『居る』と世界的には認識されない『居る』の二種類なのだが。

彼は心底楽しそうにこう告げた。

「新たなメンバーも揃ったことだし、宴の一発でもやっておかねえとなア」

手にはハンドガンが一丁。他にも武器が欠陥製品の手によって運ばれてくる。

マシンガンやショットガン。本来ならばもう手に入らないはずの古来の武器。今現在では火薬なんてものに頼らない。空気圧式か電気式のいずれかである。わざわざ古いものを使うのは壊れない実験台のただの思い付きだろう。

温い世の中に生まれたことを教えてやるだの何だのとも言ってた気がするが、もう忘れた。

今は、この作戦に向けて、だ。

「次狙うのはこの間の中心街の次に大きな街だ。ちようど中心街とは隣町にあたるってことだ。……まあ詳しいことは使い捨てから聞け」

そう言つて彼は説明を放棄し、使い捨てに投げ出す。

その行動に対して指名された彼はパソコンを閉じ、部屋の隅から中心へと移動してきた。

「次の襲撃地は中心街の隣町にあたる『夕川町』<sup>ゆつかわまち</sup>です。具体的な場所は人の多い夕川駅地下街です。あそこならば地下なのでテロが起きた場合、住民はほとんど逃げ出せません。防火シャッターを下ろ

しておけば地下から出られなくもできますから」

「ちよつといいか？」

ユウスト 使い捨ての説明を止めたのは熱量上昇オーバーヒートだった。彼は運ばれてきた古い武器を勝手に弄りながら続けた。

「この間のテロのおかげで隣町といえど警備は嚴重になつてゐるのではないか？ それに場所は地下だ。それなりの警備はあるだろう、そこはどうするんだ？」

ユウスト その質問に使い捨ては応えず、代わりに壊れない実験台がやついた笑みを浮かべながら答えた。

「心配はない。あいつらは馬鹿だからな、ろくに警備はしてゐないだろう」

「そんなことが言えるのか？」

「ああ、人間つてのは実際に自分の身に何かが起きないと信用しようとしねえ。たとえ隣町で何かが起きたつて『隣町で何かが起きたのか、気の毒になあ』程度の感想を抱くだけだ。次は自分達に来るんじゃないか、と思いつつも心のどこかではそんなはずはないと決めつけている。要するに高を括つてんだ」

「確かに……そうとも思えるな」

「心持ち少し厳しくなつたつて程度だ。心配することはねえ」

そう言つと彼はハンドガンを解体し、何やら調整を始めた。質問をした熱量上昇オーバーヒートも武器を弄ることに戻つた。

「では続けて。配置についてですが、駅地下への入口は全部で4つあります。東西南北に設置されていて、それぞれの隣の入口への距離は800m〜1km程度です。超高速移動用リニア乗り場は北口に近いのでとりあえずは反対側の南入口とその他の二つの入口は倒壊させておきましょう。機動隊や無人警官オートロイドが入つてこれるのは北口だけに絞らせます。もちろん、発見される前に撤退は済ませますが、

ユウスト 使い捨ては一旦そこで言葉を切つて、続けた。

「東西南の入口の破壊はここに手榴弾がありますが、どんな手を使

つてもかまいません。熱量上昇、電磁放出、感情規制の三人で分担してもらいます。その間、私は駅の警備システムに侵入して防火シヤッターを全て下ろしますので巻き込まれないようにしてくださいね。後は欠陥製品を数体地下に放ちますので撤退してもかまいません。勝手にやってくれるでしょう。あなたは地下に残るのでしたっけ？」

視線も向けずに使い捨ては壊れない実験台に向かって問いかける。くくくつ、と小さく笑ってから彼は応える。

「ああ、捕まる気はねえから心配するな。ちよつと様子見だ。いるものがあつたら取ってくるが？」

「それ、盗ってくるの間違いでしょ」

珍しく作戦の説明途中に口をはさんだ愛玩用から出た言葉は突っ込みだった。

「つは、おもしろえ」

彼は微塵も面白くなさそうにそう言って、作業に再び戻った。

廃ビルに一瞬の沈黙が訪れ、使い捨ては小さく息を吐いて最後に言った。

「作戦は明日、土曜日12:00に開始します。それまでに各自持ち場に着いていてください」

また見えないところで一つ。闇が濃くなった。

土曜日。昨日は色んなことを考えたせいで頭が疲れていることに気がつく。

あの後、月乃は何も言うことなく自分の家に帰ってしまふし、折角用意した鍋も残っていた。それらを片付けるなりして風呂に入つて

色々と考えていたら逆上せてしまつて……、そつだ。そこからベツトの上で考え事をしていたらいつの間にか朝になつてた。でも昨日答えは出た。

それが正しいものなのかどうかは俺には分からないけど、きつとい方向に進んでいくとは思つ。

だつて決めたから。月乃のために出来ることはやるんだつて、必要とされたいからつて。

「と、言うわけで電話をしよう」

テキパキと顔を洗い、朝食を食べてから身支度を整えて電話をかけたよつとしたその時。

ピンッポーン！

と、電子ベルが鳴り響いた。時刻はまだ7:00というまあまあ早い時間帯に誰だろうと思いつつ玄関へ行くとそこには月乃が立つていた。

彼女の表情は俯いているため覗うことはできないが、昨日のような弱々しさはなさそうだった。

「月乃？ どうしたこんな朝早くに……つても俺は今から電話をかけようと思つていたんだけどな」

「え……？」

「いや、だからさ……えつと、久しぶりに隣町まで遠出しなかなあつて」

月乃は自分の要件も言わずに口をパクパクさせている。頬は赤く染まつていたが、それ以外いつもと変わらないように見える。

「わ、分かつた……行く。ううん、行きたい……待つてて！」

「あつ……おい……」

何を思つたのか月乃はエレベーターまで駆けていく。出かけるなら今来ていた服でも十分だとは思つのだが……。

俺はそのままぽかーんと立ちつくしていたのだった。

中央街ははまだ工事中で通行整理をされていたが、駅には何の問題もなかったらしくいつもと変わることなくダイヤルは運航しているらしい。

月乃は朝見たラフな格好とは変わってフリルをあしらったような薄いピンク色のワンピース（？）のようなものを着ていた。女物の服のことはよくわからないのだが、似合っていると思った。

月乃はあまり話そうとはしなかった。度々俺が話しかけたりはするものの、会話はすぐに途切れ、沈黙が訪れるのであった。なんだか調子が狂うようで変に緊張してしまいそうだった。

「なんで、いきなり出かけようなんて思ったの？」

リニアに乗ってから少し時間がたった頃に初めて月乃から話の話題を振ってきた。ただの疑問かもしれないが、俺はホツとした。

「い、いやぁ……やっぱり今日は休みだし」

「答えになってないじゃない……。まあ、亮のことだし私を元気づけてくれようとしてもしたんでしょ？」

ええー。

分かっててそれを言う月乃はやっぱり性格が悪いのではないかと考えてしまった。

「その通りだけど……言っちゃうんだ」

「うん。でも……うれしいかもね」

心臓が脈を打つのが早い。どうしてか、それは月乃がいつもの月乃ではなくなんだか頬染めバージョンだったからだ。

「な、なーんだかいつもと調子が違うような……」

「なに、やっぱり私はいつも通りじゃないと駄目とか？」  
ん？ なんだって？

「は？」

「だからさ、やっぱり取り繕っているの分かるの？」

「ひ？」

「そうかそうか……やっぱり亮には分かっちゃうのか……」

「ぶ？」

「じゃあやめ！いつもの私でいいよね？ やっぱり性格作るって言うのも面倒だしね」

「へほ？」

「なんだ、そうか……。」

ふは「っはっはっは！ やっぱ俺は騙されていたっ！ 少なくとも昨日のは本気だとしても今日の朝からは作っていやがった！ 流石は策士月乃！ 完全に敗れたぜ！」

「なんだ、そうじゃないかとは思っていたよ。……ちょっとだけ」「亮は騙されやすいんだもん。でも、うれしかったつてのは……ほんただよ」

最後の方はなんだか聞き取れなかった。

「ん？ なんて？」

「いや、いいから！ ほらっ、降りるんでしょ！」  
いつの間にか隣町まで来ていた。

月乃の後に続くようにしてリニアから降り、駅の地下へと降りる。少し歩いて駅地下の中心に着いたところで時計台を発見する。夕日をモチーフとして作られてそれは薄紅色で、立方体の上に鎮座している。

とりあえずは昼飯にしようと考えた。隣町まで来るのにリニアといえど少し時間がかかってしまった。まあ月乃の用意の時間が長かったつて言うこともあるけど。

「んで、どうするの？ 来たはいいけど考えてませんってことはないわよね？」

「とりあえず何か食べようよ、ほら時計だつてもうすぐ12時を指して」

駅地下の時計台の秒針が12を指し、完全なるタイミングで12時になった。

それと重なって完全なタイミングで爆音が後方から聞こえた。いや、正確には今歩いてきた通路の向こう側から。

危険だ！ とすぐに思った。蓮は今ここにはいない。自分を守って

くれる者はいない。それ以前に今は自分が守る立場にある。月乃と  
いう少女を。

「とりあえず走ろう！ 他の出口から出るんだ！」

「どこへ向かうの！？」

「南口だ！ 直線的に走ろう！」

ガンッ と何かの落ちる音がした。

それは人々が騒ぎまわる中でも鮮明に聞こえた。

それほどまでに轟音だった。そしてその音の正体に気付かされる。

防火シャッターが降りている。先ほどの爆発を受けて火事か何かと  
判断したのだろうか。だが、だが！

「ここを通らないと外に出られないじゃないかっ！」

亮と月乃の他にも大勢が押し寄せていた。シャッターを叩く者も少  
なくはない、しかしそんなものにはびくともしない。

テロだ！ と誰でもなくつぶやく声が聞こえる。

俺は嫌な予感を押えることができなかった。

そして無意識中に腰に備えていたハンドガンに触れていた。



No. 21 : 東西南北(前書き)

サブタイトル編集；

熱量上昇は面白そうに手榴弾を投げ、東の出口を破壊していった。立派だった出口は瓦礫で埋もれ、当然のごとく階段さえも見えなくなっていた。周りの者が反応する。

携帯でどこかへ通報する者もいれば、写真を撮る者もいた。しかし、そんなものに構っている暇はなかった。とりあえずは仕事を達成したわけだが、移動手段となる『アシ』がない。と、そこへ騒ぎを感じてか無人警官が3台ほどすべるようにしてやってきた。

台形の形を取ったポリバケツ程度の大きさのそれらは一瞬にして熱量上昇を取り囲む。

キュイイイインと懐かしいような音を響かせ、どこかに付いているであろう小型カメラで標的を認証、ロックして攻撃対象を定めるのだ。上方が開き、そこからは遠隔型のスタンガン……電流放出装置が現れた。それで対象者を気絶させ、後は警官などに取り次ぐのだから。

だが、彼は捕まる気はなかった。

一台の無人警官を掴むと、力を込める。

それだけのことで無人警官は壊れない。軽くて丈夫な特殊な金属でボディは作られているので、通常の握力で壊すことはまず無理だ。

「耐熱性があるかもしれないが……内部からの熱量とかはどうかな」  
ポゴグオ！ と無人警官は膨張し、機能を停止させた。

おそらく内部の精密機械が破損したのだろう。彼が行った『熱量操作』によって。

残った他の二台は距離をとりつつ、電気を放ってくるが意味はない。壊れた一台を投げつけ、傾いたところを狙って掴む、暴発させる、これの繰り返しでいと簡単に無人警官は動かなくなった。

「なんだ、あつけねえ」

彼はただ、面白くないという感想を漏らしただけだった。

電磁放射はとりあえず出口の破壊に努めた。  
エレクトロ

彼女の能力としてはこういうことにはあまり向いていなかった。何せ微量の電磁気を放出することと操ることぐらいしかできないからだ。まあ特殊な装置があるというのなら出来ないことはないが、あんなことはもうこりこりだ。

とりあえずは持ちこんだ手榴弾で破壊したのだが……どうやら防火シャッターが降りる方が早かったらしく、シャッターに焦げ目を付けてしまった。大した傷はついていないものの、なんだか心配になつてきた。

仕事は終了したが、特にあの場所へ帰ってもすることが無いので、ここに居ることにした。

シャッターが破壊されたらされたで出てきた人間どもを麻痺させてやればいい。そう思っていた。

幸いにもここ西口は会社が立ち並ぶ高層ビルだけがある。

業務に勤しんでいる彼らは外のことに気付いていないだろう。人通りも少ない。

ゆっくりと出口の残骸を積み重ねて作った簡易イスに座り、時間が過ぎるのを待った。

感情制御は特に何もしなかった。待っていれば防火シャッターが降りるのを知っていたからだ。

特別壊すこともない。外の人間に不思議がられることはない。

彼はただ、見ているだけだった。

撤退しようか、とも考えたが気まぐれでこの街を歩くことにした。

特に何の感情も抱くことなく、彼は雑踏の中に消えていった。

「開かないなら他の道を……か」  
考えながらも地下街を歩く。月乃は怯えることもなくしつかりとついてきてくれた。ここまで冷静さを欠かないことはすごいことだと思う。

「ねえ、やっぱりこれってテロ……なのよね。 だったらこの間みにたいに暴れる人がいるんじゃないかしら……あまり動かない方がいいんじゃない？」

やっぱり月乃は取り繕っていた。本当は怖いのだ、それをあえて表情に出さないようにしている。

俺だって怖い。でもとりあえずここから出ることを考えないといけない。おそらく今回もあの眼帯の少年が関わっている。ならば狙われる範囲はこの地下街だけだと考えられる。他の出口もおそらくシッターが降りていることだろう。

「色んな人がパニックになって動きまわっている。止まっても同じことだと思う。それにここから出られればそれで大丈夫だ」  
詳しいことは説明できないが、月乃を安心させることが大切だ。

「何か出口は無いかな……？」  
現在地はおそらく西口に近い通路だと思う。

この駅地下は、十字の形をしている。それぞれ中心の時計台から東西南北に幅の広い通路が伸びているのだ。そして通路を挟むようにして色々な店が立ってる。

北口には先ほど乗ってきたリニア乗り場がある。わざわざこの地下街に降りなくても夕川町に出られるのだが、地上にはあまり店が無い。地下街に収容されているからだ。

だから当然のごとく遊びに来た人は地下街に降りる。そこを今回は狙われたわけだ。

南口は夕川町のはずれの方に出る。そこには大きなショッピングモールがあったり、ホテルがあったり、遊園地があったりとレジャー施設がたくさんあるのだ。

だから自然と人も集まる。先ほども南口のシャッター付近には多くの人が集まっていた。

西口は会社などが立ち並ぶ高層ビル街に出る。仕事の純度100パーセントの世界なので、通行人はほぼ0に近い。あそこに居る人たちみんなは自分のオフィスから出ないそうだ。

東口は住宅街。特には何もないが、そっち方面に家がある人たちでごった返してそうだ。

と、いうことは。

「月乃。西口に行こう。人が少ないから暴走からは逃れられると思う」

その前にはまず中心まで行かないといけないのだが。これがこの構造の難点だ。

「そうね……少し静かなところがいいかも」

特に反対することもなく月乃はついてきてくれた。

南口に向かって走る人の群れとは逆に俺たちは中心へと向かっていく。

その中で、何か、嫌な感じがした。

何かは分からないが、混じっていた。

不純なものが混じっていた気がする。

「亮？ どうしたの。いきなり立ち止って……？」

「いや、なんでもない」

たぶん思い違いだ。今の雰囲気当てられているのかもしれない。

そう振り払って歩を進める。

だが、彼の予想は当たっていたのかもしれない。

「欠陥製品ジャンクを数体放つとは言いましたが……こんなにも行動不能なるなんて思いもせませんでしたよ……」  
使い捨てはこの街の中央制御室で自分のパソコンを開きながらそうつぶやいた。

逃げるために必死になった者たちは押し倒し、乗り越え他の出口に向かう。

そんな中で2体の欠陥製品ジャンクは頭を損傷し、使い物にならなくなった。やはり弱点である頭を補強した方がいいのだろがそんな技術は生憎持ち合わせていない。せいぜい頭を裂いて改造することぐらいしかできないのだ。

そして他には5体を北口に設置し、警備隊との対戦に使っている。おそらく地下街で正常稼働しているのは一体だけだ。そいつがどれほどやってくれるかが今回の騒ぎをどこまで大きく広げられるかを左右する。

「始まりましたね……」

中央制御室でモニターを通して欠陥製品ジャンクと警備隊との戦闘を眺める。欠陥製品ジャンクは古来のマシンガンを使い警備隊を追撃するが、盾で完全に防がれている。

多少も考えて行動しているのうだが、所詮は捨て駒だった。すぐに警備隊と無人警官オートロイドに制圧され、拘束されてしまう。

対して被害は出ていない。今回は失敗か、と彼は思った。それはただ、その捨て駒に対してだけだ。今、画面に映っている刃物を振り回す男には期待を寄せていた。なぜなら彼は痛覚無視セロなのだ。こいつに対してアイツらはどう対応するのか、反応するのか。それが楽しみでならなかった。

せいぜい、恐怖するがいい。そう思った。



## No. 22：被害拡大

警備隊の一人は目の前の現状に困惑していた。もちろん、多くの訓練を積んでいるのでこんな場合の対処法などはいくらでもあることが分かっていた。だけど、それでも、彼は困惑していた。

なぜなら。

無人警官オートロイドが何故こんなにも簡単に壊されていくのか分からなかったからだ。

外部からの耐久性は世界一とまでいわれたこの材質の壁をいとも簡単に取っ払ってみせるなんて人の技ではない。異常、明らかに異常である。そんな場合の対処法なんてものはテキストのどこにも載っていない。ゆえに、敵の制圧方法が分からない。何故あの類に傷のある少年が無人警官オートロイドに触れるだけで内側から破裂するようなことが起こるのだ？

あの黄色の髪の少女は何だ？ どうして彼女の周りには鉄くずが集まっていく？ それによって形成されたアレは何だ？

最後に一番先頭に位置する銀髪の彼は？

どうして硬質ゴム弾が効かない！？ アレは大の大人でも当たっただけで悶絶するような威力だぞ！？

意味が、分からない。世界に何らかの歪みが、いや秩序が乱されている！

「うおおあああああああつ！！！！」

彼は連射モードに切り替え、硬質ゴム弾を辺り一面にばら撒く。

類に傷のある少年は無人警官オートロイドを盾としている。黄色の髪の彼女は鉄くずを盾と変化させている。銀髪の彼に至っては防ぎもしない。

馬鹿なっ……………！

そんなとき、無線から許可が下りた。

彼は迷わなかった。実弾を使うことに。

「次こそ、次こそ……………」

実弾を連射。全ては銀髪の彼に当たる。血飛沫が上がり、糸の切れた人形のように地面に転がる。

死んでしまったのかもしいれないけど、彼はそれでもよかった。頭の中の何かが危険信号を発していたからだ。殺さないで殺される。

ふと、違和感に気付く。

おかしくはないだろうか。仲間からの無線でのやり取りが先程から一切ない。それに後方援護がなく、実弾を乱射しているのは自分だけだった。

最悪な場面を思い浮かべながら後ろを振り向く。嫌だ、嫌だ。そんなこと、あつてはならない。

エリートエリートの警備隊なのだから。自分たちは。後ろには。

四肢を切断された仲間、無理矢理何かで貫かれた仲間、重量のある無人警官オートロイドの下敷きになっている仲間……がいた。いや、そこに『モノ』として転がっていた。

「ぜんっぜん、感じねえ」

警備隊の彼は視界が暗くなる寸前に銀色の流れ星を見た。

全てをモニターを通して見ていた使い捨てユーストは柄にもなく満足していた。警備隊なんてこんなものかと今なら嘲笑出来る気分だった。機動隊レベルの人員を持ってこないとなら潰すことは不可能だと確信していた。だからこそ、後ろの人物の存在に気がつかなかったのだが。

「誰だ」

「……………」

相手は何も返事はしない。しかし、敵意は感じられない。注意を払っていないと隣に居ても気付かない程度の存在感だった。自分より

も身の隠し方に長けていると一瞬で負けを確信した。しかし、殺し合いとなれば話は違う。自分の方が確実に場数は踏んでいるはずだった。

使い捨ては振り向くと同時に拳銃を発砲した。

バガン！ と中央制御室の壁に穴が空いた。

そこには誰もいなかった。

「まさか……」

そこで前に壊れない実験台が言っていたことを思い出す。

あいつは誰だ、と。

だが、そんな些細なことは忘れることにする。今のは自分の勝手な妄想だ。多分気が高揚していたのだろう。

そんなことよりあの三人に撤退命令を出そうと無線機に手を伸ばすが……、モニターに不審なものが映った。機動隊の動員。いつの間にか到着していたのだ。

「ふう、どうしましょうか……ここはあの三人の力を見せてもらおうべきでしょうか」

どうせ壊れたって大した問題にはならない。貴重な能力だが、サンブルはもう取れた。壊れない実験台がなんと言うかは分からないが、そんなことは気にしなくていいだろう。

彼はまた、誰かを使い捨てにしようとしていた。

西口にはあまり人は集まっておらず、やはりシャッターが降りていて出ることはできなかった。

歩き疲れたので適当なベンチに座って休憩をとることにした。しかし、どうしたものだろうか。

この調子であればおそらく東西南北全ての出口は閉まっていると考えられる。北口では今頃爆破されたりニアの消化活動などが行われているのだろうか。だが、何か引っかけがあることがある。

この間のテロとは少し違う点が見られる。それは、怪我人の数だ。確かに、走って転んだり地下街に閉じ込められた人同士の喧嘩などで怪我をしている人はいるかもしれないが、決定的にこの間のテロとは重体の頻度が弱い。何か他に目的があるのだろうか。人々を傷つけることが目的なら、テログループの人間がこの地下街にいないければならない。しかし、それではもし救助隊が来たときにどう対処するのだろうか。自害？ 巻き込んで自爆？ どれも合わない気がする。同一犯なのであれば自分たちは安全で、的確に素早く破壊を行ってくるはずなのだ……。

そんなとき、天井が揺れた。

「な、何？ 地上で何が起こっているの……？」

テロか、もしくは救助隊が出口を爆破したか。……いや後者は考え難い。出口に密集している人間も吹き飛ばしてしまう可能性があるからだ。何が目的なんだ……？

「多分、救助隊が到着したんじゃないかな」

「どうでしょうね。……内部と連絡が取れないのに危険を冒してまで出口を開けるの？ 開けるにしたって爆弾とか……」

月乃はやはり分かっていった。それならば考えることは一つだろう。

「他の出口を探すしかないんじゃないかな……」

「亮もそう思ってた？ ……一応私、思い当たる節があるんだけど……」

「出口の？」

「そう、だって考えてもみてよ。明らかにこの駅地下の構造っておかしいじゃない。十字路になってるんでしょ？ 物資を運ぶ時はどうしているの？ わざわざ東西南北のどれかの入口を使って運んでくるの？ そんなの手間がかかるだけじゃないの？」

「そうか……物資を供給するための専用通路があるかもしれないって？」

「うん。だってさつきからおかしいとは思っていたのよ。ほら、従業員があまりいないでしょ？」

思い返してみる。南口まで行った時も確か一般人だけだった気がする。

店の人は自分たちだけで逃げたのだろうか。……普通こういうのはまとめてくれたり、声をかけてくれたりするのではないのだろうか。「亮の思っていることは分かるけどさ、その脱出出来た人たちが救助隊を呼びに行ってくれてるかもしれないじゃん」

「そうだよな……？」

そうは思うが、何か引つかかる。呼びに行ったのなら戻ってきてもいいのではないだろうか。戻ってきて出口に殺到している人たちに呼び掛けてくれたりはしないのだろうか。

しないのではなく出来ないのだとしたら。

物資運搬用の出口がどうにかなっている、もしくは出ていった人たちがどうにかなっているのではないだろうか。

暗い考えは捨て、今はただ助けを待つだけだった。

ファーストフード店で働いていた青年は血を噴きながら地面を這っていた。場所は物資運搬専用通路。この坂道を上がっていけば工場地帯に出られるはずだった。

ここで勤めている者たちの話し合いでは一旦ここから外に出て、救援を呼ぼうというものだった。

そのはずだったのだが、道が阻まれた。

前方から歩いてきた眼帯をした少年。それと数人の男達。

少年の目の焦点はしっかりとしていたのだが、男たちはどこか虚空を見つめているようで気味が悪かったのを覚えている。

少年が命令すると、男たちは一斉に発砲してきた。

店長が撃たれ、バイトの子が撃たれ、自分が撃たれ、……容赦はなかった。彼らは殺す気で来ていた。

何も出来ずに倒れた。

そんな俺たちに眼帯の少年は言った。

『自分たちだけ逃げようだったってなア……醜いな』と。  
違う、そうじゃない。俺たちは、ただ助けを……。

結局、彼も何も出来なかった。

No.23：ロクムナナ（前書き）

キーワード作りすぎてようわからなくなった；

全部回収しようと思っていますので気長にお待ちくださいm（

）m（

あと、新作を今執筆中です！

これが終わったら投稿しようと考えています。

何もしないだけで時間は流れる。ならばいつそ行動を起こした方が早いのではないか。

そう考えたのは、月乃の発現があつたおよそ一時間後。

やはり待っているより動いていた方が気は紛れるし、目的があることで負の感情を抱かなくていい。

それを月乃に告げたところ、彼女も了解してくれた。とりあえずは、その物資運搬用通路を探してみようということになった。

「とは言っても……… どういうところを探せばいいのやら」  
ホルスターにしまつてある拳銃を触りつつ、月乃に尋ねる。

なんだか、嫌な予感がする。拳銃を触っていないと落ち着かない感じがしてくる。

「そうね……… 多分、その通路は一つじゃないと思うわよ？ 一つだつたら結局東西南北の出入り口と便利さ的には変わらないと思うの」

「大きな店の裏とか……… かな、物資運搬って言うくらいだから」  
考えを巡らせながら歩いていると、いつの間にかこの地下街の中心時計台の前に来てしまつていた。

北口は先ほどの爆破音から何も分からなく危険だから無し。西口は今歩いてきた方向だから無し。まだ行っていないのは……… 東口付近大きな店もあつたかもしれない。東口方面を重点的に探そうと決め、月乃の方を向くと。

「月乃………？」

月乃は固まっていた。震えているわけでもなく、ただ固まっていた。何かを予測したかのような、何かを確信してしまつたかのような行動だった。

「どうしたんだ、月乃？ 何が………」  
「声がしない」

ポツリとそう声をこぼした。

「声………？ どういうことだ、地下街に居る人の声なんて

おかしい。

俺も気付いてしまった。

先ほど南口から西口へと移動する際、この時計台前や移動時にはどれだけの人数がいただろうか。

かなりの大人数の人とすれ違わなかっただろうか。

あれだけの人数が南口にごった返しているとは考えにくい。何か広いスペース求めて移動し落ち着いたころには休憩でもとるのではないだろうか。

それなのに、何故。

何故中心部に誰もいなく、声すらも聞こえない？

先ほどの嫌な予感がゾワゾワと増幅していくのが分かった。なにか胸の内からドロドロとしたものがあふれ出てくるような感覚だ。気持ちが悪い。

「月乃………、確かにおかしい。あんまり俺から離れるな………」

「うん………」

地下街の中心の時計台の下で身を寄せ合う。

心臓の音だけが跳ね返り、耳に届く。

気味が、悪い。

俺はホルスターに手をかけ、拳銃を取り出す。月乃が不思議そうな目で見ていた。

「ああ、これは生徒会長の姉さん………警察の人からこの間のテロのことがあるからって渡してくれたものなんだ」

「本物………なの？」

「実弾ではないらしいけど………撃てるかは分からない」  
ガチリ、と嫌な音がした。

手の内の拳銃からではない、時計台の裏からだ。誰かがいる。

疑心暗鬼に陥った俺たちはおそらくそれをただの民間人だとは考えられない。明らかにこの状況であればテロリストの一人だと思っだろう。

それは間違っではないなかつた。

「あ、ハ、」

歪んだ、いや最早捻じ曲がったかのような笑みを浮かべた男がそこに居た。

「ミつけた！ 人肉っ」

男の手には目測刃渡り30cm以上の異常な包丁……いや剣が握られていた。

「月乃っ！」

「ひゃっ……」

月乃を突き飛ばして後退させ、俺は拳銃の引き金を引く。

ズバン、という音とともに硬質ゴム弾が発射されるのだが、男の肩を擦れて外れた。

それはそうだ。特に拳銃の撃つ練習をしていたわけでもなく、何か習っていたわけでもない。

実際問題反動に腕を持っていかれていた。これはひどい有様だ。

振り上げられた剣を見て思う。

どこまで俺の身体に埋まるのだろうか、と。

ぞぶっ、と俺の肉

ではなく、頭上にあ

った時計台の飾りに剣は食い込む。

チャンスだと頭で理解する前に月乃の腕をつかみ、走り出していた。

「……っげるぞ！」

「亮！ 大丈夫なのっ……！」

運。

運だった、こればかりは神様に感謝しなければいけない。本当だったらどうなっていたか分からなかつた。死んでいる可能性があつた。いや実際死んでいたのかもしれない。

月乃の手を引きつつ走る。どこまで行けばいい？ とりあえずは広

くて大きな店……！  
視界にスーパーマーケットを発見した。

人、人、人……。床一面に人が敷き詰められていた。もちろん綺麗に並べてあるわけではない、山積みになっていたり折り重なっていたりと色々だった。それらは全部当たり前のように血を流していた。凶器は刃物。狂気は壊れたその心。

今回はすごく活躍してくれたようだった。使い捨てユウストも喜んでいるだろう。

このテロが終わったら次はクニの中心部を叩こうと決めていた。

そのためにはここから出て、全員を集めたうえでいつもの場所に戻らなければならない。だが、外では機動隊やらと新参3名が戦っているらしい。誰かの命令なのか、そうせざるを得なかったのか、どちらにせよあまり良い展開ではなかった。

余計なこと、が起きている以上終結するまで地上には出られなかった。

暇つぶしに地下街に降りたものの、余計にすることが無くなって退屈になってきていた。

盗みをはたらこうにしても何が必要なのかが分からない。正確にはあそこには足りないものがありすぎて持っていくものを決められな  
いと言ったところか。

もうじきこのクニも終わるのだろう。

俺が終わらせるのだろう。

そんな時、何か長方形の機械のようなものを踏んだ。それは携帯電話だった。

ちようどいいと思い、記憶している番号に電話をかける。

「ああ、久しぶりだなア。……本当に楽しいな、在ったものが崩れていく様を眺めるのはよお」

「貴様っ……………またテロをつ。……………狙いはそうか、国家転覆か……」  
「ちゃんと勉強したみたいじゃねえか。感心だ、次はオマエラ、中心部を叩く」

「考え直せ……………お前たちはこんなことをしてっ……………」

「考え直せ、だア？ 何ふざけたこともらしてんだ？ ……俺はオマエラチとほとんど変わらないことをしているだけだぞ？ ただ、規模が大きい小さいかの話だ。そこをところを理解しているのかア？ まだまだ勉強不足だなア！」

彼は近くにあつた自動販売機を蹴り倒す。自動販売機は機能を停止した。それは倒れたからではない、蹴られた箇所……に穴が空いて内部の機械が破損したからだつた。

「う、く……………。はははっ。では貴様も私たちと同じ、ということだな？」

「いや、俺は違うなア。……………最後は危険因子を一つ残らず核の海に消えてもらうつてところは違うだろう？」

「ふ、ざっ……………けるなあ！ お前らは、どこまでっ……………」

「なんとも言うのがなあ、お前たちがナニ力を言える立場じゃねえんだ。それに今までの全部自然災害……だろう？」

彼はさらに笑みを深める。

「何を……………いつて？」

「忘れたわけじゃないだろう？ 俺たちは虚数【imaginary number】だ。オマエラがつけた名称だよ。製造番号コード刻まねず、ただ腐ったクニのためと欲のためと造られた存在だよ。社会的には存在してないということらしいがなア！」

「それは……………」

「俺たちは本気だ……………って言わなくても現状で把握できるよなア」

「そうか……………では、私たちも国のために本気で立ち向かうとしよう」

「ハッハア！ ぶざけたことをお！」

彼の手の中にはもう携帯電話と呼べるものは無くなっていた。

近くで誰かが叫ぶ声がした気がする。多分男の人の声だとは思う。しかし、見に行くようなことはできない。近くまであいつが迫っているから。

すぐ近く。おそらくこの商品棚のとなりに居る。どうするか。ここはもう迎え撃つしかないのか。

そう考えていた時、人影が見えた。先ほどの剣を持った男ではない。もしかしたらあの人も狙われるかもしれないという思いだけが先走り、その人の近くへと月乃とともに駆け寄っていった。

それは今思うと間違いだったのかもしれない。人影はスーパールの入口付近に居る。頑張って走ればその人を連れてそのままスーパールの外へ逃げ出せるかもしれない。そう考えて走り抜ける。

剣を持った男からの逃走は成功した、しかしさらなる問題は積み重なった。

その人影は。

一回目のテロの時に姿を現したあの少年だった。

「ああ？ 生き残りか……メンドウだな……っ？」

「お前っ！」

彼は眼帯をしていない方の目を丸くしていた。

その視線は俺ではなく月乃に注がれていた。正確には月乃の顔の製造番号コードに向けて。

俺はためらことなく拳銃を構えて零距离で撃とうとするが、いとも

簡単に拳銃を払われてしまう。その間も彼は月乃から目を離さずに奇怪だった。

こんなときに何が。その問いを発する前に少年は笑い出す。

「ギャハハハハハハハハハッ！ 何だア、クニは最早ここまでやっちまうのかア！ 終わってやがる。腐りきってやがるぜ！ ギャハハハハハッ！ 馬鹿か、馬鹿だろうな、馬鹿なんだろうねえ！ いや馬鹿じゃないがねえよなア！ すげえじゃねえかオマエさんよお、いつの間に世界最古誇ってんですかア!？」

「な、に……？ 何なの」

月乃は困惑している。俺だってそうだ、意味が分からない。少年は何に対して笑っている？ 月乃の製造番号<sup>コード</sup>の位置？ たぶん違う。

彼は確かに番号そのものを見ていた気がする。

「あ、ハ、」

そこに男が現れる。背後から月乃を殺そうと迫りくる。

ワントンポ遅れて俺は気付けない。完全に死角だった。それに拳銃先ほど彼に払われたばかりだったが。

だが、

「取り込み中だア、邪魔すんなア」

彼は男の剣を掴み折ると、そのまま殴り飛ばした。

レジに派手に突っ込んだ男は動かなくなる。異常な光景だった。

そしていつの間にか隣に彼がいた。

「最っ高だねえ、こんなものがあるなんてなア……。異常だ、俺たち以上に異常だなア……」

「何を、言っているんだお前は、何を知っている!」

彼は口元を歪めて笑みを垂れ流しつつ、答える。

「4296078（しにゆくろくむななは）。……。その女の頭にはなア、初代numberのカーナルブレインが使われているってことだよ！ それにその左頬に強調するように刻むなんてなア、



多少の心配はしておくことに限る。それはどんな事態に対しても柔軟に対応できるようにするためだと私自身は思っていた。

私の名前の由来は、使い古されるものではないものから来ている。割り箸と似たようなものだっただろうか。そんな時代に生きていない私には理解できない代物だが、その程度のものだったのだろう。しかし、生きる上ではそんな存在ではいられない。

いや、社会的には存在していなかったとしても、認識的には存在していたのだ。そのうえで生きていくにはやはり使い倒されるだけでは駄目だと理解できていた。

だったら、逆に。

そういう動きを逆に相手にしてやることで存在価値が出るのでは？  
この世界に居るために、自分はそういう動きをしないといけない。  
近くのモノから、順番に。

自分が君臨するためには動く。

彼はモニターを見ながら呟く。

「相討ちだろうとは………思っていました。 廃材回収は欠陥製  
品にでも任せましょうか」

モニターには廃材共が映っていた。

おかしい、と彼女は思っていた。

確か中央街の外れにあったビルを制圧した時は完璧なる作戦で、途中参加した警察やそのほかの部隊もよくあしらえていた。この人たちは本気で国を制圧しようと考えているのだと理解できた。

それなのに今、どうしてこんなことになっているのだろうか。

最初の警備隊はよかった。簡単にあしらえた。次に機動隊が現れた

時、明らかに雰囲気が変わった。

相手は殺す気で向かってきていた。

私は磁力を発動して弾丸をずらしたり、鉄屑などを集めて叩き下ろしたりこちらも殺す気で行った。

しかし、相手の行動もまた違った。

捨て身。

守りつつ戦うのが警備隊、機動隊の常識なのだが攻め重点でやってきた。

倒れるものは見過ごし、攻められるものは攻める。

鬼気迫るものがあった。

だが私たちに与えられた作戦は『殲滅せよ』とのことだった。

作戦を組み立てた人間が変わったとしか思えなかった。

そう気付いた時にはもう遅く、私は空を仰いでいた。

隣には熱量上昇オーバーヒートが転がっており、痛覚無視ゼロはいなくなっていた。

私たちは使い捨てられたのではないか。そう言えばそう呼ばれていた奴もいたような気がする。

瞼が下がってくる。身体が動かない。またあそこに戻るのだろうか。

直後、機動隊の面々は弾け飛んでいた。

しかし彼女はそれを理解する術がもうなくなっていた。

「意味が分かんないよ……私が、何？」

月乃はおびえていた。確かにそうだ、いきなり類の製造番号コトに触れられ、晒われ、終いには頭の中身が自分じゃない？ それは不安になって当然だ。

「お前さんはオマエであつてお前さんじゃねえんだよ。世界最古だよ、初代 number だつていつてんだろ!？」

「お前……… 適当なことばかり言つてんじゃねえよ!」

「適当じゃねえよお!」

彼は両手を振り上げ笑つて答える。

「世界の表に生きている奴が何を言える？ 俺は裏だからこそ知つている。第一、顔に製造番号なんてモンを刻む奴がいるか？ 居ないだろうなア、なんたつて表の世界じゃあ憲法にまで食い込んであるんだろつ？ 人間と number は同等だつてよ。最悪区別のために製造番号を付けるにしたつて見えない場所にするもんだろお？」

彼は続ける。

「つつか、製造番号なんてものが必要なのかア？ 平等だと言つて回つていることに対して矛盾してねえかア？ そついうもんだよ、この世界は狂つてやがんだよ。実際問題、俺は number だが、製造番号がねえ。それは要するに秘密裏に造られたつてことだろ？ 私利私欲のためだけにだろつ？」

悪意が噴き出し、俺は混乱する。

世界の裏、なんてものは知らない。

「オマエはみただるお、あの時俺に起こつたことを……よお」

あの時、一回目のテロのことを指しているのだろつ。はねのけられた拳銃が目に入る。

「あ………」

そつだ、確か晶さんが撃つた拳銃からの弾丸が逸れた……？ 今俺の目に入つている拳銃から放たれるのと同じ硬質ゴム弾が当たつたはずなのに逸れた。これが示すことは？

「俺がクニに作られた理由は実験台だ。ネーム、『壊れない実験台』」

「壊れない実験台……？」

「そつだ、人間様のためだけに生み出さた。わざわざ感情のオマケ

つきでよお。感情データ、耐久データを取るためだけにな」

ナンバー製作の裏側、だった。紛れもなく体験談だ、そう感じさせるものがあつた。先ほどまでの殺気とは違う、なにか底から湧き上がって来るかのような悲しみとも怒りともとれた。

「まあ、俺のことはいいだろう。それよりお前さんだよ……キナルナア。何のために何で作られたのかもわからねえ……くくくつ、ぎやははははははっ！」

「お前：本当は知ってるんじゃないのか！」

「知らねーなあ、知らねえ……おっと、上も終わったらしいな。次の目的も変更だなあ」

彼はそういうと踵を返してスーパアの奥に入っていつてしまった。レジに突っ込んだ欠陥は未だに動かない。俺は彼を追えなかった。それより月乃のことが心配だった。

「おい……月乃？大丈夫か！」

「……」

「月乃っ！どうした、月乃っ！」

「うるさいなあ……大丈夫だって……ば」

どうしても大丈夫には見えない。無理をしている。

「あんな奴が言うことなんて嘘に決まってるじゃん……っ。その前になんてあいつ捕まえないわけ！」

「っ、捕まえるって、あいつには拳銃が効かないんだよ……」

「そんなの知らない！追うわよ……」

月乃は俺の手を取って走り出そうとする、そこで

「動くなっ！」

機動隊らしき防具をまとった面々がスーパアの入り口に現れた。

余計なことを話してしまった、と少なからず壊れない実験台は思っていた。

しかし、自分のことなどどうでもよかった。結局テロの動機がどうだからと言ってそれで何かが変わるわけではない。それだけは揺るがない真実だった。

「あの女………」

まさか本当に実在しているとは思わなかった。世界最古の number のカーナルブレインを移植された者が。しかもそれが正常起動しているということはもつと驚きだった。やはりこのクニは面白いことをしてくれる。アレは一体何の目的があつて造られたのか。それがキニナル。

いや、本当のところは目的などないのかもしれない。またはただの実験なのかもしれない。

number を作るのには金がかかる。それはそうだろう、何から何まで用意しなければならぬのだから。

そこで彼は思いつく。もしかしたら、と。

『number 再利用実験』そんな言葉が頭の中に浮かぶ。

死んだ number の脳の部分。つまりカーナルブレインのみを再利用し再び number を生み出す。もしそんなことが可能なら必要資金はぐつと減るのではないか。

それはかつて生きていた者の身体の一部を初期化して再利用するということで間違いない。

number と人間は同等だとほざいているクニ。今、どれほどおぞましいことをしているのか分かつてるのか………。

壊れない実験台は、スーパーの裏手から非常用階段を上り、地上に出た。

そこで見てしまった。彼女を。

ここでの彼女は月乃のことを指しているのではない。

顔は作り物の人形のように美しく白いワンピースに身を包み、長い長い白髪を風に靡かせて裸足でそこに立っている彼女だ。

アノカノジヨ、ムカシニデアッタカノジヨ、オレガウラギッタカノジヨ。

そいつが今、目の前に居る。

「は……………っ、なんだアこれは。幻覚か、俺の妄想かア……………それともクニの奴が俺に電波ジャミングをかけてんのかア」

口ではそう言うも、彼は本心では分かっていた。彼女がそこに在ることを。

今、まさしく実体のあるもので逆らいようのない現実なのだ。

「久しぶり……………はーど」

彼女は無表情のような顔の中に少しの笑みを混ぜて彼の名を呼んだ。

## No. 25：血塗りの過去

「おはよう」

生まれて初めて聞いた言葉がソレだった。

『赤子』という存在から始まるのではなく、彼は少年から始まった。全長160cm程度のその身体は妙にだるく、到底動けそうもなかった。意識もぼんやりしていて視界も霞んでいてよく見えない。なのに、言葉だけは何故か聞き取れていた。それは透き通るような綺麗な声だったからだろうか。

次に目が覚めた時には起き上がることができるようになっていた。立ち上がることも歩くことも、走ることだってできるようになっていた。頭の中は空っぽだったが、狭い部屋の中で隅の方を避けて走り回っていた。

次第に知識が知らずのうちについていき、感情というモノも持った言葉だつて話せるようになった。

そこで部屋の隅に居る彼女に話しかけた。

「ここ、どこだ」

彼女はほんの少しだけこちらの顔を見て、微笑を浮かべてわからない、と答えた。

右を見ても左を見ても、もちろん上も下も後ろもコンクリートで塗りつぶされていた。唯一、前方のみがコンクリートではなかったが、天井から床にかけて柵が張ってあった。

牢獄、とどこで知り得たかもわからない単語が頭に浮かぶ。知能を持ったところから逆に分からないことが増えて、彼は困惑していた。自分はなんでこんなところに居るんだろう。彼女は誰なんだろう。自分のことさえ分からない。

柵に触れ、顔をのぞかせる。

暗い廊下が左右に広がっていた。点々と赤いランプがついているのが分かるが、それ以外は情報は無かった。

再び彼女に話しかけようと後ろを振り返るが、彼女はいなくなっていた。

おかしいな、と思い目をこする。彼女はいない。辺りを見渡してもいない。

「どうしたの……?」

彼女の声が出て、驚いて柵に背をぶつける。ギーン、と音がした。

彼女は目の前に先ほどと変わらない体勢でそこにいた。

「?」

彼女は疑問符を浮かべるが、それ以上に彼は困惑していた。

確かに先ほどまで居なかつたはず。

そんなことを考えているうちに、人がやってきた。

「出る」

白衣を纏った男は彼の手を強引に掴んで牢獄から出し、暗い廊下を進んでいく。

彼が男に手を引かれた瞬間、彼女はとても悲しそうな目をしていたが、それは彼には分らなかつた。

暗く長い道を歩いていると、色々な声が聞こえる。

『いやだつ、いやだあああああつ!』

『ぐつ、ぎいいやあああああああつ!』

『やだ、やめてよお……いやあつ!』

これは声ではない、と否定する頭があつた。これは断末魔というのであると答えを出す頭があつた。

これから自分が何をされるのか、それが今彼の脳内を占めていた。

目が覚めた。アレは夢などではなく、現在進行形で続く現実だった。

「大丈夫? はーど」

横たわった自分のとなりには彼女が立っていた。

「はー……ど?」

「そう、あなたの名前」

「名前……」

物や人物に与えられた言葉のことで、それらを識別したり呼んだりする際に使われるもの。自分の知識にはそうある。

いわゆる、呼び名。

「お前の、名前は？」

「くりあ」

「クリア？」

「そう、くりあ」

彼女はクリア、というらしい。なかなか感情を表に出さない彼女は不思議な存在だった。

と、身体に激痛が走る。

「ぐあああああつ！」

いきなりの理不尽な痛みに対して顔をしかめつつ、首だけを動かして自分の身体を見渡す。

腕に、胸に、足に、亀裂が入っていた。

そこで彼の記憶が実験の情景を写し出した。

『切断に対する耐久性はどこまでが限界だと思えますかね、教授』

『そんなことは実験すれば分かることだ。感情データの方も忘れずにな』

何やらよくわからない箱に入れられた。

そのあとに全方位から刃物が飛び出してきた。

単純な、ごく単純な実験。刃物の飛び出す速度や刺すまでの力、それを徐々に数値を変えて実験するのだ。

痛い、なんてものじゃなかった。

死に近い感覚が押し掛かってくるようなものだった。

痛みの次には怖さが襲ってくる。後何回同じことがあるのか。連れていかれていた時、他の部屋から聞こえた断末魔の正体が今判明した。

「あ……………」

声が出ない。

意識も、遠のいていく。

実験は、終わることは無かった。

切断、圧力、衝突、貫通、感電、高熱、冷凍、さまざまな耐久実験が何回も繰り返し行われた。

その度にもがき苦しみ、喉を枯らし、感情が固められていった。ただ一つ、変わらなかったのはクリアだけだった。

彼女はよく観察しないと笑っているのか、悲しんでいるのか、怒っているのかが分からない。喜怒哀楽といった感情は持ち合わせているもののあまり表には出さないのだろう。

白を基調としたワンピースを着ながらも裸足であり、流れるような長い髪に綺麗な顔立ち。だが、彼女は存在が希薄だった。

心身共に腐り果てボロボロになった少年は、恐怖ではなく次第に怒りを覚える。

何故自分がこんな目にあうのか。あの白い白衣を着た奴らは何を考えているのか。いつまでもただの実験道具ではいられない。

「クリア、あいつらは何なんだア」

「人間っていうの」

「俺たちとは違うシユゾクって奴だなア……腐ってやがる」

「でも、私たちは人間から造られた」

「それが何だつてんだ、俺はいつまでも実験台でいるわけにもいかねえんだよ」

彼は実験を繰り返すたびにとある力を手に入れていた。

『皮膚硬化現象』、脳内からの電気信号を自ら操ることによって皮膚を硬化し鋼のように固くすることができるのだ。

「これで、あいつらを殺す。そして明日、ここから抜け出す」

「はーどはここから出たいの？」

「何言つてやがんだよ、出るに決まってるだろおが。 気味がわりい、何よりも気に入くわねえ。 殺して殺す以外の選択肢が見つからね

えな！」

「そう、」

そういうと彼女はすっ、と霧がかかったように見えなくなった。どういうわけか、クリアはたまに消えるときがある。もしかして俺が幻覚を見ているのか、それともあいつにも特殊な力があるのか……。腐った研究員が誰一人としてクリアの名前を出さないということは前者の可能性の方が高いのだが。

次の実験の際。彼は暴れることを決意した。

両腕に手錠、目隠しをされいつものように暗い廊下を引かれながら歩く。最近ではめつきり断末魔がなくなり、廊下は静かになっていった。

「オイ」

「黙れ、貴様は口を利くことは許されん」

「いいから教えるよ、最近声が全然聞こえねーんだけど？」

「っ、はははっ。大方死んだか使い物にならなくなったか精神崩壊したかのいずれかだろ。あるいは玩具にされていたりな……お前は結構長く持つな」

いつも以上に饒舌な研究員。何かいいことがあったのだろうか。最後に聞いてみる。

「なんかいいことあったのかア。ずいぶんとおしゃべりじゃねえか」

「はっ、貴様に言っても分からんだろうがその玩具が手に入ったんだよ。今から楽しみでならない」

研究員は鼻息を荒くしてそう答える。

そうか、それはよかったなア。しかし、いいこの後には大抵、悪いことが起こるだろお？

「残念だったな、オモチャで遊べなくてよお」

ゴリッ、と丸いものを弾き飛ばす感覚が手から伝わってきた。ちなみに今、硬化している。

手錠を強引に引き千切り、目隠しを取る。床には眼鏡をかけた研究員が鼻血を流してあがいていた。

「オマエが死亡第一号だな」  
グシャ、と何かが潰れる音がした。

次に向かったのはいつもの実験室。試験部屋ではなくモニター部屋のドアを蹴り飛ばし、中に侵入する。

「なっ、貴様っ！」  
「逃げ出しやがったか！」

一人の研究員が銃を持ち出し発砲する。そんな物は効かない。

「オマエらさア、俺にどんな実験してたか忘れたわけじゃねーよなア。なんで効かねえって分かんねえんだ？ 動揺してんのかア！」  
なんだか知らないけれど、楽しくなってきた。  
相手の口に両手をつっ込み、上下に引き裂く。

「ほがあっ、つぎいやああああっ！」  
もう一人の研究員は、骨格が変わるほどに殴りつけてやった。

ガンゴンゴンゴツ、  
それから、わけのわからない機械を破壊して回った。  
さまざまな場所をめぐるって、ドアを開けて、破壊した。  
色々な部屋があった。死体廃棄場、新たな被験者製造場所、資料庫。

その中に、ネームプレートがドアにはめ込まれていた部屋があった。研究室のようでPCや資料が乱雑に置かれていた。資料に見覚えのある写真が貼ってあったのを見つけた。被験者資料、らしい。

『壊れない実験台』、『存在<sup>クリテ</sup>希薄』……それ以外の資料には×が書かれていた。

あの研究員が言っていたことを思い出す。  
断末魔を上げていた奴らは死んだのか、声だけしか知らないとはいえ何だがおかしな気分になってくる。

資料を破り捨て、奥に進む。一番奥にはデスクが鎮座しており、妙

に片付けられたそのデスクの上には一通の便箋があった。どこかの会社名が書いてあった。だが、それだけで本質はしっかりと理解できた。

同業者だと。

その時彼は、腐った会社を潰して回ろうと決めたのだった。

ここは燃やしてしまおう。そう考えてからクリアを探すことにした。だが、彼女はどこにもいなかった。

「んだア……やっぱり幻覚なのかア」

しかし、彼女は自分に触れていた記憶がある。幻覚は触れないはずだ。それに、彼女は俺が生まれたときいや、意識を持ち始めた時からいた。それに資料があるではないか。

再び探し始めたが、牢獄にも、実験室にも、どこにもいない。走り回るのに疲れ、叫ぶ。

「クリアっ！ どこに居やがるっ！」

しかし、答えは返ってこない。

その時、ゆらりと白いものが動いた。

クリアのワンピースかと思い、それに近づいていく。

妙に左右に揺れるそれは、おかしいくらいに歩みが定まっていらない。

「オイオイオイ、死んでねーのかよ」

「しあしあ、こんにゃことでじんげんはじなーえよ」

それは先ほど口を引き裂いた一人の研究員だった。

血をたらだらと流し、まともに話せていない。ずっと血濡れた歯が見えている。

「くりあ、とぜっしょくしていだらしいな………」

「あ？ クリアがどうしたって？」

「おでのべやに……」こうぞくした。あではおれのげんぎゆうだいたいしようだったがらだ、……であが、もうびい。ここをがくばじで、

ぎざまどにもじんでやる！」

爆破、だけがかろうじて聞き取れた。

研究員は懐から取り出したスイッチを押し、携帯端末機で何かを操作し始めた。すると。

ゴゴゴゴゴゴッ！ と地面が揺れ、後方が火の海にのまれた。何かが爆破された。

「ヴぁっ……ごれで、ぎざまもおでもおばりだ！」

研究員は倒れ、意識をなくす。それでも彼はもう一度顔面を踏み碎き、殺す。

ここが倒壊する前にクリアを探さなければならない。

タイムリミットは、あまりにも短かった。

№ 26 : 始まりの始まり (前書き)

G W きたーぐ ) 。 ? ( )

## No. 26：始まりの始まり

いない、いない、いない。

どこを走り回って探しても彼女はいない。

砕けて肉片になった研究員は言っていた、『俺の部屋に拘束してある』と。

いや、実際にはそう聞きとれていな方ので違うのかもしれない。だが、あいつはそういうニュアンスで話していた。現に部屋という単語だけは聞き取れたからだ。

所々で赤ランプが回転しつつ甲高い警報音を鳴らしている。ここはもうとつくに研究所ではなくなっていた。火が舞い、排気管から熱風が噴き出している。うかつにドアを開けるとバツクドラフトが起き、爆発が起きたりもする。

いくら頑丈とはいえ、死ぬ時は死ぬ。燃やされても死ぬ時は死ぬだろう。外部からの打撃斬撃等の直接攻撃に値するものはほとんど無視できるのだが、電気、熱、火などには弱いことは実験によって自分でももう理解することが出来ていた。だからこそあの研究員は火事を起こしたのだろう。

そこでふと思う。この施設はどこに建てられているのだろう、と。

こんなことをしているくらいだから人目に付く場所ではないことは確かだ。だが、遅かれ早かれ救助隊なるものが駆けつけてくるのではないのか。

それに、心配するところはそんなところではない。出口が分からないことの方が危惧すべきだった。

俺はこの施設から一切出たことがないうえに牢獄から実験室までの通路しか知らない。

今いるこの場所でさえどこなのかが想像がつかない。その前に、まずここは地上にあるのか？ 窓が一切ない。機密の研究室であれば地上に建ててあってもそういうことがあるかもしれない。しかし、

ここが地下だとすれば？ 窓なんて必要もないし、機密性もばつちりだろう。

だんだんとある感情が雪だるま式に大きくなっていく。

不安、ではない。怒り、だ。

どこまで理不尽でメンドウなのかと。出ることすらも許されず、あいつらの思うままにまた操られて死ぬのかと。自分勝手な理由で造られ、自分勝手な理由で殺され、どれほどあいつらは偉いのだろうか。偉いわけがない。人間というものはそういうものだ。腐ってやがる。殲滅させなければゴキブリのように増え、自分勝手に世界は喰い荒らされていく。俺たちはその道具として一生使われる。そんなことは願いたい。だからこそ、逆にこちらが自分勝手になってやろう。

クリアのことなどどうでもよかった。ここから抜け出し、他の研究機関を潰す。彼には大きな目標が出来たのだ、こんなところでぐずっている暇はなかった。

彼は上を目指し、走り出す。

地上に出た時、思わずもれた感想は『空が青い』などそんなものはなかった。『やはり地下だったのか』というそれだけのものだった。知識の中にある単語と今の風景を照らし合わせると、森という表現が一番に合った。

山奥の、森だった。

彼が一步踏み出した時、研究施設があったであろう一帯が地盤沈下のように沈んだ。

火は見えなかったが、黒煙が立ち上り、終わりを示していた。

クリアも死んだのだろう。どこかの部屋で。

彼女は最後まで謎だった。何の実験台にされているのかもわからず、感情もあまり見えない。もしかしたら俺が助けていればその謎は謎ではなかったのかもしれない。俺は彼女

クリアを裏切

ったのだ。

前日に抜け出すと言いながらも彼女を連れ出さなかった。

これは立派な裏切りだ。

だが、それがどうした。俺は今からたくさんの人間を殺す。姿形が同じモノを殺す。

こんなところでは立ち止ってはられない。

ここから彼が始まった。

忌々しい回想から覚め、現実問題を直視する。目の前に居るのはやはり存在希薄だ。

これは真実。しかしだとすると彼女は生きていたのか、それともまた俺は幻覚を見ているのか、それが分からないから確かめる確かめるために彼女に触れる。

しっかりとニンゲンのような感触があった。体温が感じられた。

「はーど、……………冷たいね」

「オマエが温かいだけだろ」

彼女の頬から手を離し、彼は尋ねる。

「生きてたのか」

「死んではいないよ」

「捕まってたんじゃないのか」

「アレは研究員の嘘、私は最後まではーどを見てた」

「……………。何故姿を現さなかった」

「目の前に居たけどあなたが気付かなかっただけ」

彼女はハッキリとそう告げた。

存在希薄

研究所の資料にもあったように存在が希薄

なのだ。あの火事であるという状況下の中で彼女の存在を認識するのは不可能だったのかもしれない。

ただ、今ここで謎は謎ではなくなる。

「オマエはあそこで何のための研究に使われていた？」

「……………そんなことより、はーどは何をしようとしているの？」

疑問に質問がぶつかり、火花が散って沈黙が訪れる。

彼女の存在は周りの喧噪によってかき消されそうになっていた。それでも見逃さないよう壊れない実験台は目を凝らす。やがて口を開いたのは彼女の方ではなく自分だった。

「チツ、国家反逆だよ。クニを潰すんだよ、だからこうしてテロしてんだよ」

彼女には敵わなかった。黙り合いとなると彼女は真に力を発揮するのではないだろうか、沈黙というのは自分を守る最大の柵となり得る。情報を一切もらさない、声を発しないので声色から感情を読み取ることも不可能、自分の中身を守ることにおいて彼女は最強だったのかもしれない。

だが、それは当時の俺が思ったことだ。

「こつちはイライラしてんだよ、情報は少なくともあつたほうがイイ。ただ目の前に現れただけなら邪魔だ、失せる」

威嚇は必要がない、彼女には効き目がないだろうから。しかし、用件は伝えないと意味がない。

別に彼女を殺したって構わない、もともと死んだものだと思っていだからだ。謎もそれほどに興味がなかった。だが、今このタイミン  
グで現れたのには意味があると踏んでいる。

だから、欲する。

けれど彼女は壊れない実験台の言うとおりに視界から消えた。

あなたの思惑通りには進まない、そんなことを暗示しているかのよう  
うで無性に腹が立った。

彼は一人、ガスタンクを蹴り飛ばしてさらに地下街裏出入り口を炎  
上させた。

機動隊に周りを囲まれ、俺たちは動けないでいた。

盾のようなものの隙間からは銃口がいくつも見えていて動いたら撃つと言わんばかりに標準が俺たち二人を離さなかった。

「待った、どうやら一般人のようだ。君たち、ここに眼帯をした少年が来なかったかね」

銃口が一斉に下を向き、身の安全は確保された。しかし矢次に繰り出された質問に対してまともに答えることはできなかった。

混乱していたのだ、月乃が世界最古の number だとかカーヌルブレインがどうだとかで明らかにいつものようにふるまえなかった。機動隊の一人が訝しげにこちらを見据える。疑っているのだろうか、それとも危機迫るこの状況で真剣になっっているのか。どちらも今の自分では読み取るどころか把握も出来ない。

「う、注意を促すことはできる。」

「う、後ろ！ 危ないですっ」

先ほど壊れない実験台に殴り飛ばされて顔面がひしゃげた殺人鬼が機動隊の一人の背をずっぷりと刺していた。

「くあ……ごぶ……」

ガタンツ と盾を落とし、自らの身体も地面に落とす。そこから殺人鬼は銃を取り上げすぐさま乱射する。

「君たち、下がちなさいっ！」

銃撃戦が目の前で繰り広げられ、発砲音が耳に響く。こちらには盾があるので一方的に砲火が可能だった、しかし撃てども撃てども殺人鬼は倒れない。まるで何かに取りつかれたように機関銃を撃ち回し、その身に銃弾がめり込もうと倒れはしない。狂っていた。完全に人形として使われていた。

あれは、殺人鬼ではなく殺人兵器だった。

銃撃戦を収めたのは一つの発砲音だった。

スーパールの入口から聞こえてきたそのあとに殺人兵器は床に倒れた。そしてそのスーパールの入口で銃口から煙を上げさせていたのは生徒会長の姉、若くして警察となった錠越真奈美さんだった。

「亮君、また巻き込まれちゃったみたいだね」

彼女は涼しげな表情のまま格好よくそう言い放った。

No. 27: 受動(前書き)

今回は短めです！

怒り、という思考はいつ生まれたのだろうか。少なくとも他の感情よりは早く生まれたと思う。

原動力となり得るもの第一位、争いの種となるもの第一位、諸悪の根源となるもの第一位。少なくとも俺の中ではそういう位置づけとなっている。だからこそそれを崇める強める則る。

光の刺さない廃ビルに差し掛かったところで中から声が聞こえた。晒い声だ。

「あア？」

暗がりの奥に進んでいくと、小さな光がともされていた。

そこには愛玩用<sup>アイシ</sup>、使い捨て<sup>ユウスト</sup>、感情規制<sup>リミッター</sup>が集まっていた。

誰が笑っているかと思えば使い捨て<sup>ユウスト</sup>だった。それに対して愛玩用<sup>アイシ</sup>は怪訝そうにそれを眺め、感情規制<sup>リミッター</sup>は目を閉じたまま黙っていた。

「わりい。遅くなった」

「おや、やっと来ましたか」

いつもよりかは幾分か調子の上がった声で使い捨て<sup>ユウスト</sup>が答える。

何かあったのか。いや、そんなことはどうでもいい。早く全員を集めて次のテロ現場へと向かわせなければいけない。

「おい、全然人数足りてねえじゃねえか。あいつらはどうした」

確か俺の出した命令では機動隊は全撃破しなくていいから撤退することが先だというものだったはずだが。どこにも彼らは見当たらない。

ガシャ、と何かを踏みつけた。それはさまざまな色の線が束ねられていたものだった。これは……numberの腕部分の神経線だ。

「あいつら……ですか。私の思い通りに潰れてくれましたよ」

「は………？」

使い捨て<sup>ユウスト</sup>が、急に声の調子を上げてしゃべりだした。

「おかげで最高の合作が出来ましたよ！ 電磁放出、熱量上昇、痛

覚無視を合わせた最高の兵器をね！」

「何言つてんだオマエ……カーヌルブレインが汚染されたのかア」

「その言葉！ あなたにそのままお返ししますよ。今、私はもうあなたに縛られる私ではない。最近のあなたの作戦は確かに完璧です。ですが……ぬるいんですよ」

「なんだと……？」

「犠牲者はほとんど出ない。出たとしても欠陥製品のみ。テロには犠牲がつきものなんですよ？ 何故あなたは攻め一点張りで行くとうしないのですか？ 私の名前、知っていますよね。使い捨てですよ。しかし、これは受け身型ではありません。私が使い捨てられるのではなく、私が使い捨てるという意味での名前なんですよ！」

両手を広げ、語る。

自分の名前の由来とテロに関する無意味な感想。つまりこいつは、そうか。

あれまで無表情だった彼がこんなにも顔を歪めて熱気をこめて話すことなんざ大したものじゃねえ。

少なくとも、俺にとっては。

「で、どうするつてんだ？」

「私はあなたを使い捨てます。ただ固いだけの人形なんていらんんですよ！」

「へえ、殺すつて。どうやって？」

「電波で、です。あなたを内部からグツチャグチャにしてあげますよ！」

彼はパラボラアンテナのようなものをこちらに向け、コンピュータに何かを打ち込んでいる。

次の瞬間、ガクンツ と膝が折れた。

地面に跪き、頭から割れるような警報が鳴る。

実際は、奴の電波が流し込まれているだけなのだが、俺にとっては致命的だろう。

「あつっはっは！ 脆いですねえ。こんなものですか！」

「ちょっと！ あんた本気で壊れない実験台を殺す気なの！？」  
愛玩用が叫ぶが、そんなことは気にも留めない。うれしそうに次々とキーボードを叩いている。

俺を殺す、か。

いつもの俺なら死んでいたかもしれない。しかし、俺は今イライラしているんだ、怒りを覚えているんだ。嫌がらせのようにたび重なる出来事に対して、だ。

だから、運がなかったと思え。

ガイイン、とパラボラアンテナが歪む。

「なっ……………何を！」

壊れない実験台は拳銃でアンテナを狙撃していた。

アンテナが歪んだことで電波は拡散し、効力はなさなくなった。これでも壊れない実験台を縛るものはなくなった。

「邪魔してくれやがって……………誰に刃向ってんだよ屑が！」

彼の肩が壊れない実験台に殴られ10cmほど沈む。ギチギチと嫌な音を立てて千切られる。

そこからはもう、独壇場だった。

顔を歪ませ相手の顔をも物理的に歪ませる。四肢は引き千切り、口の中に押し込む。無理やり押し込む。

意識が無くなり動かなくなった後も彼の攻撃は止まない。殴り続け、顔面はもう原形をとどめておらず、スクラップされたかのように平べったくなっていた。

「っ……………！」

愛玩用はそれを青ざめた顔で眺め、感情制御は冷たい目で見降ろしていた。

廃ビルにはただ、金属同士を打ち付け合うかのような音だけが響いていた。

スクラップになった残骸にはもはや用はないと言わんばかりに蹴り飛ばし、彼は二人に歩み寄る。

「邪魔物は消えた。これから次の行動に入る。……が、優秀な情報担当がいなくなった」

先ほどまでは、居た。

「おい、感情規制<sup>リミッター</sup>。オマエ、コンピュータは弄れるか？」

「出来ないことはないが、どうする」

「やってもらいたいことがある。もちろん、次の作戦の場だ。……」

……国家牽制はこれで最後にする。この作戦が終わったらクニを破壊しに行く」

「そうか、」

感情規制<sup>リミッター</sup>はそれ以上何もいわない。愛玩用<sup>アイシ</sup>は話せない。

なんだか誰もが焦っていて、疑心暗鬼になっていて、まとまらない。そんな雰囲気の中で危機を感じていた。

地下街作戦は成功したというのに壊れない実験台<sup>ハード</sup>は全然楽しそうではない。何かがあった。私たちと別れてからの間に何か。

余計なことは考えたくなかった。これで終わるのだから。

長かった計画もここまでだから。

残った人数は、私、感情規制<sup>リミッター</sup>、壊れない実験台<sup>ハード</sup>それと残骸と化したかつて生きていた者が残した破壊された仲間たちをツギハイデ作っただけの一体。

4人で、4人で、

この腐ったクニを終わらせる。



No. 28 : 彼女 彼 (前書き)

テスト死にry

更新頻度は一週間に一回程度です；

## No. 28 : 彼女 彼

機動隊や錠越眞奈美さんに保護され、テロ現場から脱出した俺たちだったが気分は晴れない。

月乃は先ほどから一言も話さず、何かを考えているようだった。俯いたその顔は髪が邪魔してうかがい知れない。

悩み考えている内容は、やっぱり壊れない実験台が言い放った言葉だろう。

世界最古のカーヌルブレイン移植者、録武ナナという人名、そんなものが自分の知らない世界で自分に関与しているという。知らなかったことは、まさに自分に関することだった。しかしそれは最悪のベクトルで、だ。

彼女は今何を思い、何を考えているのだろうか。

感情と言うものはいつだって相容れない。人の心なんて知り得ない。だからこそ言葉で伝える。しかし、そのときに具現化される言語が存在しなかったら？ 沈黙が常だったら？

人の心なんて1%も理解できないだろう。ただ、話してくれさえすれば。そうすれば力になることだって、支えることだって、理解してやることだってできる可能性と言う者が増える。それは決して無駄なことではないと思う。可能性と言う不安定なものにすぎりつくようだが、それは言い方を変えてみれば、視点を変えてみるのであれば、その人に助けを求めると言いかえられはしないのだろうか。だから、俺は月乃が話してくれるまで待つ。

頼りたいから。助けてやりたいから。

こんな小さな人間が何を出来るかなんて分からないけど。俺は。そう。

月乃が

「何見てんのよ」

か細い声で彼女は言う。

瞳は揺れ動いていて、虚勢でも何でも俺に構ってきた。いつもの自分を保とうしていた。

そんな彼女に。

「いや。月乃にはさ、俺がついてるから」

「っ

って、しまっ」

つい口が滑ってしまった。考えていたことが言語化されてしまっていた。

月乃は目をちよっと見開き、俺はしまったと口をパクパクさせ、沈黙は訪れた。

気まずい、というかなんだか視線が痛い気がする。怒らせてしまっただろうか。

こんな雰囲気では何をふざけているのか、と怒っただろうか。言ってしまった後だから言うが、俺は少し本当のことを言っただけだったのだが。

ギシツ、と座っていたパイプ椅子が悲鳴を上げる。

そっだここは警察の取り調べ室

よりは幾分か

ましな個室だった。

警察はやはり情報が欲しいのだろう。だからこそ、俺たちを保護した。

そしてこの部屋に入れられてから数分、取り調べの人間はまだ来ない。外が騒がしいのは部屋の中からでも分かった。きっとテロの収集などに忙しいのだろう。

その余計な待ち時間のせいで、俺は余計なことを言ってしまったのだろう。

月乃は何も言わない。

ふう、と息を吐いて俺は天井を見上げる。真っ白な蛍光灯と目があった。チカチカする。

机2つにパイプ椅子5個だけがある実に簡素な部屋である。

取調室のようなものだからそれは仕方ないか、と再び溜息をはく。

「ねえ」

いつものトーンで月乃が言う。

「な、なんだよ……」

「さっきの、どういう意味……?」

「どういうって、言葉通りの意味だけど……」

「そう」

落胆したのか歓喜したのかどちらともとれない声色で彼女はつぶやいた。

何だったのだろうか。俺の気持ちに気付いた、のか?

いやでも、そういうのは全てが終わってからーとか、問題が片付いたらーとかそんなときに自分の口から言いたいような気もする。

死亡フラグのようにも聞こえるけど。

あれこれと考えていると、取調室のドアが開かれて眞奈美さんが入ってきた。

「ごめんね、ちょっと今ゴタゴタしててね。お話を聞きたいんだけど、いいかな?」

「待たせておいて許可なんて取る必要があるんですか? どうせ帰さないつもりだったくせに」

速攻で月乃が噛みついた。その口ぶりに俺は驚き、そして少し恐怖した。

『世界最古』

あいつの言葉だ。

「つ、月乃。どうしたんだよ! いきなりそんな……」

「あつ……。ご、ごめんなさい」

月乃はすぐに謝った。まるで自分が無意識のうちで言ってしまったかのように。

「いや、いいのよ。精神的に疲れているんでしょうね。あれほど大きなテロだったものね……。その点桜参くんは強いわね」

眞奈美さんはパイプ椅子に腰かけながらそう言ってくる。手元の資料を何枚かパラパラとめくりつつ。

「拳銃、撃つたのね。いい判断だったけど当たらなかったよね」  
「なんで、知ってる？」

一瞬、眞奈美さんの眼光に恐ろしいものが潜んでいるかのような錯覚を覚えた。

「あのスーパードの監視カメラ、解析してもらっていたのよ。だからこそあなた達を救えたわけだし、敵も引き上げていったんじゃないかしら？ ごめんなさいね、でもこれ以上テロは起こさされたくないしね」

勘違いだったのか、彼女の瞳にはいつも通りの優しげな光が灯っていた。

なんだか、違和感を感じるのは今自分がテロの中心地から抜け出して敏感になっているからだろうか。

だけど、監視カメラで見えていたというのであれば、取り調べは必要だろうか？

現在の監視カメラ技術は正直言ってすごい。

画質の向上はもちろん。どれだけ拡大しようが解像度は低くならず、顔認知システムもある。例えば、監視カメラに指名手配犯が映ったとする。その時、監視カメラはすぐにその人の顔を認知して、警察や近くの無人警官オートロイドに通報するのだ。

それによって、この国で犯罪を犯して逃げ切れることはほぼない。次に、録音システム。

その場の状況を作り出す【音】を鮮明に録音するのだ。会話、効果音、その他に至るまでを全て録音する。

もちろん、音声認知システムが内蔵されている。

この以上から考えるに、あの状況下で起きたことは全て警察

眞奈美さんに筒抜けである。

それなのに何故、取り調べを行おうというのだろうか。

俺の考えが正しければ。いや、誰でもそう考えるかもしれない、この状況なら。あの異質な会話の後なら。

「結局、本題を言ってくれないと分かりませんよ。眞奈美さん」

俺は、手に汗を握っていた。

「じゃあ単刀直入に言うわね。 鵜川月乃さん、あなたに関することよ」

「テロの実行犯とも言われている彼が言っていたあの言葉、どういう意味なのかしら？」

愛玩<sup>アイシ</sup>は次のテロ実行地には親近感を覚えなかった。

それは『普通』とは違う人生を歩んできたからであって、そもそも知識など最初から詰め込まれていたから必要なかったのである。

それでも、憧れはあったかもしれない。  
平凡。

誰もが楽しそうに暮らす。仲間たちと過ごす。もしかしたら裏で苦しい思いをしている者もいるかもしれない。それでも憧れていたかもしれない。

それは一つの集合体、それは一つの社会、それは一つの………クニのようだった。

その答えにたどり着くのは実に簡単だった。

集合体、社会、クニの中で人間はどう動くのか。それを壊<sup>壊</sup>れない実験<sup>下</sup>台はシュミレーションとして活用したかったのかもしれない。

それとも、別の思惑があるのか。

でも、なんでもよかった。

彼のそばに居られるのであれば

。

「ちょっと、眞奈美さん！ あんな奴の言うことを信じているんですか！？」

月乃が何を言うのよりも早く、俺はそう口にしていた。

「信じているかどうかは、五分五分ね。 考えに至った要素としては、テロ実行犯の心情の変化、国の対応のしかた、あとは……………このことを国に報告した時の態度かしら」

淡々とそう告げていく眞奈美さん。 その声からは真剣さがうかがえたが、俺はそんなことは気にしなかった。

「あんなのはあいつのデタラメだ！ 月乃は月乃であって他の何でもない、世界最古がどうだとか録武ナナが誰だとか何だとかはどうでもいいだろ！」

机をたたいて立ち上がる。 何故みんな意味不明なことを言い始めるのか。 いつから月乃の存在はこんなにも曖昧にされるようになってしまったのか。

あの眞奈美さんでさえ半分は疑っているという。 こんなのはおかしい。

「落ち着いて、桜参君。 私だって別に彼女をどうこうしたいつもりはないのよ。 いえ……………今日話すというのは無理があったかしら。」

今日は帰っていいわよ、また後日お話を聞かせてもらえるかしら

？

「

その問いに、俺は素直には答えられなかった。

中心街を全て見渡せるほどの高層マンションの30階の一室に男はいた。

もうかかってくることのない携帯電話を握りしめながら映画のスク

リーンのような大きな窓からこの街を見渡す。

床には資料が散らばっており、男はいつも清潔に整えている髪を少し乱しながら呻いていた。

「くそっ……機動隊を導入してまだ捕えられないか……なんと言うことだ。それにアイツ、何故に録武ナナを知っている。アレは国のそして俺たちの始まりともいえる存在だぞ。俺が考えている以上に事態は最悪かもしれない……」

彼はドンツと窓をたたく。

静かな室内では音はよく響く。

「最悪の事態が起これば……この国の大半のnumberが機能しなくなるぞっ……」

男の呟きも大きく反響した。

昨日はなかなか寝付けなかった。だからこそ、朝の寝起きは最悪だった。

それでも決まって朝はやってくる。

いつも通りの日常がやってくる。

学校も通常運営しているらしい。

曰く『テロなんてどこで起こるか分からない、だったら危険度はどこでも一緒。であれば、一日を無駄にすることはない。学校を普通どおりに動かそう』

ということらしい。うちの校長の話だ。

制服に着替え、適当に朝食を口の中に押し込んでから家を出た。

マンションのエントランスには、いつも通りに月乃が立っていた。

「何？ その目は。まだ寝ぼけているんじゃないの？」

「無理、してないのか？」

「私が質問しているの」

「う……………。あんまり寝付けなかった、でもそれより月乃」

「私なら大丈夫だから」

そうきつぱりと言いつつ、彼女は踵を返した。

いつも通りの制服に身を包んで、いつも通りのツインテールで、いつも通りの態度で。

何も変わらないままで、居られるのだろうか。しかし月乃は、俺に何も話してくれない。

では、これでよかったのだろうか。

後は警察なり軍隊なりに任せて結果の収集を待てばいいのだろうか。

そのあとはどうなるのだろうか。

月乃に残ったしこりはどうなるのだろうか。

いやいや、俺がこんなことを考えてどうする。月乃に異常なんてない。だからこそ月乃は平然としていられるのだし、普段通りに登

校しようとしている。俺が奴の言葉を信じてしまっでござる。

そう、何も心配することなんてない。何も。

「早く来なさいよね。学校に遅れるわよ」

「お、おう……」

そしていつものように、月乃うしろについていく。

生徒は思ったより少なかった。学校が通常運営していようがお構いなしという状況だった。クラス構成人数の半分も来ていないのではないのだろうか。

やはり、不安なのだろう。

「おい亮！ 鵜川！ お前らテロに巻き込まれたってマジかつ」  
教室に着いてからの第一声がそれだった。

蓮だ。茶色に染めた髪を乱しつつ、俺たちに迫ってくる。月乃はうっとおしそうにその場から離れ

て自分の席に着く。俺は、蓮に肩を掴まれて動けなかった。

「いや、そんな大したことは無かったよ。怪我はなかったし」

「怪我は？ 他になんかあったのか」

どうして、こんなときにだけこいつは鋭いのだろうか。

今、多分言うべきことではない。それにアレはデタラメなのだから、気にすることなんてない。

だから俺は真実を語った。

「眞奈美さんが助けに来てくれた」

「つつつつぎけんっ！ ずるいぞ亮！」

「何がだっ、っーかお前はまた狙ったのか。この間簡単にあしらわれたばかりだろ？」

「まだ、まだだっ。まだ………終わらんよっ」

「悲しいけどこれ、現実だから」

「くっそおおおっ、図つたな！」

「まあ、何を？ とは問わないけどさ、もう先生が教壇に立ってるから」

「あー、まあ。後から話そうぜ」

そういうと蓮は先生にいやー今日はいいい天気ですなえうんたらかんだらと話し始めた。

どうやら注意をそらそうという目論見らしい。授業が嫌いなので適当な世間話で授業時間を削る。それが蓮流の勉強回避術らしい。俺はそれを苦笑しながら眺めつつ、席に着いたのだった。

日常の崩壊はすぐに訪れる。

とある旧都市の廃ビルの一角、そこで新たな生命が生まれる。いや造られた。

そいつはどこかで見たような銀髪とどこかで見たことのある女性的な顔、それに加えてもう一つどこかで見たような特徴を兼ね備えていた。

縫合の術は素晴らしいもので、もともと三体だったということも忘れてしまいうようなほど完璧だった。

ただ、精神状況………心情のコントロール、心の制御は上手くいっていないようで、おかしな言動におかしな行動をとっていた。

では、脳を破壊してプログラムで埋めようか。と考える。実行する彼

彼女は、いや、捉えようによってはどちらでもないかもしれない。造られた。

「さあて、座学の時間は終わりだア。実技の勉強へ行こうじゃねえか」

少年の呟きが廃ビルに響く。

他に2人、そこに居るはずなのだが反応を示さない。

なぜならこれからは、本格的に攻め入る。

休日ではなく、夜でもなく、昼時に攻め入る。アイツを回収し、一気にクニを叩く。

そこまでいってこの計画は終わるのだ。力がつくまで、知能が追いつくまで、仲間が集まるまで練りに練ってきた計画がもうじき始まり、そして終わる。

計画が終わるときはこのクニが終わるか、自分が終わるか。

後者はあり得ない。

憎しみだけを滾らせて生きてきたこの数年。腐った種族を根絶やしにすることだけを考えて生きてきた。

平和ボケした人間どもが俺たちを止められるはずがない。

ハッキリと見えない『裏』に使われている警察、機動隊は疑問の中間が続ける。戦場において余計な考えは身を滅ぼす。結局は何だったのか。使われるだけの人形には意味など与えられない。

それは、俺たちに対しても。numberを与えられなかったことと同意義である。

もう、終わりにしよう。

彼らは立ち上がり、最後の計画のために動きだす。

「なんか……おかしくないか？」

そう呟いたのは蓮だった。

今は昼休み。購買で二人して買った焼きそばパンをほおばっている時に蓮は呟いたのだ。

「何が？」

俺は紙パックの牛乳のストローを啜えつつ訊く。

「ほら、校門のところ……なんで第二門まで閉まってんの？」

うちの学校には門が第二段階に分かれて存在しており、よく見かけ

るような牢獄に近いような柵を模したものが第一門、隙間なく城門のような厚い門が第二門である。後者の門には電子ロックや何やらで色々よくわからなくて外からは開けられないようになっていたもののだが、本来あれは外に不審者や危険人物が徘徊している場合に生徒を守る形で使用されるのだ。

「第二門が閉まる時は必ず職員放送が入るはずなんだけどな……」  
蓮は外を眺めながら言う。

確かにそうだ。それに、不審人物が徘徊しているだなんてニュースでも聞いていない。

「もしかしてテロ対策かも？」

「なるほど、亮は鋭いな」。だから学校は通常運転なのな、確かにあれなら家より学校の方が安全率高そうだもんな」  
勝手に蓮は納得して頷いている。

しかし、俺は少しだけ違和感を覚えていた。

第二門のが完全に閉まるまでは多少の時間がかかるのだ。それは誰もが知っていることである。

それならば、何らかの理由で職員放送より先に門を閉めなければならなかったとして、閉め切るまでの間に放送することは可能ではなかったのだろうか。

ポーン、職員放送です。現在、不審人物が街を徘徊しているとのことですので第二門を閉めることとしました。生徒の皆さんは気にすることなくいつも通りをお願いします。放送を終了します

放送された。

今考えていたことだけに、神経質になってしまう。

門を閉めると実行した時間と今放送されたこの時間。その間の空白の時間は何だ？

いつもなら気にしないだろう。いつもなら。

あいつの言葉が何度も頭を過る。

月乃は……いる、たった今教室に入ってきたところだった。  
何か起きたと疑っておくに越したことは無い。とりあえず月乃の  
元へ

ぼーん、職違ほ

ガガッ、ブツ………はぁー

い、皆さんこんにちは。どうも始めまして、テロリストと申します。  
生徒の呼び出しを行います、録武ナナさん。ただちに職員室まで  
きてください。あ、他の学生さんは近くの教室に詰まっています。お  
さいねー。以後、廊下に影を見つけた場合には射殺しますので、お  
気をつけ下さいー。もう一度言いますが、録武ナナさん。ちゃ  
んと来て下さいね、私たちは同じ仲間です。乱暴な真似はしない  
のでご安心をー………ガガッ………

なんだ、今のは。

ワンテンポ遅れて生徒の悲鳴が上がる。みんながパニックに陥り、  
廊下に逃げ出すもの、おとなしく教室で震えるものと分かれる。

これは、非常に危険な状態だ。

「みんなっ！ 教室から出るなっ！」

叫ぶが、止まらない。

「待てっ、ちよっとお前らっ！」

蓮は素早く俺の言った言葉から意図を読み取って、逃げ出そうとす  
る生徒を止める。

月乃は、月乃は

すでに、この教室にはいなかった。



巢から勢いよく飛び立った小鳥は雨に打たれ、だんだん失速しやがては地面に落ちてしまう。

遅かったのだ。巢から出るタイミングが遅かった。雛鳥ではなく小鳥になってから飛んでしまったために力がつかなかったし、それに季節が追いついてしまっていた。

あるいは慎重になりすぎたのか。

飛んでいる最中は焦っていた。それでは上手く飛べるはずもない。

遅い。

全てにおいて遅かった。もう少し早く飛び立てば彼は大空へと羽ばたくことができただろう。

雨などに負けることなく、空を我がもの顔でどこまでも飛び立てただろうに。

彼は云う。

遅かった、と。

放送を終えた愛玩用<sup>アイシン</sup>が帰ってきた。ここは学校の全てを管理している中央制御処理室だ。

三階に位置するこの部屋は、廊下の一番突き当たりという最高のポジションだった。それゆえに計画が立てやすく、一番楽な方法で学校を襲えたのだ。

これならば、録武ナナも簡単に捕えられるだろう。彼女は間違い

なく動揺していた。俺のあの言葉を聞いた辺りからだ。多分だが、思い当たる節があったのだろう。たまに記憶が抜け落ちることがあるとか、自分とはまったく無関係な行動をすることがあるとか、そんな程度の小さな引っかけが動揺を大きくしたのだろう。俺自身も、発見した時は驚いた。それと同時にチャンスだとも思った。

同じ復讐を考える者ならば、協力者になり得るのではないかと。それに、一度使われた脳と言うところにも興味がある。クニが何らかの理由で使い回しをしているとするのなら、その解明にもなる。しかも、あえての世界最古と言うところがミソである。さまざまなデータが記憶してあるに違いない。

だから、協力してもらった後には解体ショーになるだろう。中身の分からないデータがたくさん詰まった解体ショーに。そう考えると、今からでもゾクゾクと興奮してしまう。

自分の本当の存在意義について記されているのではないだろうか。存在希薄クラリアの謎についてもあるのではないかと、知識欲が暴れだす。ともあれ、今は確保・クニの破壊が先決である。

駒を、動かそう。

「おい、愛玩用アイシ。継ぎ接ぎ人形を見周りに回せ」

「ええー。今帰ってきたばかりなんですけど。それにアイツ、気味が悪い」

「そりゃあ半分プログラム化された吐き気をもよおすほどのキモイ脳だからな。ほら、さつさと録武ナナも回収して来い」

「もう、人使い荒いんだから……。これが終わったらなんか買ってよね」

「買うも何も盗り放題だろうが。馬鹿」

「そうね。そうなっちゃうよね」

二人して鋭い笑みを浮かべる。感情制御リミッターはいまだにコンピュータに向かって何かを打ち込み、操作している。おそらく、学校のセキュリティロックのレベルを上げているのだろう。

そんな彼が、画面から目を離し無機質な目でこちらを見てくる。何もかもっていないその眼は、異常。俺たちと同じ境遇である限り、それは仕方のないことだ。

「なんだア」

「いや、なんでもない。……物語もそろそろ終盤だと思ってな」その言葉に壊れない実験台はさらに口角を吊り上げる。

「確かに……なア」

なんてことない。今回も俺たちの圧勝。姿を見せず、またもテロを成功させる。

クニを終わらせる。

このクニの築いてきた物語も、もう終盤だ。

パニックに陥った数名の生徒を蓮とともになだめた後、状況を確認することにした。

「亮……こりゃあまたテロがここで起きたって………何か」

「放送を聞く限りそうなんだと思う。それに奴らは多分、月乃を狙ってる」

「鵜川を……？　なんで？」

「分からないけど……分からないけど、多分そうなんだ」だって、あいつらが放送で言っていたから。『録武ナナ』という固有名詞を。

もうそれは月乃という固体を認めていないことと同意義である。

奴らは月乃を『録武ナナ』として捉えている。ハッキリとした理由も分からずに俺たちは今ここに居る。

何がどうなっているのか全く理解できずに、災禍の中で苦しんでいる。

では、その中心に居る月乃は？ どれほどの重みを背負っているのだろうか？

計り知れない。そんな中、月乃は居なくなった。職員室まで行ったのだ。

「俺は、月乃を探してくる。蓮は……ここに居てくれ」

「おいおい、何言ってるんだ亮！ 廊下に出たら射殺されるって言うてただろうが、どこに敵がどれだけいるかわからないんだぞ？」

「多分、月乃は職員室まで行ったはず。だから今は、人影を見つけてもすぐには発砲されないと思うんだ。……だから、今しか動けないだろ？」

「なんで月乃が職員室まで行く必要があるんだ？ 呼ばれていたのは確か……ロクムなんとかって奴だったろ？」

「そ、それは……」

今、話すべきだろうか。

混乱させてはしまわないだろうか。

いや、蓮は仲間だ。秘密にしておくべきじゃない、きっと力になつてくれる。

俺は、この間のテロ事件で起きたことを話した。

その間蓮はまれにみる真剣な顔で聞いていてくれた。

「そんなことが……。俺はよくわからないけどさ、鵜川は鵜川だろ。関係ないなら連れ戻しに行けばいい」

やはり蓮は、思った通りの仲間だった。

「そうだよな……」

「俺も行く」

「え？」

蓮は以前眞奈美さんから受け取った拳銃を取り出して見せた。

「なめんなよ、俺だって戦える。それに、俺たちは友達だもんな」  
二カツと歯を見せて笑って見せる蓮。それが今の俺にはとても心強かった。

と、その時。教室のドアが開かれた。

「いちおう私もいるからね、忘れちゃ嫌だよ」

そこにはいつもと変わらないピツシリとした雰囲気をもった生徒会長さんだった。

彼女は、この状況でもブレない。おびえるどころかむしろどっしりと構えている。

「今この学校に来ている生徒は体育館に全員避難させたよ。後はこのクラスだけってこと。さ、一旦体育館まで行こうよ、桜参さんに岩沢くん」

現に、この行動の早さだ。

姉妹そろって優秀なのだと思えば改めると感じるどころだった。

「とりあえず、体育館で作戦会議というふうよ、二人とも？」

俺は優秀な仲間にも恵まれていた。

テロ開始を宣言する放送を聞いた後、私はいつの間にか教室を抜け出して走っていた。

わけが分からなかった。あの放送で『録武ナナ』の名前が出た時、その感覚が離れない。怖かった。

まるで自分の名前を呼ばれた時と同じ感覚がしたのだ。

自分自身驚いていた。気にしていないと亮に言いつつも、心の底では怯えていた。

そして今、自分の中の何かが急激に大きくなったのが分かった。別の人格、というものだろうか。

思考がぐちゃぐちゃになり、思ってもいない行動をしたり。不思議なことを自分の意思と関係なしに考えてしまったりすることが、だんだん増えてきた。

今もそうだ。

走り出したのは怖かったから、とは言っているが実はなんで走り出したのかも理解できていない。

そう、身体が勝手に反応したような感じだった。怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

自分の中の何かが。いや、もう伏せても意味がない。

自分の中の『録武ナナ』が目覚めようとしているのが分かる。離れないと。

学校から離れて、逃げて、亮や他のみんなに迷惑をかけないようにしないと。

それならいっそ

ガクンツと彼女の頭が傾く。

まるで電源が落ちたかのように立ったまま動かなくなり、その場に静寂が訪れる。

再び顔を上げた彼女は、不思議そうな瞳で辺りを見渡す。

そして瞬く間にその顔を絶望・怒りの色に染める。しかし、目を瞑り考えるようにして腕を組むと、彼女は。

口角を吊り上げて笑った。



No.31: Switch (前書き)

テスト期間入りました；

テスト嫌だよテスト(、・・、)

体育館はいつもの全校集会のように混雑していることはなく、むしろ人が少なすぎて結構なスペースが出来るほどであった。やはり、今日登校してきている者が少ないのだと改めて実感させられる。

体育館の隅の方では、先生達が集まってなにやら話をしている。

聞くところによると、先生方は今朝、会議室でテロのことについて話し合っていたところに放送が流れ、状況を知ったのだという。その時にはとつくに職員室は占領されていたらしい。不幸中の幸いというところか、誰も怪我なく体育館に集まる事が出来たのだという。だからこそ、生徒会長と連携をとって生徒を集めることが出来たのだろう。

だがしかし、敵の人数は不明。さらに、録武ナナという生徒も不明ということでも混乱しているのだという。

とは言え、このままではいけないということで現在、話し合いをしている中なのだという。

「あつ……さ、桜参さん」

体育館の中を見渡していると、出入り口の方から少女が声をかけてきた。

少し癖のある髪に小動物系の瞳、酉種風見だった。

「酉種……来てたのか。大丈夫だったのか？」

「え、はい。あの……やっぱりこれって……」

「テロ、だと思っ」

「皆さんは、なんともありませんか……？」

酉種は俺を含め、全員に視線を合わせた。

「だいじょーぶだよ、風見くん。私はどうともない」

「俺は完璧だな！ なんなら腹筋しようか、腹筋！」

「いや、蓮はうるさいから黙ってて」

会長さん、蓮と、大事がないことを伝える。それに酉種は安堵した

ようにほうと息を吐き、それから口を一文字に引き締めてから、何かを言いだそうとする。

それでも思ったように言葉は出てこない。　　というか、言うべきか言わないべきかを迷っているようにも見える。

「どうしたんだ、西種。　　ここに来るまでに何かあったのか」  
どうやらそれは凶星だったらしく、一度目を見開いてからおるおるし始める。

「何があっただ、話してくれ」  
そう言っていると彼女は、小さな口を開いて言った。

「あ、あの……月乃さんが階段を上がっていくのが見えて、私声をかけたんですけど全然聞こえてなかったみたいで、走って行っちゃったんです。　　特別教室棟の会談だったんですけど……」

特別教室棟と言えば、三階には職員室がある。

月乃は、職員室に向かったのか？　　九分九厘そうだろう。では何故……。

自分が行けば、周りのみんなは被害に合わなくて済むから？

奴らの目的は月乃だ。　　だからこそ、彼女が自ら職員室に行くことでテロリストが歩きまわることを阻止した？　　月乃なら、そう考えるだろうか。

でも、そうかもしれない。

そうでないかもしれない。

分からない。

「亮、行くしかないでしょ」

そんなとき、蓮が肩を叩く。

「じゃ、生徒会長も動かないとねえー」

会長さんが笑いかけてくる。

「桜参さん……」

西種は心配そうに見つめてくる。

分からないことは考えても分からない、それがあまり頭の良くない自分ならなおさらだ。

だから、答えを見ないと理解できない。

分からない問題は、答えを確認しないと理解できない。

これも同じことだろうが！

なんで頭で考えようとすると、桜参亮。自分から動かないと、この

問題は解けない。

そもそもの定義からして曖昧なものだ、自分で積み上げていくしかな

ないだろう！

「そうだよ、何を考えてたんだろ……」

ようやく、顔を上げられる。

「月乃を迎えにいかないとな」

決心はついた。

奴らの言葉の呪縛から月乃を取り返して、戯言は消し去る。

月乃は月乃だ。

録武ナナなんて奴は知らない。

「全部、元に戻して日常を取り戻すんだ」

そう、決心はついた。

「へえ、録武ナナ。あんたがかあ……。確かにそんなところに製造番号刻まれてちゃあ目立つよね。見つけるのも簡単ってことか。」

すごい偶然だよー、この街に居たなんてさ」

職員室。

人は誰もおらず、まるで放課後かのように静けさが漂っていて愛玩用の声は反響していた。

その言葉に目の前の彼女は返事することなく、ただこちらを直視

し続けていた。今は、録武ナナなのだろう。壊れない実験台が言うには、この少女は人格を二つ共有しているらしい。一つは彼女自身。カーヌルブレインが初期化され、今までに作り上げられた人格、鵜川月乃のものだ。もう一つは元のカーヌルブレインの人格、私たちが求めている録武ナナだ。どうやら、壊れない実験台は彼女を使つて、最後の決戦に出るのだという。そう、クニとの決戦に。詳しいことは分からないが、どうにかして仲間を引き込めとのことだった。

「まあ、世間話はいいとして、あなた私たちとともにクニを潰しましょう？」

録武ナナ？

彼女はあえて遠回りはせず直球で訊ねた。

それは分かっていたから、録武ナナがどのような絶望で生きて死んだのか。

世界最古である。

仲間はいない。

自分と同じモノはいない。

そんな中で他種族に使われ、どのような気分だっただろうか。

自分ならば、殺意あるいは絶望が生まれていただろう。それとも両方か。

分かる。彼女は、クニを潰すために動くであろうと。

「ここは、私が無くなってから何年たった世界なのかしら？」

感情の起伏のない、冷めきった声でそう訊いてきた。

彼女の眼は、まだ私を射抜いている。

「100年は経っているわね。まあ、それは表ではそうなっているということだから詳しいことは分からない。ただ、確実に100年は経っている」

「そう、じゃあ、屑はまだ繁殖しているのでしょうかね」

「屑……？　そういうことになるわ」

彼女は人間のことを屑と呼んだ。

私たちもそう思う。ただ、彼女がその言葉を口にするごとく自体も嫌

がっているように聞こえた。

いや、実際に嫌悪感を抱いていた。

「それで？ あなた達は何をしようというの？」

「……このクニを潰すの。壊して毀してコワシテ、numberだけの世界にするの」

「ふうん……。じゃあ、私は何をすればいいの？」

「それは、先ほどの誘いに乗った、ということでもいいの？」

「そうね」

「じゃああなたにこれを渡しておくわ」

腰に携えていた一丁の拳銃を放り、彼女に渡す。

いくら世界最古だろうと、武器がなければただのnumberである。

それとも、他に何か力があるのだろうか。

「使い方は……流石に分かるよね。とりあえず、壊れない実験台ハートのところへ行きましょ」

そう言つて背を向けた時、明らかに雰囲気が変わった。

「いや……」

「はあ？」

振り向くと、そこには先ほどと姿形の変わらない彼女の姿。しかし、内面　　人格の方は変わっている。厄介なことになった、そう思い行動するよりも早く、彼女は職員室から出て駆けだしていつてしまう。

「なつ……待ちなさい！」

今走り回られると厄介だ。本当に厄介だ。

何故なら、あの継ぎ接ぎ野郎が歩き回っているからだ。

プログラムされた命令は、『校内を歩きまわり、廊下に出ている者がいれば発砲せよ』だ。

もし、偶然にも彼女がそいつに出会ったら。

折角見つけた作戦に重要な人物が欠けてしまう。それだけは避けたかった。

愛<sup>アイシ</sup>玩用は、舌打ちを一つしてから、彼女を探すために廊下を走り始めた。

No.32:多々他(前書き)

テスト終了) . . . (

更新率をいつも通り週一に戻します)

いくつもの立方体がそこに鎮座していた。

それらは等間隔に並べられているわけでもなく、積み上げられているわけでもなかった。

乱雑な配置。

よく見るとその立方体にはいくつもの線が入っていた。澄んだ色をした青。ライトブルーの線だった。

それが儚く光り、鼓動している。まるで血管のように光が流れている。

そこに男が一人居る。立方体の一つに腰を下ろしにやにやと微笑んでいる。その目は虚空を見つめて。

遅すぎた。

男は呟く。

小さな声で、しかし語りかけるように呟く。男の役目は、そういった呟きを残すことだった。

どのような感覚の上でそう呟くのかは男以外には分からない。ただ、必要なことだった。

そのひとつでも、重要なことには変わりはない。

頭の中をフル回転させる。彼は再び呟く。

そんなことが繰り返されているうちに、だんだんと時間が過ぎていく。それでも彼は動くことなく、鼓動する立方体の上で同じく行動を起こす。

そんなとき、少女が姿を見せる。

真っ白な穢れの無いワンピースに、同じく白く長い髪。整った顔立ちが神様が与えてくれたかのように美しく、そして何人たりとも触れることを許されないような白だった。

「また、視てるの……………?」

彼女がそう訊くと、男は目の焦点を戻した上ににやにや笑いを取りやめて彼女の方を向いた。

ぼさぼさの黒髪に加えて目の下にクマが出来ている。これが男のデフォルトである。

「正確には、視ていない。言うなれば思っていた。以上」

「それで、どうだった……………?」

彼女がか細い声でそう訊いた。

立方体のある部屋は広く、それでも彼女の声は反響した。

音は、この場所では声以外は発生しない。それを彼女たちは知っていた。

「少年は死んだ。だから、答えは右折。以上」

男は淡々とそう語った。これで方向性は再び定まったのだという。

「そう」

それに対する彼女の答えも淡白だった。結果を知っても、何も表情には出さなかった。

実際のところ、本当に何も思っていないのだろうか。

だって。

だって、そういう風にしないといけないから。

そうじゃないと、まともではないから。

誤差が発生するだろうから。

「ところで、記述者はどうした。以上」

唐突に男がそう訊いてきた。

「彼は今、外にいる……………」

「そうか、ならば伝える。方向性が決まってしまった、とな。以上」

「分かった……………」

彼女は一つ返事をして、その部屋から出ていった。

男は再び虚空を見つめ、またにやにや笑いを始めるのだった。

ああ、遅すぎた。

シャンデリア、座り心地のよいソファ、高級なワイン。その他最高と呼ばれるものはほとんどそろっていた。そんな中で男は苛立ちをつのらせていた。言うまでもなく、壊れない実験台によるテロのせいである。

ついにかかってこなかった携帯電話はゴツゴツした質感をもつ机の上に無造作に置かれていた。

男はグラスを傾け、ワインを口に含む。

どうしたものか、と男は考えている。

自分が作ってしまった玩具が今この街で暴れ回っているのだ。予想以上に知能を持ってしまったソレは、自分では止められないような位置まで上って行ってしまった。

ただ、本当に止められないのかというところでもない。おそらく、今までの電話でした会話から音声を解析し、number特有の超微弱な電波を感知するよう新たなモノを作り上げる。ただ、時間がかかる上に、この国の他の上層部の人間にばれてしまうかもしれない。そう、あいつらの存在が。

自分が行ってきたことは、犯罪行為である。

そして、犯罪を犯したことによって作られた犯罪品は製作者と同じように犯罪を犯す。

この絶ちきれない連鎖によって膨れ上がった負が、玩具を回収したと同時に自分に降りかかってくる。

部屋を見渡す。

今まで築き上げてきたこの生活を失うわけにはいかなかった。

どう対策を練ろうか

、と考え始めた時部屋に備え

付けてある電話が鳴った。

「私だ、どうした」

『匣縞はこしまさんに会わせる、と警視庁から錠越と名乗るものが今エントランスに来ているのですが』

「っ、仕方ない。ここへ呼べ」

『了解いたしました』

短い会話を打ち切つて、再び部屋には静寂が訪れる。

よりによって警視庁。よりによってこのタイミング。

もしかして、アレの情報がもう出回っているのか？ だとすると非常にまずい。

男に考える時間を与える暇もなく、部屋のドアがノックされる。来た。

錠越、と名乗つたその女性はとても若くそして警官には全く見えなかった。

しかし、裏を返せばその若さで警官であり、そしていち早く自分の元へたどり着いた。

「匣縞さん、まずはこれを見てもらえますか」

そう言うと彼女は封筒から数枚の写真を取り出した。

そこに鮮明に映っているのはまぎれもなく、自分の作った玩具、壊ハイトれない実験台だった。

冷静を装い、その写真を彼女に返してから言葉を紡いだ。

「この少年が、どうかしましたか？」

「ええ、不思議なんです。この少年、国のデータバンクに情報が一切ないんですよ」

スッ、と彼女と目が合う。

その目から、読み取れることはたくさんあった。不安、焦り、使命感。いくつかの感情の中で一番大きかったのはおそらく、疑惑だろう。

「それが、どうかしたんですか」

「おかしいじゃないですか。人間、numberともに生まれたらすぐに国のデータバンクに情報が行くんです。だからこそ消費食糧

の量だとか、人口増加率だとか、犯罪率だとか、キツチリとこれま  
でほとんど思うままに調整してこれたんです。でも、データバン  
クに情報がない人間や number がいたとしたら、今までのこと  
はただ、誤差を見落として喜んでいただけじゃないんですか。……  
…言いたいのはそういうことではないんです。アレは、何なん  
ですか？」

ド直球に質問を投げかけてくる彼女に関心すらした。  
確かに彼女の言うとおりである。全ての情報を網羅したうえで厳密  
な計算を経てそれやっとな成果が出る。これを人類を生きながらえ  
させるために用いるのならば、いや、支配するために用いるのであ  
れば、厳密な結果を要するのだ。誤差は認められない。何故なら命  
にかかわる問題だから。  
だが、それがどうした。

100年前にでも人間は生きていられたではないか。食糧危機に  
陥ろうが、こうして新たな対策を練っているのではないか。  
いまさら生きるためのパーツが壊れたところで、何を怯えている？  
新しく作りかえればいいだけの話ではないのか。

人間はみな、完璧を求める。  
だが、完璧など存在しない。  
なんだって老朽化し、崩れ去っていくものなのだ。  
データバンクからの計算結果を完璧として、それにミスが生じるだ  
けで大慌て、だ。

イレギュラーなんてものは、どこにでも存在する。  
この、自分のように。

「何、とは……？　アレはただの玩具ですよ」

「っ……。アレは、まともじゃなかった。　匣縞さん、あなたはな  
んてモノを作ったんですか！」

「やっぱり分かっていましたのですか。　私が関与していることについ  
て。　まあ、確かに間違っていますし、だからこそここに来たの  
ですよね」

「体内から発信される電波もおかしかった。微弱すぎることに加えて国で作られているnumberと全く波長が違う。それに内部機構と、……銃弾を跳ね返すこと」

「折角だし、教えておきましょう。壊れない実験台は、私が数年前に作った最高傑作です。名前の通り、実験用モルモット……いえ、実験用numberと言うべきですかね。私欲のために一から作りました。ですからオリジナルですし、製品番号だって存在していません」

男は広い部屋の中を歩き回りながら話す。

「ある日、研究を行っていた研究チームがソレによって潰されましたね。研究所も滅茶苦茶にされたものですから消息不明になってしまったんですよ。ただ、テロの始まる最近になって電話がかかってくるようになりましてね。脅しのようなものでした」

男はスクリーン大の窓の外を眺めながら、目を細めて。

「まさか、自分の玩具がここまで行くとは正直思ってもいませんでした」

「そのnumberのスペックは？」

「ふう……。カーブルブレインからの電気信号制御によって特殊性の皮膚の硬化が可能です。だから彼は拳銃に撃ち抜かれなし、ナイフも刺さらない。言うなれば岩石の塊みたいなのですかね」「対処法は？」

「今のところはありません」

「今のところは？」

「そうですね。あなたがこの事実を知っている間はありませんね！」ズガンッ！

男は素早くスーツの内側から拳銃を引きぬくと、錠越警官に向けて構えた。

だが、

錠越警官の手の内にはもうすでに拳銃が握られていて。

先端の発射口からはすでに煙が上がっていて。

「な……………」

男の太股は撃ち抜かれていた。

「とりあえず、残念でした！。私のこと、見くびってたんでしょ？」

先ほどとは明らかに違う口調で彼女は話す。

「知ってた。匣縞さんのところに来る前に、他の関係者のところを回っていたから」

床でのたうちまわる男を目で追いながら、近づいていく。

「今、ピンチなんだ。それはすごいヤバいほどに。私の妹の友達もね、大変なんだ。……対策法、あるんでしょ？」

「あ、あるっ！」

「それも知ってる。でも、警察の技量じゃ出来ないんだよね。だから、さ」

彼女は満面の笑みを浮かべて、さらに男の撃たれた部位を踏みつけて、こういった。

「さつさと電波混線装置、作ってね」



No. 33 : 嫌悪感増大(前書き)

頭痛いねえ ( - 川 )

あの花終わってしまったねえ。 。 。 ( ) 。 / ! 。 ( ) 。 .

## No. 33 : 嫌悪感増大

体育館から出て月乃を探すことに決めた俺、蓮、生徒会長さんの三人は団体行動で慎重に探すという作戦ではなく、あえて三人バラバラに別れて速攻で探すといった短期決戦型の作戦をとった。

理由は三つ。

- 1、テロリストに見つかった場合、固まって行動していた時に全滅する可能性がある。
  - 2、時間がかかればかかるほどテロリストとの接触の可能性が上がる。
  - 3、一人の方が動きやすく、機転をきかせられる。
- 以上だ。

このような作戦を考えた生徒会長は、やはり何と云うかいつも通りに堂々としていた。

というより、この作戦は『探す』がメインではなく、『連れ戻す』ということにおいて重点を置いていると思う。それは西種が言う目撃情報から感じ取ったことだ。蓮も会長さんもそれは分かっていることなのだろう。なんせ、放送がかかった時にはすでに教室に居なかったのだ。とつくに職員室に着いているはずだし、テロリストとも接触しているだろう。

だから連れ戻す、といった表現がこの状況には適しているのだ。

「先生方が言っていたが、どうやら若い教職員を連れて職員室まで偵察しに行くようだよ」

「そんな危険なことを……………?」

「危険って、桜参くん。 私たちも同じようなことをしようとしているんだよ? いや、たぶんそれよりもレベルの高いことをしようとしている……………。 言っている意味、分かるよね?」

「あ……………」

つまりは。

この状況下において大人も子供も関係なく、それでいて銃を持っている自分たちはアドバンテージがあるとは思ってはいけないのだ。

度重なる事件のせいで感覚がマヒしているのか、自分が今から行うことに違和感を覚えないでいる。それはとても恐ろしいことだろう。だから、会長さんはそれを伝えようとしたのだろう。

そして、先生方とは別行動となる。

「じゃ、先生たちよりも先に出るよ。武運を祈るよ二人とも」  
突っ込み所を残しつつ会長さんは体育館から出ていった。蓮は笑顔を浮かべながら会長さんを見送っていたが、しばらくすると真剣な顔つきになり、俺も行くよと体育館から出ていった。

「あ、あの………」

か細い声が後方から聞こえてきた。振り向くとそこには西種風見の姿があった。

「どっした？」

「き、気をつけて下さいね……。そして、無事に帰ってきてくださいっ。……友との約束です」

その言葉に自分の顔がゆるんでいくのが分かった。そして同じように言葉を返す。

「ああ、約束だ」

一瞬で戦場と化した校舎に向かって足を進めた。

正直、恐れが無いかと聞かれたら即答できる自信は無かった。

それでも足を動かして、慎重かつ迅速に行動することが大切だった。思えば、これは自分の姉による影響かもしれないと思った。昔から姉の真似をし、背中を追っていた自分はそれなりに同じような道をたどった。しかし、道中の微々たる部分は超えられない、クリ

アできなかった。たどつてきた道が同じでも、一つ一つをとって見ると差というものが見えてくる。

その部分が、自分を少しずつ不安定にしてきた。しかし、その分努力するきっかけとなった。自分は結局どうなりたかったのか。姉の分身？ そう考えたころもあつたかもしれない。でも今は違つた。

姉とは別系統の人間であり、互いを補う要素となること。それが目標になつていた。

そもそも、人と言うものは交われないし同一化することも出来ない。それならば、『個人』を伸ばし極めるしかない。それが極められた時、模倣よりも価値のあるものになり得ると信じている。

今回のこの行動を提案したのも、姉が外で何かしらの準備をしているであろうという予想をもつてのことだ。だから、それまでに面倒事や危険分子は取り除けるだけ出来る範囲でクリアしていく。

今現在の課題はこれだ。

鵜川月乃が今どこに誰といるか。それがこの作戦の鍵になってくるのだ。

誰と、の部分が一番重要であり、テロリスト集団となのかテロリスト何人かとなのか一人でなのか。

もちろん、一人であることが一番いいに決まっている。アクションをそこで起こす必要はない。

ただ、可能性は低い。

だから

ドッドドド、と大人数が階段を駆け上がる音が真守の耳に届いた。

廊下の曲がり角に身を隠し、その様子を窺う。どうやらその集団は先生方だったようで、テロリストではなかった。

しかし。

「おい、お前！」

一人の若い男教師が声を上げた。その目線の先には薄い赤のかかった髪をした少女がいた。この場には似つかわしくない胸元にフリル

をあしらったワンピースに身を包んだ少女だった。

そしてもう一つ、不自然な場所があった。

右手。彼女の右手にはその容姿と服装には交わりのない不格好な拳銃が握られていた。

「て、テロリストだっ！」

男性教師は摺り足で後退し、少女から離れた。しかし、それに対して少女の対応は全くおかしなものだった。

怯え。一言で表すならそのような表現が適切だろう。

男性教師を見て、声を聞いた瞬間だった。いや、男性教師の張り上げた声を聞いた瞬間だったか。

華奢な肩をガクガクと震わせて、目に少しの涙を滲ませていた。

おかしい、と眞守は思った。テロリストに間違いはない、しかし演技にも見えない。

本当に怯えている？

おなじようなことを考えたのか、若い男教師が2、3人前へ出た。

「その右手にあるものを捨ててこっちへ来るんだ。悪いようにはしない、その前に君はテロリストなのかい？」

そう問いかけるが、少女は震えたまま動こうとしない。あの震えでは銃を発砲したとしても、到底弾丸が当たることはないだろう。それを確信したのか、男性教師は声音を緩めて。

「脅されているのか？ 大丈夫だよ、君が何かを理由に脅されて仲間まにされているのであれば、僕たちは危害を加えない。それに保護だつてしてあげる。だから、ほら」

一步步み寄る。しかし少女はその行動に対して一歩後ろに後ずさり、首を振る。

狂ったかのように首を左右に振る。髪が乱れるのも気にせずに、視界がぶれることも気にせずに。

胸元を押え、気持ち悪さを押しとどめるように歯を食いしばっていた。

「名嶋先生。あの子大丈夫なんですか？ 何とも言えないんです



何発か銃声が響き、叫び声上がる。

「なん……、これ、血。ぐあああつ！」

ひとり、ふたり、さんにん と悲鳴の数が増えていく。 そんなことには構わず少女は発砲を続ける。

たまらず眞守は廊下の角から姿を現し、拳銃を構える。

「やめなさい！」

虚を突かれた少女の行動は止まり、撃たれた教師たちは無事だった残った教師たちに保護された。

「錠越君、それは……」

「いいから先生方は行ってください。ここは私が引き受けます」

「そんなことは無茶だ！ 彼女はテロリストの一員だった。今ここで分かったらどう！ 危険すぎる！」

「では、先生方が何とかして下さるんですか？ 武器を所持していない先生方が。 出来ることを最優先でやってください。 倒れた

先生方の手当て、です」

「くっ……。 10分だ。 先生は10分で戻ってくる。 それまで……」

「引き受けますよ、学校内での出来事は生徒会長が治めないといけませんしね」

そういうと先生方は苦い顔をしながら去っていった。

床にはいくらか鮮血が飛び散っており、学校内の治安は最悪だった。これはやはり、生徒会長の仕事だろう。

「こんにちは、テロリストさん。 さっきの放送はあなたのものよね。 無断で放送するのって禁止されているの、まずは私に許可を取らないとね」

と、そんな眞守の言葉に少女……いや、先ほどは遠くから見ていたから分からなかったが、同年代のようだ、彼女はいつもの調子を取り戻したかのように言葉を返してきた。

「そんなものは知らないわ。 そんなことより私は逃げた録武ナナを追う途中だったの、邪魔するなら殺すわ」  
それに対して。

「そう、そっちがその気なら私も本気になっていいのよね。」

彼女たちは交差する。

No.33：嫌悪感増大（後書き）

最近、この小説の方向性を見失いそうだw

No. 34 : 無機質現象 (前書き)

ふい。

だいがクライマックスってことで；

本当のことをいうと、嫉妬していたかもしれない。

いや、完全に100%嫉妬というわけではなく、少なくとも一割方は嫉妬成分が含まれていたかもしれない。そんなことをいまさらいつたって仕方のないことなのだが。

幼馴染、そういうカテゴリーに分類されるのかどうか自分の生きてきて環境の中では分からない。

家族、というカテゴリーの方がぴったり合うという奴もいれば幼馴染なんじゃね？ という奴もいるだろう。

やってしまったこと、それはもう取り消すことはできない。だからこそ誰もが苦悩し、乗り越えて生きていくのだとわかってはいるのだけれども、なかなか足が進まないのは何故なのだろうか。

嫉妬。最初にそうは言ったが、本当にそうなのだろうか。ここで矛盾が生じているが、そんなことはどうだっていい。だって俺はバカだから。

近くに居るのが自分ではなく彼。人付き合いがよく、色んな事に気が回る。混乱した時はウジウジ悩んだりするが、それでも心の芯はしっかりと折れるようなそぶりも決して見せない。決断を下し、それに沿って信じて進む彼の強さに惹かれた。そう言われればそこまでだ。

実際、自分だって敵わないと分かっている。すごくいい奴で、ますますくな奴。そんな表現しかできないが、伝わるだろう。

では、俺はどうだったのか。昔のことは……いい。ただの過去になってしまったものはどうしようもない。だから、今。

一番最初に見つけたい、と思う心が存在すると同時に見つけたくないという心が存在している。

矛盾だ。そしてバカだから答えだって分からない。どちらが本当

なのか、という答えが。

もしくは、そんなものは存在してなくて。やっぱり結論はいつものわかんねえ。

どうしたらいいか分からないから、とりあえず誰もが喜ぶであろう策に縋る。

それは滑稽なことだろうか。でも、縋ったっていいと思う。だって、道るべき見え見つけられないバカなのだから。

バカはバカなりに、がんばっているのだから。

廊下をなるべく音を立てないように小走りで進んでいると、化学実験室の扉の曇りガラス部分に人影が映っているのを見つけた。

テロリスト？ それとも鵜川？ それとも、別の誰かか。

その影の主は何やら慌てているようで、すぐに曇りガラスの中から影は消えた。

正体を確認しようと、慎重に化学実験室の扉を開ける。

水道の付いた固定机がいくつも並んでいる。実験器具の揃えられた棚の横を過ぎ、薬品置き場へと続く扉の前に立つ。拳銃を構えるゆっくりとドアを開けると、そこには布がはためいていた。

「カーテン？」

開け放った窓から風が吹き込み、太陽光を遮る黒いカーテンが靡いていたのだ。

そこで大事なことに気が付く。

「窓が開いている……」ということは何かがいた。それはテロリストじゃない？」

逃げた、という表現が当てはまるのならそうなのだろう。

学校の生徒か、鵜川か。俺が現れたことよって、テロリストと勘違いして逃げたのかもしれない。

窓の外はベランダがある。しかし、ここは三階であり化学実験室のベランダはどこにも通じていない。

飛び降りたのかと下をのぞき見るがベランダの下はコンクリート。

こんなところから飛び降りたとしたら足を痛めるはずだ。

「分かんねえ」

つまるところ、分かったことは分からないということだけだった。

結局、俺はどうしたかったのか。

月乃を見つけてから、それから？

第一なんで月乃が消えたのか、もしかしたら予兆はあったのかもしれない。それに俺は気付けなかった。

一番近くに居て、それでいて気がつかなかったとなれば俺の目は腐っているのかもしれない。

信念や理由がごちゃごちゃしていて、よく分からなかった。今の足を動かしているのは、月乃を見つけれればそれでいいという、とりあえず見つけた後に考えればいいやという曖昧な考えがあるからだった。

だって、分からなかったから。

現状を把握できていない上にこの状態だった。月乃を見つけても俺は声をかけられるのだろうか。

一階を見回っていた俺は、中庭を横切る影を目で捉えた。

「なんだ？」

窓を開けて身を乗り出して外に顔を出してみるが、その影はもういなくなっていた。

月乃……では無いと思う。彼女であれば、靡く金髪が絶対に目に入るはずだから。

では、テロリストだろうか？

この線は無いと思う。校舎内を出る必要が無いからだ。もし、見回りをするだとか月乃を探すだとかしているのであれば、校内を

探るだろうから。

この学校は今、閉鎖空間となっている。校門は閉じられ、学校の敷地内から出ることはできない。

そして、その敷地内の90%を占めるのは学校という建物。であれば、外には出なくてもよい。

必要があるとすれば、何か別の思惑がはたらいっている時だ。

ただの学生かもしれない。西種だって後から体育館に避難してきただけだし、登校人数の疎らな今日は全生徒が何人なのかもわからない。それゆえに全員を体育館に避難させたと言いきれないのである。

どう動くべきか。

その影の主を追うべきなのか、このまま月乃を探すのか。もちろん月乃を探すアテはない。

影を追いつつ、月乃も探す。それがいいのではないだろうか。その影が生徒だったら体育館に行くよう勧める。そしてその生徒の危険は回避できる。その影がテロリストだった場合、もしかしたら月乃につながっているかもしれない。

どちらに転んでも良い展開となるよう思案してみた。しかし、第3の想像を超えた展開だとしよう。

その時はどうなる………？

考えていてもはじまらない。

とりあえず、影の行った方向へと向かうべく廊下の窓から外へと飛び越えた。

その様子を歪んだ顔の継ぎ接ぎ人形が眺めていた。

三階に位置する中央制御処理室にその少年は居た。右目には眼帯、ごく自然な流れでダメージジーンズへと変化したジーパンに黒一色

の飾り気のないTシャツ。それが彼を体現していた。

「まったく、マダ捕まえられないのかよ。愛玩用は何を手こずつてやがんだア」

「おそらく人間と鉢合わせがあつたのだと。それよりも、客人だぞ壊れない実験台」

感情制御が抑揚のない声でそう告げた。眼帯の彼は驚くよりも先に後ろを振り向き、その表情を固まらせた。

「存在希薄………てめエ、いつの間に」

そこには白を基調としたワンピースを身にまとつた少女が立っていた。それはとても悲しそうな顔で、我が子の絶望をそばで眺める母のように。慈愛とは違つた何かを彷彿とさせる表情だつた。

「もう、無理なの」

「何がだア」

わけがわからずに壊れない実験台は訊いていた。

彼女は何かを隠していた。

何故だかいつもは分からないその存在希薄の考えていることが今は分かるような気がした。

「……………」

「何言つてやがんだお前。それより感情規制。何故こいつの存在に気がついた？」

後ろを振り返る。感情規制は背を向けたままコンピュータに向かつて何かを打ち込んでいる。そしてそのまま言った。

「何故、ですか。それは、分かつたからとしか答えようがないな」

「ああ？」

「あなたが敏感に人の気配を察するのと同じことですよ。察したから気付いた。それだけです」

こいつも何かを隠している。そう思えた。

計画終盤に入ってから、なぜこつちも障害が立ちはだかる？

何かが俺の行動を阻止しようとしてもしているのか。

「はーど。あなたにはもう会えない。さよなら」

少女は儂げに言う。

「何だア、死ぬってのかお前」  
ただ、少女は告げる。

「ばいばい」

眼帯の彼は、胸の内に怒りがこみ上げてくるのを感じていた。

何だ、何だこれは。

意味のわからない不安にかられる。存在<sup>クリア</sup>希薄という存在が、危険だと本能が告げる。

再び存在<sup>クリア</sup>希薄を視界に入れようとしたとき、彼女はもうそこにはいなかった。

「どこ行きやがった………?」

結局、最後まで理解できない。

やはり、このクニをつぶしてデータバンクを漁るしかない。

自分の存在意義と、彼女の存在意義を知るために。

そして、腐った種族を根絶やすために。

そんな彼の様子を、ただ静かに捉える無機質な目があった。

No.35・資料と対価（前書き）

近々新作を発表するかもしれません！

みなさま、楽しみにしていてくださいね） ・ ・ （

彼女は夕川町西の高層ビル街の下道道路上を運転していた。

匣編の会社からいくらか資料を貸し出させてもらった。

その中でもやはり、録武ナナという人物名が上がっていた。number 開発において成功例の第一体目。要するに、世界最初のnumberなのだ。

だが、それがどうしてテロリストたちに必要なのか。それには驚くべき真実が隠されていた。

時にnumberはどうして自己嫌悪感に襲われないのか分かるだろうか。彼、彼女たちは自分が作られた存在だと理解している。まずそこに疑問点がある。何故、そのようなことを知らされているのか。身体のどこかに製造番号コトが存在するから？ では、製造番号コトの意味とは？

個体数を確認するためにつけられている製造番号コト。その必要性は十分に理解できる。それ一つで彼、彼女らのことについての情報がすぐに手に入るからだ。

これで、numberに知らされているといった疑問はかき消される。少なくとも表上では。

では、自己嫌悪感について。

作られた存在だと教えられ、自暴自棄になった者がいるといった例はいまだかつて報告されていない。

それに、進んでnumberから何か事件を起こしたということもない。一見numberだけが関連していると思われていた事件も全て裏にはヒトがいた。

人間と同じように作られたにもかかわらず、悪意を持って事件を起こす行動を見せないのは何故なのだろうか。悪意と言う感情が存在しないように作られたから？ いや、違う。脳は一部カーネルブレインだが、他はれっきとした人間の脳である。それは人の細胞から

作られているのだからそうだろう。

numberの機械率はおおよそ10%、残りの九割は生きた細胞のため、ほとんど人間と言ってもおかしくないのである。

なので、悪意だって存在するし、嫉妬や他の感情も抱くように出来ている。

それでいて事件を一件も起こさない理由。全て録武ナナが関係していた。

録武ナナは、numberの抑止力となる中心であったのだ。

彼女から放たれる微弱な電波は、他のnumberへと伝わり、そのnumberからさらに他のnumberへとだんだんその電波が拡散していくのである。

その電波の効果は、悪意の消却。

人間に対しての不満、怒り、嫉妬など、それらの感情を消し去るのだ。

正確には全て消すわけではない。日常に支障のない程度に、行動を起こすか起こさないかの境目あたりまで感情を押えさせるのだ。

だから、録武ナナは悪意を操作できるリモコンだと言ってもいい。

テロリストたちはそれを利用し、国家転覆を企んでいるのだろう。持つべき技術で電波内容を変えることだってできるだろう。録武ナナの電波を受け取っていない、いや届かないようにしている彼らならたやすいことだろう。

彼らには電波が届かない。ゆえに、悪意が蔓延ったのだ。

だがこれで、テロリストの目的が見えた。学校占領に至るまでの経緯も分かった。

だがそれと一緒に、この国の裏まで彼女は知ってしまった。

そう、ただの警察官にすぎない錠越眞奈美は知ってしまったのである。

一方、その頃彼女の妹は戦っていた。

その姿には一切似合わない拳銃を手に、校内を走り回って戦っていた。

「当たらないよ、そんな乱射してたら」

廊下を走りつつ、彼女は振り向いて言う。後ろからは、薄い赤がかつた髪 of 少女が追いかけてきている。距離は30メートルほど開いている。

「下手な鉄砲数撃ちや当たるって言うでしょ！」

そんなことを口走りながらも発砲する。だがそれは、眞守には当たらない。

少女ほどの細い腕では、まともに拳銃を打てない。ましてや走りながらなのだ、先ほどから弾丸は壁や天井などに穴をあけている。

少女は一つ舌打ちをし、拳銃を投げ捨てた。どうやら弾が無くなったらしい。

これを好機と思い、眞守は立ち止って拳銃を抜き構える。

「動くなっ！」

だが、少女は驚くべき速さで迫ってきていて眞守は引き金を引く余裕がなかった。

どっ、と掌底を鳩尾に受け、後ろに飛ばされる。

廊下を転がって距離をとるが、吐き気が収まらない。モロに受けたようだった。

「あまり舐めてもらってちゃ困るんだよね。年齢はおんなじだけ

どき、ただの学生とは違ってこっちは本職なの」

どこからかナイフを取り出し、手で弄ぶ少女。

近づいてくる恐怖に耐えながらも、必死で呼吸を整える。余裕を見せている今がチャンスだった。

この瞬間を逃せば次はないだろう。

ゆっくりと近づいてくる少女、眞守の手には拳銃が握られている。

「へ、へえ……あなた。悲しいわね」



できてもどうしても眞守には撃てなかった。

少女が涙を流していることに自分自身気付いていなかったからだ。簡単に言くと、同情してしまった。

眞守は彼女のことを何も知らない。それでいて、同情してしまったのだ。

彼女が言うように、いまさらどうにもならないだろう。ましてや赤の他人の自分がどう動いたところで。

それが悲しかった。

個人には個人なりの目標があつて、悩みがあつて、周りと折り合いをつけながら生きていくのだ。

そんな悩みだらけだった彼女がやつとつかんだ目標。平和な私たちにとっては逆のベクトルの話だが、彼女はそれを遂げようとしていた。

自分を助け出してくれた『彼』とやりに。

もし。

もし本当に、彼女が普通に生きていたとしたら。

私は。

「分けわかんないよ……………」

「何がぁ？……………もつ、疲れた。あんた殺して録武ナナ探しに行くからさ、動かないで」

少女は頬に涙の跡を残したまま歩み寄ってくる。

少女の生きる糧の目標を潰すのは、錠越眞守。自分だった。

だから、一発は受け入れよう。

眞守との距離が残り数歩になったところで、少女は加速した。

ナイフを低く構え、突進するように。

ヒュツと空を裂く音が聞こえた後、少女はナイフを逆手に持ちかえて眞守の心臓を狙った。

その時、眞守は身体を少しずらしただけで、ナイフを避けはしなかった。

「なっ

」

グシャ、と肩にナイフの突き刺さる感覚。

「なんで、避けなかった……？」

「一発は一発っ……。これで、文句なしねっ……。くっ」

そのまま両腕を突き出し、その手の中心にある拳銃の引き金を引いた。

少女の額に弾丸が吸い込まれていった。

残るは、静寂。





窓のから外へ出て、あれこれと探し回っているうちに体育館の裏に出た。

体育館からはざわめきが多々聞こえてきて、小さなパニックが起きている状態だった。

それはそうだと思う。いくら避難したって、学校の内部にテロリストがいるのだから。それに加えてあの放送以後、情報が一切入ってこないのだ。明確ではないものに恐怖を覚える、それは誰もが持つような感情だと思う。

例えば、幽霊。

科学的に証明されていない存在。しかし、目撃例がいくつもある。それは曖昧なもので、数学のようなキツチリとした枠には当てはまらない。

存在しているのか存在していないのか、どっちつかずのままに放置されてきたものに対して恐怖感を抱く。

果たしてそこにいるのかどうかも分からないのに。

それと同じように、自分の置かれている状況やこれから何が起こるか分からないと言った不正確さなど、そんなものにみんな怯えているのだろう。

自分自身もそう。

もし、月乃がもう敵の手中に落ちていたら？

もし、録武ナナという存在があつたとして月乃が否定されたら？

色々な『もし』が頭の中を回って、不安をかきたてるのだ。

嫌な方向へと考えないために動く。

そんなとき、彼女を見つけた。

体育館裏を抜け、焼却炉を横切つて閑散とした部室棟にやってきた。平常時は運動部の人たちでにぎわっているが、今はまるでスイッチが切り替わつたように静かだ。

その部室棟の二階の窓に、金髪の彼女の姿を捉えたのだ。

「月乃！」

彼女に声は届かない。普通に考えれば当たり前のことだったが、俺は焦っていた。

近くの非常入口から校舎に入り、二階まで駆け上がる。

その足音に気がついたのか、月乃がこちらを振り向いた。

「亮っ……………！」

いつもは気丈に振舞っているその顔が、不安に揺れていた。

そして何かを告げようと、口を開く。

「私……………私、ね。録武ナナ、だったよ」

彼女の悲痛な告白が、俺の胸を抉った。

予想していたこと、最悪の事態として一番に取り上げられていたことが起きてしまっていた。

裏から狙われていた『理由』が証明され、それと同時に追われる存在となった。もちろんこれは表にも害が及ぶであろう。カーヌルブレインの使い回しとなれば、月乃は回収されてしまう。

おそらく解剖され、月乃の存在は戻ってきたとしても記憶の中の、精神面での月乃は戻ってこれなくなる。要するに、記憶喪失状態になるのである。

前代未聞の開発が施された月乃が注目の的にならないわけがないだろう。

「……………テロリストたちが、言ったのか？」

「ううん。気付いちやっただの、自分で」

「気付いた？」

「そう。たまにね、あったの。自分でも思ってもいない行動しちやったり、記憶が曖昧になったり、体験したことがないはずの記憶があったり……………。最初は勘違いとか、夢のせいだとか思ってたんだけどね、違ったよ。今日ね、ハッキリと意識が切り替わるのが分かったの」

それは、どういうことだ？

月乃は何を言っている？

「私は映画館のスクリーンに映し出されている私視点の映画を見ているだけの状態になったの。その間にも彼女は私の意識とは関係なく動くし、言葉を話すの。私は見ていることしかできなくて、とても怖かった。そして、彼女の感情が流れ込んでくるの。真っ黒な世界に飲み込まれそうになるくらいに彼女の感情は冷たくて、寂しかったの」

とても信じられない話。だが、これが実際に起きていることなのだろう。

録武ナナ、彼女を月乃の『何』と表現すればいいのだろうか。前世とはまた違う。別人格とも違う。彼女は昔に存在していて、現代よみがえったようなものだ。憑依した霊。そんな捉え方はどうだろうか。

それにしても、どうして月乃を押えこんで彼女が出てこられるのだろうか。

元のカーナルブレインが彼女のものだとしても、月乃のものでもあったはずなのだ。

考えていても分からない。とりあえずは、体育館まで逃げよう。

「月乃……。もう大丈夫、だよ。体育館にみんな集まっているんだ、そこまで逃げよう」

「でも、私っ。録武ナナなんだよ……。いつ変わるか分からないんだよ？ みんなを巻き込めないよ……。亮だっつて」

「じゃあ、どうするって言っただよ」

「そんなの分からないよ！」

月乃はそう叫んでから、俺の胸に飛び込んできた。

「分からないよ……。怖い、怖い、私じゃない私が誰かを傷つけるかもしれないから。彼女の心を知ってるの。人間を嫌ってる。それだけじゃなかった。今の現状を知って、人間と一緒に普通の顔して暮らしているnumberにも怒りを抱いている。……。そんな状況でみんなのところに行けるわけないよ」

震えていた。

月乃は、一人で録武ナナという存在を背負っているわけだ。それは誰も肩代わりは出来ない。

月乃の中だからこそ彼女は存在し、そして止められない。いつ出てくるのかもわからない。

鍵のかかかっていない気まぐれな猛獣の檻の見張り役のようなものだ。どうすることもできない。彼女では。

彼女、一人では。

「肩代わりは出来なくてもさ、支えることなら出来るだろ」

「え……？」

「一人で抱え込もうとするな、俺は迷惑だなんて思っていない。

それに、録武ナナが出てきたって俺は止めて見せる。身体は月乃で、心だけが録武ナナなんだろ？　じゃあ、いつものことだと思えばいいじゃないか。そうだろ？」

俺は、ちゃんと笑えただろうか。

「でも、でもっ……」

「でもじゃない。俺は、月乃を助けたいと思っっているんだ。月乃の力になりたいんだ。月乃だって助けを求めているんじゃないのか？

自分の中には録武ナナがいるからってそれが何だよ、言い訳を盾にして生きていくのはもう止めにしないか、それは自分が一番傷ついている。そうじゃない？」

あの日、俺が彼女の世界を砕いた言葉。

あの日、確かに彼女の耳に届いた言葉。

あの日、彼女の世界を広げた言葉。

それを伝えた。

彼女は今、どんな顔をしているのだろうか。

胸の中の彼女は、震えていた。もう大丈夫だろう、体育館に戻って会長や蓮と合流してこれからのことを考えよう。

いつまでもここに居るわけにはいかない。

「月乃……」

「な……に……？」

「体育館に行こう。きつとみんな待ってる」

「……嫌」

「どうして？ さっきも言ったけど別に月乃が気に病む必要は

」

ドンツ、と胸に衝撃が走った。

いきなりのことで状況が素直に掴めなかったからか、足には踏ん張りが利かず尻もちをついてしまっていた。

月乃が、俺を突き飛ばしたのだ。

「嫌、嫌ね。嫌に決まっているでしょう？ なんで私があなた

のような屑と一緒にになって屑の溜り場に行かなければならないのかしら？」

「お前っ……録武ナナなのか」

外見は月乃そのもの。しかし、内面はまったくもって違う。黒く染まりきってしまった心が分かる。

こころなしか、月乃であるはずの目が少し濁っているような気がする。

「この月乃って子は何なのかしら。まるで考えていることが滅茶苦茶ね、見てるこっちが疲れるわ。折角目が覚めて早々に駒を見つけたいのに……。どこかしらここ、少なくとも職員室とやらがあった場所ではないよね、イライラするわ」

ズガンツ！ と俺の後ろの壁に穴が開く。

全く反応できなかった。弾丸に対してではない。彼女が銃を取り出し、発砲するまでの間のモーションに対してである。

いつの間にか彼女の手には拳銃が握られていて、その銃口からは煙が立ち上っている。

「まだ馴染んでいないようね、この身体。全く視点は低いし、腕は短いし、なんなの？」

独り言を呟いている。まるで、俺の存在が無いかのように。

いや違う、彼女にとっての俺は路上の石であり、存在はしているが

あえて意中に入れることもないモノなのだ。

これは危険だ。だが、相手の身体は月乃であって俺は反撃することが出来ない。

月乃に傷をつけることはしたくない。

だから今は、逃げるしかない。

見失わないように引きつけつつ、弾丸を避けつつ、だ。

そんなこと出来るだろうか。おそらく無理だろう。

彼女は月乃の身体に慣れていないと言った。だが、慣れていなくても拳銃を撃つことは可能なのだ。

当たらない確立の方が低いような気もする。

どうすれば、いい。

「さて、二発目。次は頼むよ私の身体」

どうすれば。

No.37:【核】(前書き)

夏休みに入りました！

更新速度の変化は………どうでしょう？

消えた人影の謎は置いておいて、俺は再び鵜川を探すことに決めた。今になって考えてみると、あの影こそが鵜川だったのではないかと疑えるのだが多分そんなことは無いと思う。

詳しくは覚えていないが、影のシルエットが女性的なものではなかったというのが一つの理由だ。

それと、靡くほどの髪の毛がなかった。

男かもしくは短い髪の女。そんなところだと思う。

確信に至るものが無いから言い切れることはできないけども、多分そうなんだろうと勝手に想像しておく。

「にしても……静かすぎるな」

当たり前のことだが、思わず口に出してしまう。

なんだか心もなくなってきた。

腰に付けたホルスターの中に収まっている拳銃に触れてみるが、安心はできない。

ちょうど三階もほとんど見回ったことだし、亮のいる一階にでも行こうかと考えていた。

二階は眞守さんが探しているから問題は無いだろうと思ったのだ。

そう言えば、一般生徒どころかテロリストの姿さえ見当たらない。

一体どこに居るのだろうか。

そう考えていた時、自分の横を誰かが横切った気がした。

後ろを振り向いて見るが、誰もいない。

でも、確かに何かを通り過ぎたような気がしたのだ。

気配と言うものが感じ取れる力が自分にあるのであれば、それは間違いない。何者かの気配だった。

「誰か、居るのか？」

問いかけるが、自分の声はむなしく無人の廊下に響くだけだった。なんだか薄気味悪くなってきた。

急いで階段を駆け下り、一階まで来た。

と、そこで誰かが窓から飛び出して、外へ出ていくのが見えた。

「誰だ？」

その誰かはすでに校舎の裏に回って、姿が見えなくなってしまった。あの方向はたしか、体育館裏に続いていたはずだった。

追いかけるかどうか、そんなことを悩む前に蓮は違う問題に直面していた。

「おいおいおい………なんですかあれ」

不恰好すぎる体格。身体はがっしりとしているはずなのに腕は女性的で細くて長い。足に至っては両方の長さがそれぞれ違うものだから、歩きたびに身体全体が傾いている。それに合わせるかのように角度を調整して付けられたかのような頭は、後頭部が変形して歪んでいた。

まるで、もともと別々だった何かをツギハイデ作られたかのような人形だった。

悪趣味すぎて、愛でる要素が欠片も存在しない何か。

嫌悪感と恐怖を植え付けるにはもってこいの姿だった。

テロリストによって作られたのだろう。片手には拳銃を握っていた。一階には亮がいるはず。

こいつは間違いなく見つけたイキモノを殺すだろう。

亮に合わせる前に、俺が潰しておかなければならない。

そんな考えが、蓮の頭の中には浮かんでいた。

「先手必勝！」

一撃で仕留められるように、と盛り上がった後頭部を狙って拳銃を発砲した。

だが、その音に反応したのか継ぎ接ぎ人形は、グルンツ！ と首が擦り切れんばかりに回し、こちらを向いた。

形相、歪んで笑う。

弾丸は避けられ、廊下の奥に消えていった。

「アア、イイツ！ 部ガイ者、発けん、殺ス」

ノイズが入り混じった声で、そう呟いたのが蓮の耳にはハッキリと届いた。

すぐに危機を察知して、曲がり角に隠れる。ズガン、ズガン、と廊下の壁に穴を開けながら、人形は迫ってくる。

発砲を続けながら迫ってくるのだ。

俺の姿が見えていないにも関わらず、人形は発砲を続ける。弾が無くなれば、次はこちらが一気に攻める番だった。

それまで待つ。奴の直線状に立たないようにして逃げればいい。ただそれだけのことだ。

俺は、やれる。

蓮はそう思っていた。その時は、まだ。

選択肢は限られていて、それが全て絶望への道につながっていたとしたら大抵の人はどうするだろうか。

あきらめるだろうか。あるいは狂ってしまったって、もうどうにでもなれと放棄するのか。

限られている中で最善の策を見つけ出し、幸せになろうと考える者はいないのだろうか。

おそらくは、いない。

だが、ここにはいる。

大切なものが懸っていてあきらめきれなくて、どうしても守りたくて、失くしたくなくて。

やっとみつけた本当の気持ちだったから、それは絶対に大切なものだったから。

選択肢を全て潰して、他の道に回る。

それが出来るのかどうかはわからないが、絶望した選択肢をわざわざ選んで滅びたくはなかった。

廊下を走る。後ろを振り向くと、彼女が追ってきていた。拳銃は片手に握られたままで、発砲する気配はなかった。おそらく、月乃の身体では振動に耐えられないのだろう。走った状態であればなおさら撃てるわけがなかった。

だが、俺はこの追いかけてこの意味が分からなかった。

彼女は職員室へと戻ることを望んでいるはずだった。俺を追いかける必要はないはずだった。

職員室の場所を吐かせるわけでもない、彼女は俺を殺そうとしていたし、俺もそうだろうと思っていた。

「な……んで俺を追いかけてくるっ！」

走りながらも声を上げ、彼女に問うてみるが返事は返ってこない。

彼女は俺のことを屑と言った。体育館に集まっている人たちのことを屑と言った。

眼中にないレベルで存在を否定し、路上の石のように人間たちに関心がなかった。

だが、彼女は俺を追っている。人間を殺すためにテロリストに協力している。

何か、矛盾を抱えているような気がしてならない。

人間は屑、関心などない。

だがそれと同時に憎い、自分を作った奴らが憎い。

殺すのか、無視を貫き通すのか。どちらも今の彼女には出来ない。いい。

俺を追いかけているのが一つの理由になるのではないのだろうか。

「録武ナナっ、止まれえっ！」

俺は腰から拳銃を抜き、彼女に当たらない程度に銃口をずらして発砲した。

案の定弾丸は彼女の横を通り抜けて行き、どこかへ消えてしまった。

だが、彼女は目論見通りに立ち止った。

「反撃、してくるんだ。へえ、そう。そうか、そりゃあ自分が死にそうになったらねえ。見捨てるか」

彼女は感情の抑揚を一切見せずにそうつぶやいた。

俺に向けて言っているのか。いや、実際そうなのだが、彼女は虚空を見つめている。

「その肩に訊くけどさ、あんた何のためにこの子を助けようとしているの？」

唐突に、彼女はそんなことを言った。

「なんで、そんなこと」

「この子に言ってたね、助けるだとか支えるだとか。私は意味が分からない、あんたたち肩はすぐに変わりを用意するのでしょうか、なんでこの子にこだわるのか分からない」

「俺は、今お前の言っていることの方が分からねえよ……」

「質問に答えてよ。あんた、なんなの」

「何って……」

質問の意図が分からない。彼女はどんな答えを欲しているのか、俺の純粋な気持ち？ そんなものあいつが聞いたところでどうなるっというんだ？ もしかしたら世間一般論が欲しいのか、それも分からない。

「ただ、守りたいって思ったから助けるって言った。それだけだ」

「スペアはいくらでも存在するのに」

「月乃は今ここに居る月乃しかいない。その身体と、歴史と、知能をもった月乃はここにしかいないから。その月乃を好きになったから、だから、言ったんだ」

「へえ、熱いね。じゃあさ、私が」

彼女は腕を上げ、頭の高さまで持ってきた。その手にはもちろん、実弾入りの拳銃を握っている。

「こうしたら、どうする？」

ニイイ、と彼女は笑い俺を試すかのような目でこちらを見ている。

「馬鹿なことは止める……。そんなことすればお前だって」

「私は残念ながら滅ばないよ。どうせまた屑どもが躍起になって直すに決まっている。だってそうしないとこの国が消えるから」

「は……？ 何を」

「私のカーヌルブレインは直されてまた他の誰かに移植される、そしてその子はまた私という別に存在する意思に怯えて生きていく。いくら技術が発達したからと言っても、何故か私のことは消せないのよ」

「だから何を言っているんだよ！」

「つまりは、」

彼女は拳銃の引き金に指をかけて、

「おい、止める！」

「この子が死んだって私はいつまでも生きているってこと。じゃあね、私はまた何年後かに目覚めるよ」

その指を引いた。



目を瞑ることしかできなかった。  
それは俺の限界であり、あきらめた証拠だったのかもしれない。  
速度。

追いつけないものは絶対に追いつけず、ただ引き離されるのみ。  
だから俺は、目を瞑った。  
絶望と憤慨を混ぜ合わせた黒に近い色をした心を抑えつけてなお、  
そんなことしかできなかった。  
だって、ただの人間だから。  
限界は超えられないら。  
どうしようもないことなんてこの世にはたくさん溢れているから。

一向に銃声の鳴らないことに不思議に思った俺は、固く閉じていた  
目を開けた。  
彼女はそのまま変わらぬ場所に立ちつくしたまま驚きに目を見開い  
ていた。

何も起きてはいなかった。  
現場は止まった。それをチャンスだと思った俺は彼女に向かって駆  
け出す。そのまま彼女に向かって手を突き出し、彼女を押し倒した。  
拳銃を取り上げ、廊下の奥に投げ捨てる。

「は、なせっ！ 人間ごときが私に触れるな！」

「くっ………月乃！ 月乃を返せ、録武ナナ！」  
廊下に転がりこんで彼女を押さえつける。それに対抗して彼女は腕  
を振り回し、足をバタつかせる。

だけれども俺は離さない。  
もし、離してしまえばこんなチャンスはもう巡ってこないだろうか  
らだ。

なんとかかしてこの状況で、録武ナナを月乃に戻す。

だが、方法は？

今は何も考えていない。ただ、彼女を離さないようにすることで頭がいっぱいだった。

そもそも思考に気力を裂いていることすらも厳しい状況だった。

女とは思えないような力で彼女は俺から逃れようとしている。対して俺も出来る限りの力で応戦している。

あまり月乃の身体を傷つけないのだが、先ほどのようなことがあつては困るのだ。

「私を、汚すな……。屑が！」

ぐらんつ、と頭が揺れる。

殴られたと分かるまでに数秒を要したが、彼女は離さなかった。

マウントポジションにいる俺は体重をかけるだけで彼女を押えることができる。ただ、それゆえにスタミナの消費も馬鹿にならない。気が抜けないのだ。

この状況が長引けば長引くほど俺には不利だった。だからその前に何とかしたかった。

彼女の両手を押え、動きを完全に封じる。

両方とも息が上がり、体力の限界だった。彼女は急に腕の力を抜き、ぐったりとしはじめた。髪の毛が顔を覆い、その表情はうかがえない。

「亮、……ごめん。私また迷惑、かけちゃった」

「月乃……？ 大丈夫か」

人格が月乃へとシフトしたのが分かった。

「やっぱり、みんなのところへは行けないよ。こんなの」

「……………」

俺は、何も言い返すことが出来なかった。

実際に起きてしまったこの状況。録武ナナとして動いている時も彼女の記憶と映像は持続している。

だからこそ、だ。

月乃は苦しくて、でも動けなくて。そんなジレンマの中で一人戦っている。

なんとか元には戻れないのだろうか、どうしても駄目なのか。

月乃自身が制御できていない。どちらかと言うと、録武ナナに主導権を握られているような感覚だった。

「苦しいよ、助けてよ。私、おかしいよ」

「大丈夫だって、月乃。俺が、俺が……」

そんな、曖昧な言葉で濁すことしかできない。自分が嫌になる。

「一つ、お願いがあるの」

月乃がかすれた声でそんなことを言った。

「何？」

「今、私が私であるうちに、この階から落としてよ。そうしたら、私と録武ナナは」

「駄目だ！ そんな事したって、何の解決にもならないじゃないか！」

「なるよ。私がいだから、こうなっているんでしょ？ 学校のみんな巻き込んでるんでしょ？ もうどうしたらいいかわからないの。もう誰にも迷惑をかけたくないの。だから、だから、お願い……だよ。私のお願い聞いてよ……亮」

「だって、そんなの。あんまりじゃないか……。聞けるわけないだろ。月乃に死んで欲しくなんてないんだよ……」

「どうして、亮はそこまで私のことを構ってくれるの……？」

「どうして……そんなの、そんなの、……好きだからに、決まってるだろ」

こんなときに、こんなことしか言えない。自分のことしか考えていない。

今の状況で、言うべきではないのに。でも、伝えるしかないと思った。

どうしようもなくなる前に伝えたかったと思っている自分がいる。

すでもうあきらめかけている自分がいる。

必死に隠していたのに、必死に押さえつけていたのに、崩れてしまった。

そうするともう、限界だった。

「どうしようもなく好きだから、死んで欲しくなんてないんだよ……。どうしたって居なくなるなんてことは考えられないんだよ、いつでもそばに居てほしくて、いつでも話していたいんだよ」

「うれしい。でも、」

月乃が何かを言いかけた時、廊下の向こうから誰かが歩いてきたのが分かった。

それは、絶望を報告する足音だった。

発砲する音が消え、奴の足音のみになって静かになった廊下に蓮は躍り出た。

「部、ガイ者、ハツケン。殺、コロ、ス」

カチカチカチと弾の無くなった拳銃の引き金を引いている。壊れた玩具のように何度も何度も引き金を引いている。その銃口からは何も放たれることはないのに、何度も。

「馬鹿なのかよおっ！」

対してこちらは拳銃を構え、発砲する。硬質ゴム弾が奴に向かって飛び、眉間へと吸い込まれていく。

はずだった。

またも擦じ切れんばかりに首を振り、弾を避ける。

弾丸を避けると言った行動を二度も見せつけられ、蓮は驚きを凌駕

して感心すらしていた。

「何だよお前、どんだけすげーんだよ」

だが、内心は恐怖していた。

理由は弾丸の残り数。驚くことに後一発しか残っていないかった。

考えなしに撃ったことも最早この状況では覚えていない。

焦りを感じ始め、これからどう対処するべきかも悩みどころだった。

蓮は一度拳銃を腰のホルスターに留め、継ぎ接ぎ人形に向かって駆けだした。

拳を作って振りかぶり、的確に相手の顔面を狙って放つ。

ガツン、と骨の感触が伝わってきて、蓮は顔をしかめたが、本来顔をしかめるべき相手は笑っていた。

血の気が引き、頭の一部が危険信号を鳴らす。

だが、殴った反動で蓮は動けない。全体重を乗せた拳だったのだ。それなのに奴は笑いながら蓮の空いた腹に、振り回した腕を叩きこんだ。

肺から空気が絞り出され、さらに壁に叩きつけられる。

ほとんど転がるようにして倒れ込んだ蓮は、この危機的状況でまともな思考をしていなかった。

言うなれば『白』。要するに何も考えられないくらいに混乱していた。

何が起きたのかもわからず、どこが痛いのかもわからず、どこに居るのかもわからなくなっていた。

死の文字だけが浮かび上がってくる脳から逃げることもできず、どうしようもなくなっていた。

「アア、ギ、死」

鮮明に聞き取れる死の言葉。

うつぶせに体勢を変え、なんとか立ち上がろうとするが、力が入らない。どれほどの力で飛ばされたのか、足が痺れている、腕が痺れている。

「ぶざけっ……………。死ぬわけないだろ。体力だけが取り柄なんだ

からよ……」

痺れる手足に活を入れる。　ガクガク震えながらも立ち上がる。腰の拳銃を確認。あった。

とりあえずは逃げて休息を取る必要がある。

または、誰かと合流するか。

痛む身体を引きずって何も深くは考えずに二階へと上がることにした。

階段まで何とかたどり着き、一段ずつ確実に上っていく。

何かおかしかった。

二階まで来て第一に感じたことがそれだった。

人の気配と言うものがまるで感じられない。　そして、何か水の滴る音が聞こえる。

自分の身体のこと忘れ、よろけながらも走り出す。

何かが見える。廊下の遠くの方に何かが。

赤。赤。水たまりが赤かった。

そしてそこに座り込んでいるのは生徒会長、だった。

「真守さん！」

「……………」

彼女は返事をしない。近くには髪を薄い赤に染めた少女が倒れている。た。

まさか、こいつと戦って？

近くにはナイフ、そして硬質ゴム弾も転がっていた。

相打ちには見えなかった。

硬質ゴム弾はあくまで気絶させるものであり、殺傷能力は低い。

代わって真守さんはナイフで刺されたのであろう、出血がすべてを物語っている。

もしかしたら、大量出血で死んでしまうかもしれないのだ。

ここにきて問題が増え、蓮の頭はパンクしそうだった。

どうすることができなのか、どうすればいいのか。そんなことをこの状況でまとめることはできなかった。

だけれども、答えを導く助けがあるのであれば、切り抜けることは可能であろう。

そう、仲間がいればよいのだ。

だが、仲間の一人はここで血に塗れ、もう一人は校舎の外にいる。

そんなことを考えているうちに継ぎ接ぎ人形が廊下の角から姿を現す。

なにか、この状況を打破する回答の導き手が無いのか。

あるいは答えにたどり着くための公式の一部でもいい。

「ギイイ。殺す、クロス」

奴は迫ってきている。

どこから取り出したナイフを掲げながら迫ってくる。

だが、そんな中で答えにつながる方程式は奴の後ろにあった。

№ 39・無名のヒーロー（前書き）

諸事情により早い投稿です。

最終話まであと少し、がんばっていききたいと思います。

いつものように、遅れて学校に来た。

そう、いつものようにだ。それなのに周りの世界はいつも通りじやなかった。

分厚い正面の門が閉まっており、学校の敷地内に入れないのだ。

この学校の門は、普段は絶対に閉まらない。閉まることがあるとすれば、緊急事態が発生した場合のみなのだ。

例えば、この街にテロリストが練り歩いているだとかそんな感じの。しかし、そんな起こってもいない心配事にすぎないことは俺には関係がなかった。だからいつも学校を途中で抜け出すために使っている抜け道から校内に入ることにした。

学校敷地を表すフェンスをぐるりと迂回し、学校のちょうど真後ろまで来た。

そのフェンスの一部分は、人が一人通り抜けられそうな穴があいている。だからと言って簡単には抜けられない。切り取られたような跡のフェンスの部分は針金が突出していて、下手をすると制服が破れるどころか切り傷を大量に負ってしまうのだ。だからここを抜けるにはポイントがある。

しばらくしてフェンスを抜けることに成功した。

様子がおかしかった。

いつもならば昼休みの喧騒に包まれているはずのこの学校がまるで息をしていないかのように静まり返っているのだ。

今日は休講だっただろうか、いや、あの校長のことだから間違いなく学校はやっているはずだった。

しかし、正面の門のことが気にかかった。

緊急事態時にのみ閉まるといわれている正門。

アレが閉まっっていて、しかも今学校は沈んでいる。何かがあったの

だと疑わない方がおかしいだろう。  
とりあえずは近くの窓から侵入し、学校内を見回ることにした。

おかしかった。

誰もいない、荷物は存在している。まるで、人だけが全て消失したかのような感覚でみんながいなかった。

三階まで上がっても、誰もいない。

何が起きているのか分からないまま三階をぶらぶら歩いていると、足音が聞こえた。

その時抱いた感情は、人がいたという喜びという感情ではなく何故か驚きだった。 どうしてか自分でも分からなかったが、とっさに化学実験室に入って隠れてしまっていた。

次第に足音は小走りになり、何度も立ち止っては走りを繰り返しているようだった。

何かを必死になって探しているような心理状況がうかがえた。そんなことは心理学などを知っていなくても分かる。明らかに焦っているように思える。

しかし、それはこちらと同じだった。 この化学実験室は他に外に通じる道が無い。

要するに、自分から袋小路に入ってしまったということになる。

ベランダがあるのだが、それもどこにもつなげておらず、さらに言えば、地面はコンクリート。 まともに着地なんてできるわけがなかった。

怖い。

何故だかそんな感情を抱いていた。

最近のテロ事件、正門の閉鎖、静まる学校。

さまざまな出来事がぐるぐると頭の中を回り、嫌な方向にしか思考が働かない。

例えば、この学校がテロリストに占領されてしまい、教員生徒全員が殺されてしまった、とか。

学校にテロリストが侵入してくるといふ妄想は何度かしたことがあったが、現実問題ではこれほどまで恐ろしいものだとは思っていなかった。

だが、まだこれは決まったことじゃない。

もしかしたら、ドッキリだったとか。もしかしたら本当に休講だった、とか。

だけれども、胸の内の不安は拭い去れない。

薬品置き場へとつながる扉を開き、移動する。それから薬品棚に手を伸ばし、手近にあった瓶を取る。それから薬品棚に

それを抱え、どうするべきかを考える。

この意味のわからない薬品をどうするのは自分でも分かっていないが、とにかく安全なところから今のこの状況を把握してから色々考えるべきだとは思った。

安全なところから、状況を把握。

これが肝である。要するに、誰にも見つかってはいけないという枷が付く。

これは自分が勝手に決めたことだが、胸の動悸がすさまじいことに事態が良くないことは分かる。

これが嫌な予感、というものなのかもしれない。

覚悟を決めた俺は一度窓から顔を出して、地上までの距離を目測で計る。

高い。

三階に居るのだからそれは当たり前のことだ。だが、感覚ではもっともつと高いのではないかと考えてしまう。

だが、移動しないと始まらない。

その時、ガラツツと化学実験室のドアの開く音がした。

誰かが入ってきた。

緊張が高まり、叫びだしそうになる。誰かも分からない、ひよっ

としたら先生なのかもしれないが、得体の知れない存在に今恐怖しているのだ。

不安になって仕切り一枚の壁の向こうを振り向いたとき、降りる方法を見つけた。

カーテンだ。

カーテンを縛り、ロープのようにして鳶って下まで降りればいいのではないだろうか。

最悪、二階までの距離に降りて、そこから飛んでもいい。むしろ、時間が無いからそうするしかないだろう。

カーテンを一枚剥ぎ取り、吊られたままのもう一枚とから結びをして強度を確かめることなく掴んで飛び降りた。もちろん、片手には謎の薬品が入った瓶を抱えて。

おそらく、それと同時に薬品置き場の扉が髪を茶に染めた男子学生によって開かれた。

飛んだときに目に入ったのは、二階のベランダだった。

落下防止のためか、三階より少しだけスペースの広い二階のベランダにギリギリ着地できた。

なんせ、落下防止策一枚分しか違わなかったため、カーテンを使わず普通に飛んだだけでは足を引っ掛けて、顔面から地面に叩きつけられていたはずだった。

カーテンのおかげで、三階の落下防止策が滑車のような役割を果たして、なんとか内側に来れたのだ。

高いところに懲りた俺は、ベランダから教室へ、教室から廊下へ移動し、一階に階段で降りることにした。

一階まで来ると、どこかで声を聞いた気がした。

だけれども、よく聞こえなかった。それが言語なのかすら分からなかったのだ。

ふと、向こう側の校舎を見るとそこには、まるで人の各パーツを継ぎ接いで作ったようなヒト型の何か歩いていた。

その瞬間全てがつかなくなり、背筋に悪寒が走り、吐き気をもよおし、恐怖で身体が凍りついた。

何が何なのかが分からない、そんな言葉を使うのも否定されるくらいに現実はずつ壊れていた。

このまま校舎をうろついていたら間違いなくあいつと鉢合わせる羽目になる。それに、あちらは一人ではないように思える。たった一人ではない、可能性の問題だった。

過大評価していた方がのちになっていいこともある。

もちろん、逆の場合もあるがそんなことは言っていられなかった。

一階の廊下の窓から外に出て、中庭を走り抜ける。それから何か方法を考えるとしたら？

まずは、逃げることを優先する。校舎外ならほとんど見つかることはないと思う。

体育館側には回らず、逆に向かってあいつの背後を取ろう。

そして、この薬品をぶっかける。先ほど落ちついて薬品の表示名を見たところ、『硫酸』と書かれていた。こんな危険なものを持ち歩きながら色々していたと思うと、びっくりする。

転んで自分にかかるだけで大変なのだ。それゆえに、武器としては心強い。

しかし、あいつを倒したり、撃退したりする必要はあるのだろうか。いや、倒さなければならぬ。

このとき、彼の頭の中には危険因子を排除しようとする考えしかなかった。

実行を開始する。窓から出て、中庭を一気に走り抜ける。

そんな彼の影を、一階を探索していた彼が視線の端に捉えていた。

外に出たから安全が確保されたわけではない。これからがむしろ本番と言っても差し支えがないだろう。

まずは、この状況をどうするか。

おそらく、この学校に人はほとんどいないと思われる。だから、

俺が出来ることは何だ？

警察に報告？ それとも学校内にいる生徒の解放？ それともテロ

リスト退治？

ヒーローで無い者に以上のことはできない。

そう、俺はヒーローなんかじゃない。なりきりで不良を演じてみて、意味のわからないことに試行錯誤しているただの一般人。ただの人。

だから、ここは一般人らしく。逃げて、一人だけで安全なところに行くべきなのである。

警察に連絡するのはそれからいい。

もとはというと俺は今日学校に来るつもりはなかったのだ。

月乃さんに会えるのであれば別として、教育機関が好きではない。

だから正直、このままテロリストのような奴らにここをつぶされてもいいんだ。

結果、俺は自分のことしか考えられない。

昔夢見たヒーローにはなれない。どう考えたって自分を犠牲にして他人を守るなんてことはできない。

ザリツ、と靴の底が地面の砂を捉える。

駄目だ、やっぱり。

人には出来ないことがある。どうあがいても無理なことは存在する。あきらめが、肝心だとは思わないだろうか。

その時、向こうの窓に走る影が見えた。先ほど自分が出てきた窓のところだ。

見たことがある。アレは、確か同じクラスの岩沢蓮。

よく見ると、その彼の後ろにはあの継ぎ接ぎ人形が迫っていた。拳銃を乱射し、岩沢に迫っている。

それを見て、俺が最初に思ったのはすごいという称賛の言葉だった。やっぱり次元が違った。ヒーローになれる者は素質から違った。

行動できるか否か、そこがすでに分け目だったのだ。

じゃあ、自分は諦める？

彼が吹き飛ばされ、壁にぶち当たるのが見える。

立ち上がる彼を見る。

ふらふらになりながらも、立ち上がる彼を見る。

自分は、何が出来る？

その問いの答えは、この瓶の中にあるのかもしれない。

化学実験屋から持ち出した硫酸の瓶。

投げるだけでいい。それだけでいいのだ。そうすれば彼がこれ以上どうなることもない。

俺も俺で、ジレンマから解消される。

果たして、動けるか。

「あああああっ！」

蓮は確信していた。その方程式が成り立つものだったと。

少し上ずったクラスメイトの声を聞いた継ぎ接ぎ人形は一瞬硬直する。

首だけを回転させたことが奴にとっての最悪だったのであろう。何かが入った瓶が投げつけられ、それが割れる。中から液体が散布し、それがすべて奴にかかる。

一目で危険なものだと分かったのだろう、奴は地面をのたうちまわりあがいていた。

その隙に眞守さんを抱え、奴との距離を取る。

瓶を投げた少年は息を切らせてこちらにやってきて、急に座り込んでしまった。

「お前だったか、桃川」

「んだよ……名前知ってんのかよ。前会った時は……馬鹿にしてたくせに」

変声期を越えていないかのような声で彼は返事をよこしてくれる。

「アレは、何をぶちまけたんだ？」

「硫酸」

「おおぅ……。なんだ化学実験室に居たのはお前だったのか」

「なるほど、俺も今合点いったわ」

ぐらり、とよろけながらも継ぎ接ぎ人形は立ち上がる。

額からは機械部が見え隠れしていて、それに加えて顔は爛れてしまつてさらに酷くなり、笑みが永久に張り付いたようにして口が不気味に曲がりついていた。

それは形容するに、『狂』としか言い表せなかった。

「ぎっ、ジュ。ゴrr……ゴロズツズズズ！」

一直線。向かうは蓮の真正面。

継ぎ接ぎ人形は腕を振り上げ、ナイフで蓮を切り裂こうと迫る。

その行動に対して蓮は全く冷静だった。

「ラスト一発。これなら当たるっ！」

最後の一発の弾丸を継ぎ接ぎ人形の額へと向けて放った。



## No.39:無名のヒーロー(後書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

この小説、Puzzlingly Number'sはもう少しで最終話です。

只今、新作を絶賛執筆中なので次にご期待下さい！

Puzzlingly Number'sが最終話を迎えた時に投稿する予定です。

また、気がついたら読んでくださるとうれしい限りです。

では、また次の後書きでお会いしましょう。

№ 40：無能と苦悩と（前書き）

朝から投稿ーグ（・）（・）（・）

「何だあ。学校って所はフジュンイセーコーイってのが了承されてんのかア？」

聞こえてきた言葉はそうだった。向こう側からやってくる声の主は間違いなくアイツだった。

先日の夕川町地下街テロの実行犯。俺らの前に降り立った壊れない実験台と自称する少年。

絶対悪が迫ってきている。

「お前っ……………」

俺はとっさに月乃の上から退き、少年と対峙した。

が、そこで重要なことを思い出す。少年には拳銃が効かない。何らかの理由で弾がはじかれてしまうのだ。

この状況で、少年を振り切って逃げる事が出来るのであろうか。いつ録武ナナになるかもわからない月乃を連れて。

おそらく、不可能。

「録武ナナさんよお、いい加減メンドウだ。さっさと目覚めろよ。俺は次の段階に行きたくてしょうがねーんだア！」

少年は吼える。むき出しになった欲望を暴発させるかのように。与えられた玩具を前に、高揚感を押えられない子供のように。

「くっそ！」

腰のホルスターから拳銃を抜き、壊れない実験台に向けて発砲する。案の定弾丸は弾かれ、天井にめり込む。パラパラと削られた天井が降ってくる。

「意味無し、ってかお前は俺のコト知ってんだろ？何を無駄なこととしてんだよ。……………思えば俺のことを知っている一般人なんてゼカイでお前一人じゃねえのかア？大した奴だよお前は。オモシロイ奴だ。そしてどうしてか俺はお前を殺そうとは思えねえ。何だろうなア、俺にもイミ分かんねえんだよ」

相手は自分のことを敵だとすら思っていない。障害にすらも同様に。

確かに何も出来ない。少年はそれを分かっている。俺だってそう思う。どうすればいいのか分からない。拳銃が効かない時点で俺の持っている対策術が無くなる。

俺に動く術はない。

「俺は録武ナナさえ手に入ればいい。クニさえ潰せるならそれでいい。ま、その後人間がどうなるかは知らねえけどな。それまでの間で無駄に殺そうとは思わないってかア」

「お前はっ……………テロで散々……………」

「アレは必要な死だ。殺しておかないとクニが反応しねえ」

「なんでそんな簡単に……………何とも思わないのかっ」

「思わないな」

少年の返答は淡白なもので、それゆえに恐ろしく悲しかった。

話を通じない。そんな事は分かっていたが、ここまでズレていると思うとやっつけていけない。

どちら也讓らない場合は、片方が折れるのではなくもう片方を折るしかないのだ。

「オマエたちが虫を殺す時に抱く感情と同じだ。邪魔臭い、目障り、分かるだろ？ 表の人間と裏の number はここまで差がすでに出来上がってる。もうどうすることも出来ねえ。だからオマエはじっとしている。たかが人間が、しかも表の人間が、何か出来ると思うなよ」

ジリ、と少年が一步を踏み出す。

月乃を連れて行くつもりだろう。

しかし、俺にだって持論はある。それに、本当にどうすることもできないのか。

なんでもかんでも丸く収められるとは思っていない。自己中心的理

論で自分たちの周りだけが平和であればいい。それを押し通せば少なくとも俺たちがわざわざ危険な校舎に出てきた結果にはなる。ほんの少しの勝利。それが手に入るのだ。

生徒会長さんも言っていた、俺たちの力なんてものはたかが知れている。だから、出来る限りのところで妥協する必要があると。だけど。

俺の妥協点はここじゃない。

震える足を強引に動かし、月乃の前に立つ。後ろで月乃が息を飲んだのが分かった。

何を馬鹿なことを、とでも言いたいのだろう。

しかし、俺にだって動く権利はある。

「ナニしてんだア、オマエ」

「何って、……月乃は連れて行かせない。抵抗する」

「ハツ、分からなかったか？ もう一度言う、表のオマエじゃ無理だ。一般人じゃ無理なんだよ！」

少年がこちらに向かって走り込み、拳を突き出してくる。

避ける暇もなく、宙をさまよっていた腕に突き刺さる。並大抵の

威力じゃなかった。

続けて鳩尾に一発もらい、視界が歪んだ。

もう自分がどのような状態で居るのかもわからないまま、手だけは必死に動かしていた。

だが、何も掴めない。

ドンツ、と地面が降ってくる。そしてようやく、倒されたのだと実感した。

身体はピクリとも動かず、指先も震え、何も出来なかった。

何も。出来なかった。

「ほら、見てみる。これが結果だア。何においても素人のお前が、死と隣り合わせで生きてきた機械に勝てると思ったか？ 無理に決

まっている。俺の答えは正しかったってワケだ」  
少年の声だけが響き渡る。  
月乃は、月乃はどうなった？

「オマエはそこで寝てる」

彼の言葉通りに、亮は瞼を閉じてしまっていた。

暗い暗い闇の中、一人の女の子が泣いている。

その子は自分にとってとても大事な子だったはずなのに、守れないでいた。

自分の弱さが憎い。自分に強さが欲しい。

願ったところで、叶うことはない。

では、打開策は見つからず、その女の子は泣いたまま一生を過ごすことになるのか。

違う。

嫌だ。

それだけは絶対に許せなかった。

たとえ敵うはずもない相手が立ちほだかっても。超えられない壁が存在しようとも。

自分は抗い続けたかった。

誰かに無理だと諭されて止めるのではなく、自分の限界を知って止めるのではなく。

止めない。

最後まで、死ぬまで、勝つまで。

だって、好きだと知ってしまったから。

闇の奥で泣いている彼女が好きだと言ってしまったから。

自ら放った言葉は取り消せない。行動も同様にそうだ。だから、立ち上がる。負けない。止まることはできない。

進め。

目が覚めると、見えない天井だった。

鉄筋が複雑に絡まって出来ている天井だ。やけに高い。

照明もちらほらと見え、やっとここがどこなのかを理解した。

「さ、桜参さんっ!」

声のした方向を振り向くと、そこには西種の姿があった。そこで確信する。ここは体育館であると。

「あれ、俺は……………」

起き上がるうとする俺を手で制して、西種は近づいてくる。

「部室棟の二階で倒れていたのを岩沢さんが担いで来てくれたんですよ……………。本当に心配しました。生徒会長さんも傷だらけだったし、岩沢さんも打撲してましたから……………」

「みんな、怪我してるのか……………。蓮はどこに?」

「今は生徒会長さんのところに。…………。生徒会長さんは血まみれで倒れていたそうです」

「本当か!??」

「…………。っ!??。そ、そうです。近くにテロリストらしき女の子も倒れて居たらしいです」

「行ってくる」

起き上がる俺を西種は再び制止に入る。

「駄目ですよ! 桜参さんだつて、頭を打つたんですから……………」

「いや、俺は大丈夫。それより、生徒会長さんの方が気になるから。あと、蓮にもお礼を言っておかないと」

西種は俺の行動を止めなかった。

「分かりました」  
ただ、そう言って静かに座っていた。  
分かっていった。西種だって不安だし、恐れている。  
他にも、自分だけ何もしていないという自分への嫌悪感などもある  
のだろう。  
だけど、それは抑えてもらわないといけない。  
理解することはできるが、話してやることはできない。  
余計に彼女を悩ませるだろうから。

シートと紐で簡単に仕切られた体育館の簡易治療室を回っていると、  
蓮の姿を見つけた。

「亮！ 無事だったか！」

「ああ、おかげさまで。……ところで、眞守さんは」

「……大量出血でヤバいところだったらしい。もし、ここに連れて  
くるのが遅かったら死んでいたかもしれないって」

「と、いうことは……」

「おう、今は大丈夫ってことだ！ これも桃川のおかげだぜ」

「桃川が……？」

「あいつが窮地を救ってくれたといっても過言ではない！ ……し  
かし、さつきから姿が見当たらないんだな」

意外だった、という言い方は良くないのかもしれないが桃川が助け  
てくれたのだ。

仲間と言うものは力強いものだと感じざるを得ない瞬間だった。

「まあ、照れてるんじゃないのかな」

「そうかもな。……あ、そう言えば眞守さんが亮のこと呼んでたぞ  
？」

「そうなのか？ じゃあ、案内してくれないか」

「よっしゃ、任せとけ」

蓮の後に連れだってシートの迷路をくぐっていく。

その間にもやはり、月乃のことが気が勝手仕方がない。

今どうしているのか、何か危険な目には合っていないのか。  
壊れない実験台は使うと言っていた。

月乃に、いや、録武ナナにどんな効力があるのかは知らない。ただ、  
国家転覆という時点で嫌な予感しかない。

正直、すぐにでも助けに行きたかった。

その反面、俺に出来るのかという不安な顔も見え隠れしていた。

「ここだ」

蓮に言われてシートをくぐると、保健室から運んできたのであろう  
ベットに眞守さんは横になっていた。

「ああ、桜参くんか。怪我は大丈夫だったかい？」

「俺は平気ですけど。眞守さんこそ、大丈夫ですか？」

「うん、ちよっと無茶しちゃったくらいかな。それより聞いてほ  
しいことがあるんだ」

眞守さんは一息つくくと、少し真剣味を増した声で続けた。

「姉さんがテロリストの首謀者についての情報を掴んだらしい。そ  
れで、弱点も分かったみたいなんだけど、問題は姉さんたちがここ  
に来るまでの時間とテロリストの行動なんだ。要するに、足止め  
をしなくちゃいけないんだけど……」

チャンス、という言葉が頭の中に浮かんだ。

しかし、逆にこれはピンチでもあった。

足止めと言うあまりにも重い役割を担わなければならぬ。

今、動けるのは自分くらいしかいないことぐらいは分かっている。

けど、今の俺があいつに敵うのだろうか。時間を稼ぐことはできる  
のだろうか。

「俺が、やります。やりたいです。でも……」

「重い役割ばかり押し付けてすまないね。私も動けたらいいんだけ  
ど」

「……………」

その時、シートが捲られて蓮が入ってきた。

やけに真剣な顔をしていた。それも束の間、彼は顔を崩してこう言

った。

「もちろん、俺も混ぜてくれるんだよな？」

彼はニカツと俺と眞守さんに向けて笑って見せた。

この状況で、だ。

やっぱり、仲間がいると心強い。

「蓮……………」

「細かいことはナシ。俺は俺で考えてる！」

「ありがとう」

行動するべきは決まった。

後は、自分の行動と運。

神の敷いたレールはどこへ向かうのか。

No.41：小さな平和（前書き）

今回はちょっと長めです。

次回、最終話（ー）

映画のようにはいかない。自分で制御できない物語を永遠と見せつけられても苦にしかない。

自分じゃない自分を見ているこの状況はどう考えても異常。

知っていた。何故だか知らないが、半ば悟るかのように理解した。だけれども、やはり納得はできない。どうして私が。

この世界は残酷だった。好きな人から告白を受けて、そして絶望を鳴らす鐘が訪れを予言する。

予言は当たる。

彼は倒れ、少年に連れられ、私は学校の制御室に居た。

もちろんそこに存在するのは私ではなく、私の脳である彼女なだけれど。

「オイ感情制御<sup>シミュレーター</sup>。門を開ける、ここから出る」

「録武ナナの状態がまだ完全ではないというのに、か？ 外に出てから支障をきたすと面倒だぞ」

「俺の命令に逆らおうつてのかア？ オマエも残骸<sup>ユースト</sup>みたいになりてえのか？」

「……………ただ、成功率を考えてのことなんだがな。焦ってどうするんだ、目的のモノは手に入ったはずだ」

「っ！ どうやら本当に壊れたいらしいなア」

「落ち付けと言っている。俺を殺してこの学校の門を開けられるのか」

「だから、早く開けやがれ。そしたら許してやるからよオ」

「何をそんなに慌てているの、私は正常。やるなら早く壊しなさい、そして屑も消しなさい」

私じゃない私が冷たい声で冷酷なことを言い放つ。

こんなの、おかしい。

「チッ、テメエは黙ってる！」

「壊れない実験台。あの少女のことが気になるのか？ それでそんなにも焦っているのか？ あんなのはただの妄言だ、あいつの言葉を信じる必要などない」

バガアン！ と制御室の壁が凹む。壊れない実験台が腕を叩きつけていた。

彼の目はつり上がり、息は荒く、とても正常だとは思えなかった。

「オマエが、何を、知っているんだ？」

「俺は何も知らない。しかし、お前が今焦っているであろうことは理解できる。だからこそ俺は助言をしているのだ。ここが最後の正念場ではないのか？」

「知ってんだよ！ だから門を開けろっつってんだ、ブチコワサレたくなかったらさっさとなア！」

ズダン！ とさらに壁が歪む。

何が彼をそんなにも焦らせるのかは分からないが、ここは口をはさむべきではないと録武ナナは思っていた。

「だがな、ほら、見るといい。まだ諦めてはいないらしいぞ」

モニターには学生二人が映っていた。こちらの部屋に向かって歩いてきているらしい。

私を連れ戻しに来たのだろう。安易に予想は付く、というかそれ以外に彼らの行動の選択肢はない。

こんなにも愛されている彼女は何なのだろうか。そんなにも屑に好かれる何かがあったのだろうか。

もとより、こんなにもnumberのために動いた屑は居ただろうか。

違う意味ではいた。しかし、自分の命がかかるこんな状況になってまで執着した奴は見なかった。

だんだん興味が湧いてきたかもしれない。

この人間にではなく、絶望に歪んだ情景に、だ。

「死にたいらしい。俺がコロシテくる。オマエらはここを出る準備をしている」

そうやって眼帯の彼はこの部屋を出ていく。

モニター前に座った男のわずかな微笑にも気がつかずに。

学校で身を隠す場所と言えば、三階の端にある学校の全ての管理が出来る中央制御室。

思えば、最初から門を閉めたりしているのだからそこに潜んでいてもおかしくはないのだ。

というかむしろ、そこに居ないとおかしいのだ。

だから、今こうして蓮と共に中央制御室に向かっているのだった。

「いや、超緊張するわ。 眞守さんの言った通りにできるんかな、本当に。俺馬鹿だし」

「大丈夫……だと信じよう。 眞守さんのシナリオ通りに行けば勝ち、行かなかつたらごり押しで」

「だよな、要は時間を稼げればいいってことだろ？ それなら簡単だろ」

「相手は拳銃効かないんだけどね」

「うーむ、気合で！」

そんな気の抜けた会話の中、廊下の向こうから異様な雰囲気を感じ取った。

何か禍々しいモノ。表現することはできないが、嫌なものだと言うことは分かる。

階段を上がる、ここを上げれば中央制御室まで一直線なのだが……。階段の上に、いた。

あいつが、いた。

「よオ、死にたがりのクズども。 すぐにコロシテやるよ」

眼帯の少年は階段の手すりを無理矢理引き千切り、こちらに向かって投擲してきた。

予想の範疇の外からの進撃、なす術なく後退するしかなかった。

「なんなんだよあいつ!? 階段の手すりを引き千切って投げるとかおかしいだろ!？」

蓮は混乱しつつも後退している。後ろは長い長い廊下、遮蔽物が無いためにこちらは有利である。

ただし、相手に拳銃の弾が効果があればの話だが。

「蓮、もう少し下がろう!」

言って、階段の見えない位置まで移動してから前を見据える。

煙で何も見えない。その向こうから苛立った声が聞こえる。

「何だよオマエら、逃げるとラクにならねえぞ? 俺もだるいことはしたくねえんだよ」

瓦礫の間を縫って彼は現れる。煙も引いて、視界が良好になってきた。

「オモチャみてーな拳銃ぶら下げやがって、遊びじゃねーってのオ!」

ガツン、と教室のドアに手を突っ込み、引き裂く。

残骸と化した教室のドアを片手で軽々と抱えた彼は、それを俺達の斜め上に向かって投げる。

天井に残骸がぶつかり、破片が雨となって降り注いだ。それをさらに後退して避けるが、彼もまた前進してくる。

「あいつ、無茶苦茶じゃねーか! 教室のドアまで腕貫通してたぞ!」

「蓮、気をつけて。あいつに拳銃は効かないよ!」

「だからこそこの、これじゃねーのか!」

蓮は今ほど注意した拳銃を構え、発砲した。

しかし、中身は硬質ゴム弾なんて柔なものではない、人をnumb erを軽々と殺せる実弾だった。

ガキイツ、と彼の右肩を捉える。だが、貫通することはなく、床に落ちる。

「流石に実弾はいつてえなア……。だが、それがどうした?」

ものすごいスピードで迫るそれを、蓮は拳銃を撃った反動で避けきれなかった。

「あつく……………」

後ろに吹き飛ばされ、拳銃は宙を舞った。

「蓮っ！」

駆け寄ってみると、頭から血を流していた。

荒い息を吐きながらも大丈夫、大丈夫と呟く蓮は相当のダメージを受けていた。

「ハッハア、脆いな茶髪の numberア！ 弾が命中して調子に乗ったのかア!?」

一歩、一歩、近づいてくる。 彼との距離は遠いが、一歩がかなり重く感じる。

怖い、それだけが頭の中にあつた。

「おい、亮。防衛ラインはこの廊下の最後だつて言つてただろ……………あと半分しかねえぞ」

蓮の言葉で現実に引き戻される。

廊下に吊られている時計を確認する。ノルマは後10分ほど、そこまで耐えられるのか……………。

「何をコソコソと喋つてんだ。死又ぞ？ まあ、俺がコロすんだけどなア」

今度は教室のドアを壊すことなく剥がし、手で掴んでフリスビーのようにして投げってくる。

蓮の拳銃を拾い、とつさにしゃがんだことによってドアフリスビーは頭上を越え、廊下の奥の壁に直撃する。

壁も、ドアもひしゃげて後ろは悲惨なことになっていた。

もし当たっていれば、後ろの壁のように胴体がひしゃげていたかもしれない。

時間は、まだ進まない。

もしもし、お姉ちゃん？ あと、どれくらいかかりそうかな？  
うん……、そう。 やっぱり10分つてのは無理だったかな。  
頑張ってみるって？ でも、難しいんでしょ。 交通状況も悪いらしいし。  
もしもの場合は？ ……そういうこと、か。  
じゃあ、大丈夫かな。 少し、時間が延びるくらいだもんね。  
あの二人なら、大丈夫だよな？  
私も、動けたらよかったのに、ね。

残り、廊下の最後まで数メートルと言うところで、俺たちは絶体絶命だった。

蓮はふらふらになってきているし、拳銃の弾ももう少ない。

一発撃つたびに痺れる両腕の力はもう無くなってきて、俺も次の一発当てられるかどうかであった。

それに対して向こうは遊び始めている。

特に狙いも付けずに破壊しては投げ、破壊しては投げ続けていた。彼の向こうの景色は残骸しか残っておらず、廊下は形をとどめていなかった。

「ハッハ、どうシタ？ オマエらへばってんじゃねえよなア！」  
廊下に設置されているホワイトボードを引き剥がし、投擲。

狙いは、ふらふらになっている蓮だった。頭を狙って、的確に潰そうとしている。

「危ない！」

とっさに蓮の前に躍り出て、庇う。

その時、肩に熱が発生した。

「亮！」

ついに廊下の最後、壁まで吹き飛ばされ、俺は絶望を知った。  
肩に一撃もらっただけで、身体から気力が全て根こそぎ持って行か

れた。

思えば、最初から気を張って集中してやってきた。

そうしないと危険なのは分かっていたから。それが今、限界に達したのだとこの状況で把握した。

驚くほど冷静な今の自分の頭は、『死』の一字だけが記されていた。

「亮！ お前、何してんだよ！ 俺なんか庇わなくなって、もうふらふらなんだから……」

蓮が駆け寄ってくる。もう、ゲームオーバーなのか。

時計を確認する。とつくに約束の10分は過ぎ、15分が経ちそうだった。

希望も消えた。最終防衛ラインも突破された。

お終いだ。

やはり、俺なんかが無理だった。

「おい！ 立てよ、まだ、まだ終わってないだろ！？」

「……………」

「鵜川を連れ戻すんじゃないのかよ。そう決めてここまで来たんじゃないのかよ！ 鵜川のこと、好きだったんじゃないのかよ、だから動けたんじゃないのかよ！ ここであきらめちゃうのかよ！」

蓮が、叫んでいる。

好きだった、でも、無理だった。そうじゃないのか？

まだ、まだ、あきらめずに動けって言うのか？

わずかな可能性にかけて？

「もう……………」

「もう、なんだよ。無理なんかじゃねえ！ やってやれないことは無いだろ！？ お前はテロをいくつもくぐり抜けて来ただろ、無理なんて言うな！ 鵜川を助ける！」

そうだった、俺は。

幾つかのテロをくぐり抜けて、ここに居る。

望んだものはなんだった？ みんながいる平穩じゃ無かったのか？  
そのために、がんばるんじゃないやなかったのか？

好きだった、でも、無理だった。でも、動かないといけない。

俺一人の問題ではない。蓮が隣に居る。

月乃が待っている。桃川が協力してくれた。眞守さんが助言してく  
れた、そして次は眞奈美さんが助けに来てくれるはず。

それまでの中継ぎとして、俺が抜擢されたんじゃないのか。  
歯車は一つ欠けると正常に作動しない。

希望までの道のりに何一つ欠けていいものなどはない。

立ち上がれ。

「立ち上がれ………よお、俺の足いいいっ！」

咆哮し、立ち上がる。

まっすぐには立てないでも、それでもいい。

ここで、最終防衛ライン上で、時間を稼ぐ。

「ここで、最終防衛ライン上で、時間を稼ぐ。いいな、蓮！」

「あつたりまえだろ、相棒！」

蓮と並んで立つ。

最終防衛ライン上でのサドンデス。ここからは退けない。

それが俺達を動かす、糧となる。

「ハッ、バカバカしいなオマエら。何だ、ネツケツ？ ジョウネツ

？ 腐ってんな、何をしようトもここで終わりだア。次は、アソバ

ず、コロす」

壊れない実験台は腕を振り上げ、最後の教室の壁に向かって叩きつ  
ける。

ガン、と彼の腕が教室の壁に当たった。

「ハ、ア、？」

貫かない。彼の腕は教室の壁に当たったままだ。

何が起こったのかも理解できず、彼は固まる。

「亮！今のうちに！」

「お、おう！」

拳銃を構えて、撃つ。

実弾が彼を目がけて飛んだ。

ダメージなんて最初から期待はしていなかった。ただ、少しでも効果があればと。

「キカネエって、言って

っぐ！」

深々と、弾丸は彼の太股辺りを抉って、貫通した。

俺たちと、そしておそらく思っていたであろう彼の予想に反して。

「な、に……が？」

彼は廊下に崩れ、地面を這う。

「何だ、如何なつてヤガルっ。なんで、俺の、硬化ガア……」

貫いた、弾丸が。

これは、勝利したのか？ 勝って、しまったのか？

その時、ポケットの中の携帯が震えた。

『もしもし。亮君？ いやあ、間にあつたのかな？』

「ま、真奈美さん？」

『そうそう、屋上に来てくれる？ そこに居るからさ。あ、テロ

リストの彼は放つておいても大丈夫だよ、次第に動けなくなるからね』

明るい彼女の声で、やっと安堵した。

それは蓮も同じだったようで、二人して急いで階段を上がり、屋上へと向かった。

屋上のフェンスに真奈美さんは寄りかかっていた。その手には発信機のようなものが握られていて、頻りにランプが点灯している。

「やあ、二人ともご苦労さん」

「真奈美さん！ どうして学校の屋上に……最初から居たんですか？」

「んーん、アレ」

そう言っつて真奈美さんが指した方向は上……つまり空だった。

そこには一機のヘリコプターが旋回していた。

「ま、真奈美さぁん……俺、俺、がんばりましたよぉ……」

蓮が血をだらだらと流しながら膝をつく。

「よしよし、よく頑張ったね。二人とも、本当にありがとう。」

一番気になるのは録武ナナのことだけど……大丈夫。なんとか出来るらしいよ」

「本当ですか！？ ……なんか都合よすぎませんか？」

「いや、録武ナナっていう人格は封じることが出来るんだ。ただ、何かの衝撃で出てきちゃうこともあるんだって。それを何とか出来るっっていう団体を……もぎ取った！」

「何やってんですか……」  
変わらない真奈美さんにすっかり緊張は解け、俺も蓮と同じように膝をついていた。

月乃はもう悩まされずに済むらしい。

よかった。本当に。

「お、月乃ちゃんを確保したらしいよ。これでもう安心だね」

「あの……」

「心配は分かるよ？ でも、今度合うのは録武ナナを封印してからだね。次会うまでの無事は私が保証してあげる。それで、駄目かな？」

そう言われてしまうと、仕方が無かった。

どの道、録武ナナをどうにかしないといけないのは分かっていた。それが早急に解決できただけでよかっただろう。

「良かったな、亮」

「ありがとうな、蓮。……もうなんて言っつていいか」

「何言っつてんだ。お前のためじゃなくて俺のためでもあるんだよ」

「そうか……じゃあ、良かったのか」

「これで、良かった。無事に全部解決だー！つと！ 眞奈美さんの下着が見える見える！」

屋上に寝転がった蓮は、早くもいつものペースを取り戻していた。

「ま、これはご褒美ってことでー」

「だってさ！ 亮、お前も！」

「いや、俺はいいよ………」

そこには小さな平和があった。

廊下で芋虫のように這っていた。

血が流れ出し、気持ちが悪い。血が流れるなんてことは生み出されてこの方なかったからだ。

「なんでだア、どうして、オレの硬化ガア………」

這う彼の前に、一人の男が現れた。

どこか遠くを見ている男だ。

特徴と言えば、ぼさぼさの黒髪に目の下のクマだろうか。彼は呟く。

「やっぱり、無理だった。まあ、ライター記者が少しテンポをずらしたこ

とにもよるが早いことは結構、以上」

「な……んだア？」

「それ以前に観測者シヤが精神的揺さぶりをかけたことも、以上」

「ナニ、言つてやがんだ………」

這う彼は男の靴を掴む。

「そして、フュート未来視が……私がか、以上」

「だから、何を」

男は動けなくなった壊れない実験台ハイトを担ぎ、それから三階の窓から下に落とした。

バスン、と地面に叩きつけられ全身から嫌な音が聞こえた。もちろん、硬化は出来ていない。ダメージが直に全身に響いているのが分かった。

もう息をすることしかできない。声は出そうにもなかった。

彼の顔に影が差した。何者かが彼の傍らに立ったのだ。

「り、……みつた」

「よく話せるな。感心した。だが、貴様は失敗した。国家転覆を成し遂げることはできなかつた」

リミッター感情制御の声だつた。

あいつは確か、奥の中央制御室に居るはずなのに。

「遅かつたのだ。テロを始める時期がな。貴様、愛玩用、使い捨ての三人がそろつた時点で始めるべきだつたのだ。貴様が躊躇した1年。俺を仲間に引き入れる前までの期間だ。その1年がこの運命を左右した。貴様がためらつていた1年の間に今回の鍵であつた錠越眞奈美は力を付け、昇格し、人としての能力をさらに高めた。桜参亮と岩沢蓮は桃川俊太と出会つて知り合いとなつた。国家は

危機を少しづつ感知し始めた」

ためらつてなどいない。俺は、ただ、準備をしていただけだつた。

慎重になつて、何が悪い……っ

「他にも、使い捨てを壊したのがまずかつた。あいつは手放すべ

きではなかつた」

リミッター感情制御はさらに続ける。

「貴様の敗因はありすぎて羅列することが困難だ。観測者……い

や、存在希薄クリアに執着したのが一番の敗因かもしれないな。貴様は

自分が裏の者だと言うが、それは子供が悪を名乗るくらいに小さな、そして拙いものだ。本当の裏と言うのは、表になど言つて回つたりはしない」

「う……ら」

「もう満足に話すことも無理か。仕方ないな、貴様専用の妨害電波ジャミングがかかっている。最後に教えてやるっ」

感情制御が遠ざかるのが分かった。  
足音がだんだんと離れていく。

「こうなることはすでに決まっていた。予定通りだったのだよ」

その言葉が耳に錆びるようにこびりついたまま、最期を迎えた。

№ 42・じじっだん(前書き)

最終話、じじっだんです！・・  
( )

## No.42：じじっだん

学校で起きたテロから数カ月後。

眞守さんはあのあと送られた病院から無事に退院し、普段通りに学校に通っていた。

蓮はと言うと、頭の傷が恐ろしいほど早くに完治してテロのあった1週間後には普段通りの生活をしていた。

俺は、大した傷を負うこともなく、病院に通うこともなくいつもどおりに。

西種だけは、いつまでたっても心配してくれていたが。

そして今日はずいぶん月乃が帰ってくる日である。

どこでいつ頃会えるのかはわからないが、今はまず普段通りに行動をしなければならぬ。

学校へ通う。普通のように結構大変なこの日常生活の一部分。

しかし、それを削ることはできないのだ。

とりあえずは学校へ通い、それから考えよう。そう思っていていつも通りにエレベーターでマンションの一階エントランスまで降りる。

ドアが開いたその先には、見慣れた少女が立っていた。

「月……………乃……………?」

今日、帰ってくるはずの少女。綺麗な金髪はそのまま、顔にある製造番号もそのまま、彼女はそこに存在していた。

「……………」

「い、いつ帰ってきたんだよ！　というか、今日じゃなかったのか?」

混乱していて自分でも何を言っているのかが分からなかった。

「なんでっ」

「え?」

何やら不満そうに月乃は頬を膨らませている。

いや、イライラしていらっしやるように見える。

「なんで、って言ってるの!」

「何、何ですか、月乃サン!」

「どうしてすぐに好きって言って抱きしめてくれないの!」

は？

……何を言ってるのだろうかこの子は。もしかしておかしくなってしまうたのではないだろうか。

それともこれは俺の幻覚で、月乃に会いた過ぎて見えたものなのかもしれない。

だからってこれはキャラ崩壊を起こしすぎなような気もする。

「な、に、を……?」

「もう……。帰ってきたよ」

そこで彼女は少し頬を赤らめて、そう言った。

「お帰り、月乃」

そしてやっと安心して俺も挨拶を交わすことが出来た。

月乃が帰ってきた。全員そろって、それで平和が戻ってきた。

それだけでも俺は満足だった。

「学校、行くのか?」

「今日から行く。ほら」

そう言っつて月乃は手を差し出してきた。

その意味が分かって、俺は顔が赤くなるのを感じながら反撃してみた。

「お前、結構恥ずかしい奴だな……」

「な、何よ! 自分から好きって言ってきたくせに! べ、別に私は……」

「何だよ、私は？」

「……………なんでも無いわよ、馬鹿っ！」

そう言つて月乃はエントランスから出ていってしまった。  
こんなところも変わつてはいなかった。

「待つてくれつて、悪かつた。俺が調子に乗りすぎた」

「じゃあ、私のことどう思つてる？」

「好きです」

「ちよつ……………。ば、馬鹿。そんな、え。そんな即答なの!？」

「お前なんでそんなにテンパつてんだよ！ お前が言わせたんだろ  
うが！」

二人して顔が赤くなつていた。そんなことに気がついてさらに恥ず  
かしくなる。

『おーおー。朝から熱いねえ』

上から声が降つてきた。見上げると、ベランダからは塩埜さんが顔  
を出していた。

見られた。

『まったく、なんなんさー。見せつけやがつてえ。 このこの』

『うぐ……………』

「し、塩埜さんっ！ 止めて下さい！」

『あれれ、月乃ちゃん。 否定はしないんだいいねえ。 若い子はい  
いねえ』

何を言つているんだろうかあの人は。 あなただつて十分若いだろう  
に。

「も、もう。 行くよ亮！」

「わ、分かつた……………」

『いつてらつしゃいお二人さん』

やけにうれしそうな塩埜さんを背に、学校へと向かつた。

学校への道のりの途中で、何一つ変わらない町を実感した。  
普段通りの通勤をするサラリーマン。 学校を目指す小学生。

いつもの情景が元に戻った。俺の横には月乃がいて、いつも並んで登校する。

「うおーい！亮、おはよう。って鵜川！帰ってきてたのか！」

何故か学校がある方向から蓮はやってきて、朝に似合わぬ騒がしい挨拶をしてきた。

「ああ、おはよう蓮。頭、大丈夫か？」

「え、なにそれ……頭がおかしいってことか!？」

「違うわっ！怪我だよ、完治したって言ったってさ、なんかあるかもしれないだろ？」

朝から騒がしくなってきた。蓮も月乃が帰ってきて喜んでいるようだった。

そんな中、月乃が小さな声で言った。

「おはよう……岩沢」

それは何気ない一言だったが、新たな一歩だと感じた。

一方、蓮は目を丸くして少し驚いていたようだった。

学校に着くと、生徒玄関の前に人だかりが出来ていた。

蓮がその場にいた適当なやつを捕まえて事情を聞いたところ、誰かが告白をしているらしい。

聞こえてきたのは、変声期を忘れたかのような少年声だった。

人混みをかき分けてとりあえず生徒玄関の前まで行く。

「おい、桃川……なにやってんだ」

「げっ、岩沢蓮！」

珍しくも話しかけたのは蓮だった。

そして、驚くことに桃川が告白している相手は酉種だった。

「ええと……あの」

「それで返事はどうなんだっ」

桃川が言つと、酉種は少しおびえつつしかしはつきりした口調で言った。

「あのっ……私、す、好きな人いますからっ」

「なん……だと……。それってもしかしたら俺のこと？」

「どう考えても違うと思う」

桃川はポジティブな上に馬鹿だった。

その告白が撃沈したあとに、上から陽気な声が降ってきた。間違いない生徒会長、眞守さんだった。

「おはよう！みんな、元気かね」

「眞守さんこそ、元気そうで……」

「いやいや〜まあね」

そんな会話をしつつ、俺は感じていた。

平和を勝ち取った。

数ヶ月前の出来事が全て夢だったかのように日常は平和である。

それは自分の望んだものだった。

これで良かった。

隣に居る月乃を見る。

少し変わった彼女は微笑み返してきてくれた。

この平和な日々の連続を、月乃とともにまた歩んでいこう。

また何か障害が立ちふさがっても、俺なら、いや俺たちなら乗り越えられる気がした。

願わくば、この平和な日常が終わりませんように。

「レールは右。次の分岐はいつごろなの？」  
観測者<sup>シイ</sup>である少女はそう訊いた。  
白のワンピースにそれと同様の白い髪。それに加えて神から愛され

たかのようなその美しい顔は作り物のようだった。

ここは立方体が鎮座する場所。いつもの集合場所のようなものだった。

立方体にはライトブルーの線が神経のように通っており、血液のように光は流れる。

「今はまだ視えない、以上」

対してぼさぼさな黒髪と、目の下の大きなクマが特徴である男、未来視ユイトが答えた。

一つの立方体の上にすわり、どこか遠くを眺めているようだった。

「記録は終了したぞ。今回は少し関わりすぎたな」

ライテイ記録者が立ち上がりそう言った。

彼は複数の名を持っていた。それは白い少女も同様だった。

だが、真名は一つである。

ゴトリ、と立方体の一つが開いた。

それに反応してライテイ記録者は言葉を漏らした。

「久しぶりに目覚めたな」

「そうだね、久しぶり」

聞こえない程度の声量だったのだが、立方体から出てきたヒトガタはしっかりと返事を返した。

ただし、脳に直接語りかけるようにしてだ。音は発生していなかった。

「更新はされたのかな」

「当たり前だ。お前が寝ている間にずいぶん増えた」

「そう、それじゃあ退屈せずに済みそうだね」

ヒトガタは立方体から出て、ライテイ記録者から本を受け取った。

「ふふふ………流石だね、面白いくらいに歴史は繰り返すんだね。変わらないなあ、人間もnumberも……あれ？これは人間でよかったんだっけ？」

ヒトガタは分かっているにもかかわらずあえて質問をしたようだった。

それに答える者はこの中にはいなかった。それは応える必要すら無かったからだ。

自分たちがそうしたのだから、目の当たりにしたものをそうそう忘れるわけがない。

ヒトガタは笑う。愉しそうに笑う。

そのヒトガタをここに居る者たちはこう呼んでいた。

ヒトガタ  
読者じ。

## No.42:じじっだん(後書き)

はい、ということと終わってしまいました。

自分特有のわけのわからない謎を残しての終了となりましたが、いかがでしたでしょうか。そうです、ご都合主義です。

『何だこれ腹立つ!』という人がいたら感想をお願いします(笑)  
第二部、という設定でいつか続編を書きたいと考えております。  
その時にでも謎を解明できればと思っています。  
ですがそれはおそらくもう少し後になると思います。

このPuzzlingly Number'sが完結したので、また新作を投稿しました。

良かったら読んでくださるとうれしいです。

new 天使と悪魔の共同戦線 <http://ncode.syosetu.com/n8550v/>

では、この辺で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8243m/>

---

Puzzlingly Number 's

2011年8月23日14時04分発行